魔宮殿の昔後世

魔宮殿

伯母「それは泣いても宜い譯さ、其花姫の戀人と云ふのがお前の家の御先祖に當るんだもの、其方は長い間、花姫の事を悲んでなられたが、月日の經つ内に其悲しみも止つたと見えて、後には西班牙の貴女と結婚された其子孫がお前なんだよ。」

お新は此言葉を心の中で繰返しながら、

「私の見たのは決して腦中の幻影ではない、私は確かに信ずる彼れは優しい花姫の靈魂なので、此塔の内に現はれると噂に聞いたのが實際だ、夫なら何も恐い事は無いから私は今晩も又噴水の側に番をしに居やうと、さしたら又現はれるかも知れないから。」

と獨語言つて、其夜中の頃總ての物音が靜まつて、かすかな鐘聞の中に坐つてゐたずるとアルハムブラの物見臺の鐘が十二時を告げた時噴水の水が再び動搖し出して、弗々、弗々と次第に騒ぎ出して遂には亞剌比亞の婦人が眼の前に現はれた、其樣子を見ると年若い美人で寶石を鏤めた立派な衣裳を着け手には銀製の琵琶を持つてゐるお新は流石に身體が打慄ふて氣を失つ

たが、幽靈の優しい微妙な聲音と青白い悲しげの顏色にも変らしい相がある
ので斯く我に迫つたのであつた。
すると幽靈は、
「人間の娘さんよ何事がお前の心を苦しめるのか、なぜにお前の涙が私の喰
水に邪魔をするのか、又何故にお前の嘆息が夜の靜かな譯りを搔き亂すの
か。」
と尋ねるからお新は、
「私は男が薄情なので泣いて居ます、私は私の寂しい捨てられた境遇を悲し
みます。」
と答ふると幽靈は再び、
「安心なさい、お前の悲しみは終りを告ぐる事があるが、お前の眼に見てゐる
ムアーの殿君はお前のやうに戀には不運であつた、お前の先祖に當る耶蘇
教の騎士が私の戀人であつて私を其故郷に連れて行つて其敎會の胸に私
を預ける筈であつたが、私は心の中では改宗してゐたけれども、私の信仰を

變へる程の勇氣が無かつたから逃げるのが遂ひ遲くなつて、其の爲に惡い神靈が私の身の上を支配する事になつて私の靈魂は魔法の爲めに此塔に囚はれる事になつた。然しそれも純潔な耶蘇教の心靈を持つた者が出て來て其魔法を破れば元の通り自由の靈魂になるのである。お前どうぞ其役目を勤めて下さらないか。」

お新は慄ひながら、

「私がそれを勤めませう。」

と答へた。

幽靈「それでは此處にお出で。恐い事は無いから。そしてお前の手を噴水の水に浸して私の身體に濺ぎかけてお前の宗旨でする通り私に洗禮をしてお呉れ。爾うすれば魔法が解けて私の靈魂は安らかになれるのだから。」

少女は躊躇う足を進ませて、其手を噴水に差入れ一掬ひの水を幽靈の青白い顏に濺ぎかけた。

幽靈は得も言はれぬ柔和な笑みを漏らして、其手に持つてゐた銀製の琵琶を

お新の足下に置き、其兩手を胸の上に組合せながら搖消す如く無くなつて了つた。

お新は驚き恐れながら廣間から退いて自分の寢床に入つたが其夜はどうしても眠る事が出來ない。そして夜明けの頃少し微睡んで起上ると昨夜の事は總て惡夢に魔はれたやうに考へられる。然し夫から廣間に行つて見ると幻しに見た事が眞實である事の證據がある。それは何かと云ふと噴水の側に昨夜見た銀の琵琶が旭日の光りに輝いてゐるのである。

お新は直ちに伯母の處に急いで行つて、昨夜の事を話し其證據として銀の琵琶を見て呉れと促した。善良なる伯母は少しも之を信ずる事が出來なかつた。するとお新は其琵琶を取つて彈き初めたから其調子に何とも云へぬ程好い心持になつて潔白なる伯母の永久冬の如き心の中に春風の如き溫和を覺えしめた。之は人間業の能く出來る所ではない。

此琵琶の非常なる力は日一日と著しくなつて來た。塔の下を通行する者も其調べを聞いては忽ち愉快の極物をも言ひ得ないで魔法に囚はれた人の　に

聞き慣れてゐるのである。其爲には心無き小鳥でさへ近傍の木の枝に集まりて囀音を止めて之を聽いてゐるのであつた。

愛らしき少女の音樂師は遂に其隱家から世間に引出された。地方の勢力家や富豪などが爭つて此音樂師を聘して饗應をしたり名譽を與へたりする樣になつて中には寧ろ其琵琶の測べで以て澤山の客を其家の座敷に集める爲めにする者もあつた。然しお新の行く處には必ず彼の嚴格な伯母が附いて居て其間に寄添ふて眼を鼠の樣にして監視してゐる。夫はお新の彈奏に夢中と爲つて狂氣の如く之を慕慕する群衆を警戒する爲であるのは無論である。處がお新の驚く可き技量は直ぐに市から市へと傳はつて、マッガ、セビール、コルトバなど次ぎ〳〵に其間題の爲めに大騷ぎをした。そしてアンダルシヤ地方に於ける人民の話の種はアルハムブラ宮殿の美しい音樂師の事で持切る樣であつた。それはアンダルシヤ人程音樂が上手で且つ勇ましい者は殆ないのに琵琶には魔力があり音樂師の少女は戀に戀奮してゐるのだから實際斯うなくてはならぬ筈である。

アンダルシヤ盆州が此の如く音樂狂になつてゐる間に、一種異つた仕方が西班牙の宮廷では流行つて居た。ヒリップ五世は世間で有名な通り氣の毒な憂鬱病者で總ての空想に耽る人であつた。からして或時は假りの病氣の爲めに呻吟きながら幾週間も寢床を出でられなかつたり、又或時は皇位を讓る事を出張されたりする。それは宮廷の華麗と王冠の榮譽とに憧憬るゝ皇后の最も嫌はるゝ處であるから、皇后は自ら慮慮なる國王の手を取つて玉座に導かる程であつた。

此憂鬱なる國王の妄想を拂ふには音樂の力を借ることを最も有効であると考へられた。皇后は此點に注意をされて音樂と奏樂と双方共巧妙な音樂師を御側近くに置かうと思つて有名な伊太利のファリネリと云ふ者を宮廷の音樂師として御抱へになつた。

此頃になつて賢明なる國王の心中には以前の狂想に勝る一種の優調を來した。それは長らくの間の憂鬱病の末にファリネリの音樂も、宮廷の提琴師主體の合奏をしやうと願つても悉く之を退けて、國王は空想から幽靈になつたつもり

で自分は全く死んだ者と考へて了はれた。

斯うして死んだ人の祟りで靜かにして居られるのは反つて皇后にも臣下にも便利な位であつて罪の無い話であつたけれども、困つた事には王は葬式をして呉れと要求して、それを强く催促され、果ては死んだ者を葬らないのは怠慢で無禮であると烈しく罵らるゝには殆んど閉口したのである。然らばどうすれば好いか、國王の命令を背く事は儀式の嚴重な宮廷の葬式係の眼には大罪である。それかと言つて命令の通り活きた盡の王を葬むるのは極惡なる魂逆に當るのだ。

斯くて皆が途方に暮れてゐる處に女の音樂師がアングルレヤ全州の人の腦髓を轉倒させたと云ふ噂が宮廷に達した。皇后は直に早馬の使者を走らせて此女音樂師を當時宮廷の所在地なるセント・イルデフォンソーの宮に召寄せられた。

夫から數日の後皇后は侍女を引連れてヴェルサイユ宮の祭禮を凌ぐ程に盛られた莊嚴なる御庭を散歩して居らるゝと、彼の有名なる音樂師は其御前に

導かれて來た。其風采は嘗に備いた樣なアングルレヤの服裝に彼の傑作の琵琶を持つてゐる。そして嫌遲な下眼遣ひをしてゐるけれども其美しさは實「アルハムブラの薔薇娘」と呼ばれた當時の清淨潔白なものであつた。

少女の傍には例の如く最高な伯爵が附添つて居つて皇后の御下問に對し少女の家系や其父母の名を申上げた。感慨堂々たる皇后陛下は此お新の容貌を愛で喜ばるゝと共に其家柄が國家に功勞ありながら零落して了つて、其父も又國王の爲に戰場に於て勇敢に戰死したと云ふのを聞いて尙更ら不憫の情を增されたのである。

「若しお前の力が評判の通りであつて、陛下の御心を慰ましてゐる惡魔を退散させる事が出來たなら、お前の身柄は以來自分が引取つて世話して進るから名譽も富貴も望みの儘になるぞや。」

と仰せられて、一刻も早く其技量を試さうと、直ぐにお新を彼の氣ひづかしい王樣の室に連れて行かれた。

お新は又も備いたまゝ其後に從つて番兵の行列してゐる中や宮廷の諸役人

の群集して居る中を通つて行つた。そして遂に黒い布を下げた一つの大きな室に達した。其處の窓は日光を遮る爲に閉さしてあつて、僅の燭臺に點された黄色の蠟燭が悲しげの火を放つて、葬衣の服を着た人の物言はざる姿と蒼はしげの顔色の侍臣が足音を忍んで往來して居る樣子とを朧ろげに照し出した。其眞中の葬儀用の棺架の上に兩手を胸の上に組み合せて其鼻の先き計りが漸く明らかに見ゆる位にして死んだ啓の王樣が寢て居られる。皇后は默つた儘此室に進入つて薄闇い一隅の椅子にお新を掛けさせて、さて彼の髮櫛を弾せよと命ぜられた。

最初お新は打慄ふ手で髮櫛に觸つたが次第に氣を靜めて勢附きながら、遂に彼の空を流るゝ如き調べを彈出して聽く者をして人間の音樂と思はしめない程巧妙の域に進んだ。王樣は又自分では既に死んで了つて精靈の國に居ると思つて居らるゝので、之は其遠りの天使の音樂であらうと考へられた。然に其考へは次第に變つて來た。音樂師の歌ふ樂は矢張り人間である。お新は先づアルハムブラの古代の榮華とハアー人の成功に關する傳說的の小曲を彈

じた。其アルハムブラ宮殿の懷古こそはお新の離物語に關聯するものである。斯くして葬儀の室は沼澤なる音調で響き渡つた。そしてそれは憂鬱な王樣の胸中に泌み込んだ。王樣は首を擧げて近彷を見廻はされた。そして椅子に腰かけて其眼を光らせ出して遂に床の上に突立ちながら劍と手牌を持てと命ぜられた。

音樂の感動否な魔法の髮櫛の効力は究竟に奏された。憂鬱の惡鬼は追拂はれて死んだ人が再び蘇生した。夫から室の窓は明放され西班牙の太陽の榮華ある光輝は今迄悲しげであつた一室を輝した。此時皆なの眼は愛らしき女魔術師を探したが、其居た處には只髮櫛が置いてある許りで其姿は消えて了つて居たと思ふ時、彼の御小姓の微丸の胸に抱かれてゐる少女があつた。

此率爾なる若夫婦の婚姻は間もなく非常な莊麗な儀式を以て施行された。然し待ち玉へ、讀者は何故に御小姓の微丸は今日迄の長い間お新に消息するのを怠つて居たかと尋ねらるゝであらう。夫は全く高慢なる干沙好きの父親の爲め反對されたからであつて、お新が其薄情を怨む心が漸く遠かに消えたの

は若い者の常として一度顔を見合すれば總て過去の悲懷を打捨てゝ直ぐに仲好くなるのであるからだ。

然しどうして嚴丸の高慢な千沙好きの父親が此結婚を許したであらうか。

嚴丸の父が多少逡巡したとするも夫は皇后からの御辭がゝりがあつたのとお新は陛下から高貴な位と御褒美の品とを頂戴して居たから左程の困難もなく之に贊成したのである。加之、お新の持つてゐる魔術の力は知らるゝ通り魔術の力を持つてゐるのでどんな頑固な心でも此爲めに支配されて了ふのであつた。

夫から其魔術の備つた魔書は其後どうなつたであらうか。

其點が最も奇妙であつて總て此物語の眞實であるのを證據立つるものである。魔書は暫らく其家に藏つてあつたが、世間では彼のファリキリが單に嫉ましさの爲に之を隱匿つたと思つてゐる。そして其死んだ後は伊太利の他人の手に渡つて其効力を知らない爲に銀を飾櫃して了つたので、其糸のみが再びクレモナ提琴の古いのに用ひられたと云ふ事だ。其糸は特其魔力の幾分を有

してゐると見えて、是は極く内々の話だが今でも盛世界を騒はしてゐる、それはパガニニの提琴の糸であるのだ。

第三節

△七層門の古跡を見る
△魔神の守護と迷信
△井戸端會議の寫生

水汲爺の話

アルハムブラの城門の一つで予等のホテルより餘り遠からぬ所に七層門と云のがある。此門は元來アルハムブラ城の裏門見たやうなものでマホメット最後の王ボアブデルが此城を明渡して亞弗利加に去つた時に通過した所だと言傳へてある。而して其當時の降伏談判の一條件として其行列が通過して了つた後には之を壞して了つて其地下の室を悉く埋めて了ふ約束であつた

との事で、其後一千八百十二年に英國が此處を引上ぐる時彈藥で爆破させた爲め王の願は偶然にも其目的を達して、以來半分壞れたまゝの怪しげな廢塔となつて了つて其地下室なるものも誰とて掘つて見た者が無いのださうな。

元來アルハムブラの城壁は一つの丘陵全體を取込んで築いた者であるから、其外廓を作る時丘陵の低くなつた方には自然高い城壁を築上げて、其內側を他の高い方の地面と平均させると言つた樣な工事を施したのらしい、からして地上に現はれてゐる部分よりも地の下に埋まつて計る處に多くの勞力を費して居る譯で、從つて彼の如く多くの地下室を有してゐるのである。此門が七層門と言ふ名で呼ばれてゐるのも、地上に現はれてゐる部分が七階になつてゐるのでは無くして、地下に埋れてゐる部分が七段の室になつてゐると云ふ意味で、つまり七段の地下室を有してゐると云ふ譯である。然し今日の所は彼のボアブダルが埋めさせたとの傳說がある計りで誰も之を見る事は出來ないが、アルハムブラの建築された當時の事を想像して見ると其下に七段の地下室を有してゐると云ふ事は有り得可き事實と考へられる。

此七層門は門と云ふよりも塔と呼ぶ方が適當であらしいゾンシトヨ、プービングの書いたものを見ると此塔には地下に埋もれてゐる莫大な寶を守護して居る魔神が居るとしてある。現代の西班牙人も亦此處の地下室の第四層から下の各室にはボアブダル王が隱して行つた莫大な財寶が埋められてゐると信じてゐる。つまりボアブダル王が此處を退去する時の條件として其入口を破壞させて了つたのは、又何時か自身に歸つて來て之を掘出す者であつたと云ふ事はグラナダの人民が一般に信じて居る處らしい。然し誰も之を掘つて見ないのは此魔神の守護があると云ふ迷信の爲に妨げられてゐるのであらう。プービングの書いてゐるものを見ると、此處の地下室には或るマホメット王の財寶が埋められて恐ろしい魔神が之を守護してゐる。其魔神は時々深更に首の無い馬の形で現はれて、アルハムブラの庭園やグラナダの市中を駆け廻るので、其後からは又七頭の猛犬が烈しく吠へて之を追駆るとの事である。之は勿論例の傳說から生じた迷信であるけれども、此ベルクドー即ち首の無い馬が來ると云ふ事はグラナダの婦女子が泣く兒を黙かす文句として今

日迄傳へられてゐる。又一説によると此首無し馬は或る獰猛なマホメット王の靈魂で其生前に七人の皇子を殺して此地下室に葬つた怨に因つて、七人の皇子の怨靈は七頭の猛犬となつて追駆け廻るのだと云ふ。此等の傳説は婦女子や兒守などのお伽話として殘つてゐる計りでなく地方の堂々たる歴史家や風土記の著者などにも信ぜられてゐるのであるが、予は彼のボアゾデル王が此門から出てアルハムブラ城を退却したと云ふ事實より外には信ずる事が出來ないのである。

予は此奇怪なる傳説を有する七層門の寫生に出かけた。然るに來て見れば只大きな四角な塔の様なのが倩れにも破損したまゝで、水平である可き頂上の矢間の所も全く形狀を失つて、寫眞形の通路があつた筈の所には只洞穴の様な形を存してゐる計りでボアゾデルの要求通りに其通路を閉いで地下室を埋めて了つたものだとの傳説が實際であるやうな感がした。

予は見に角此破壊された通路の洞穴の如くなつて居る内に這入つて見たが地下に這入る様に少し低くなつてゐる所があるから、之が即ち地下室の入口

だなあと思つてズン〳〵進んで行くと、中は眞闇で足下には石塊がゴロ〳〵して居て間も無く先が閉がつてゐる有名なる七層門も見た所是丈けのもので、續として傳ふ可き程のものでもないから、又例の妖怪的傳説でも研究する事にしやうと思つて、此度は全く方面を變へてグラナダの市街へと出かけた。

グラナダの市中及其附近に於て最も繪畫の材料とする可きものは噴水である。柘榴の都のグラナダは又噴水の都でシエラ、ネバダ山脈の千古の雪が解けて流るゝ溪河の水は清冽無雙の飲料水をグラナダの全市民に供給してゐるので、街路の十字形に爲つてゐる所や又は勾配のある坂などの車道になつてゐる曲角の側即ち蛇の様になつた側面などの空地に必ず水道の共同栓見たやうな噴水がある。否な噴水と云ふよりも寧ろ水道の共同栓と云つた方が適當で、蛇の所にあるのは多くは大理石で飾つた後圍があつて其から噴水の口が龍頭の様な形をして突出てゐる。又此空地の附近には橙子やレトロンの樹があつて涼しい木蔭をなしてゐる。此處は附近の世話女房や下女お婆などが水汲みに來た序に井戸端會議を開く場所である。

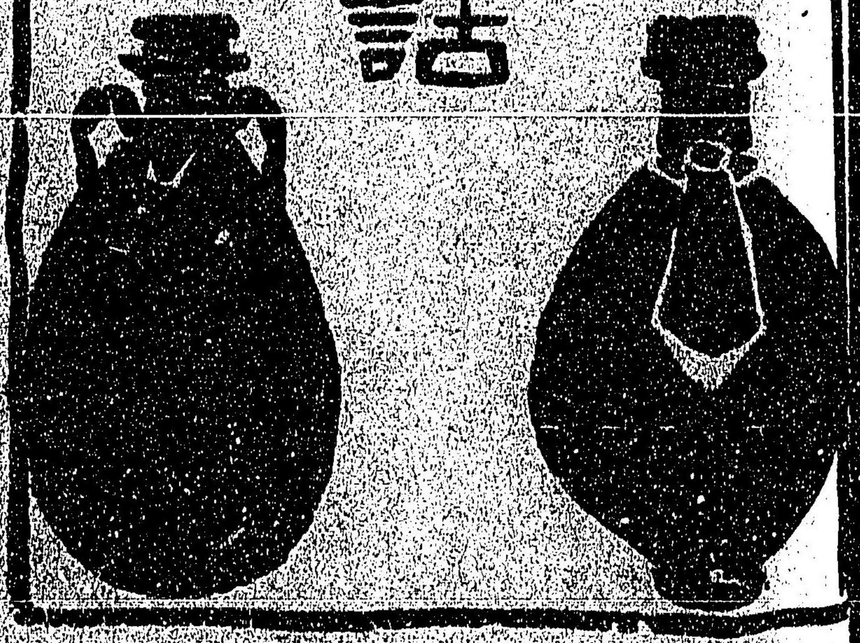
此井戸端會議たるや、頗る大規模の集會で此等女職員の外職員の背に水甕をつけて水賣りを渡世にしてゐる水汲男や僅か許りの年金で餘命を繋つてゐる殘兵の樣な閑人さへ此群に交つて長き夏の日の朝から夕まで幕無しに井戸端會議をやつてゐる。其長い時間を眞逆始から終まで居續ける者も無からうけれど、一寸通りがゝりなどに眺むるとなか〳〵悠々として何時立去るとも云ふ樣子が見えない。そこで暇さうな橙子の花の香に酔はされた職員は立ながら居眠りをしてゐると一方には噴水の水の音きぬと同じ樣な能辯を振つてゐる。それに水汲男などが時々戯謔を言つては婦人連をドッと笑はせるなどゝ、如何にも一幅の西班牙風俗畫で是も又予が寫生帖から逸する事の出來ないものである。

畢竟此等の噴水は水を汲む爲めと納涼をする爲とに出來てゐるので三人集まれば姦しきは東西各國皆然りで別して話好きの身振りの上手の西班牙婦人連と來てゐるから此處に井戸端會議の催さるゝのは當然である。極言すれば世界の學問をせぬ西班牙國民は實に井戸端會議的に出來てゐるのである。

予は輔た氣の毒の感を催した。此世界の文明から後れて亞剌比亞の夜話にありさうな奮式の市街に井戸端會議の能辯家を以て自ら許してゐる國民は是れ亡國の民である。縱て水甕を頭部に載せる習慣の存してゐる國民と驢馬を使用してゐる國民は亡國の民である。文明の衰退した半島國で此二種の習慣を有してゐる所を數へて見たら何れも亡國の狀態であるのに讀者諸君も首肯るゝであらう。

此等の亡國狀態研究は政治家の仕事であつて予は三脚を立て畫布を擴げさへすればよいのである。而して此噴水を中心とせる井戸端會議の群衆は風俗畫としても好畫題であるから、縱て適當の位置から寫生を始めると、物見高いのと惡戯好きとで有名な國民であるから、彼等の本職たる水汲否な井戸端會議を其所退けにして皆々予が方に眼を注ぎ次にゾロ〳〵出かけて來ては畫面の前方に立閉がつて寫生の邪魔をする者もあれば、遠くから水を注掛る者もある。之はコルトバの有名な噴水の溢れる樣に坐んに出てゐるのを寫さうと思つた時も遣られた惡戯で噴水の寫生をする者に水を注掛るとは彼等亡

水汲爺の話



國の民としては相應な仕方であると諦めて、腹も少しは立つけれども何と云つても美術心も無ければ公德心も無い世界のある事を知らぬ國民として殘念ながら寫生を中止した。

偖話は別の方面になるがアルハムブラ城廓内の廣場にも此種の噴水のあつて最も清冽な水を出したさうだ。然し近來此水源や道中を修繕しない爲に次第に水が出なくなつて了つて、有名な獅子の庭（コートオブライオンズ）の噴水なども漸く一年に一度丈け日を極めて水を出すと云ふ位になつてゐる。只前記にも述べた通り水道は壞れて水が次第に出なくなつても未だ何處にか水の通つてゐる道があると見えて靜かな夜などに地の下の水音を聞く事が出來さうである。

次の話はアルハムブラの廣場の噴水中で最も清冽な水が尙澤山に出てゐた頃の事で、此時分にはグラナダの市街には今日の樣に澤山の共同栓的噴水の設けが無つたのらしい。其爲に例の井戸端會議も此處で開かれ、市井を酌賣する水汲男も水甕をつけた驢馬を牽いて此處迄登つて來たものらしい。

其話は正直なる水汲爺さんが寶探しをしたと云ふ一場の怪談である。

水汲老爺の話

アルハムブラの城廓の内に、丁度古宮殿の前庭に當る所に一つの噴水がある。此庭の事を地下泉の庭と呼ぶのでも此噴水がアルハムブラ第一のものである事が判る。此噴水は大盤石を貫いて地の下深く掘つたのであるから其清い事と冷たい事は無類だ。此等の噴水は無論マホメット宗の者が掘つたので元來回教の亞剌比亞人は噴水を作るのに非常に巧みで其爲には勿論金も勞力も惜しく使用したのである。

此井戸の水はグラナダの市中に其名が響き渡つてゐるから、馬車の背に水瓶を乘せた水汲男が朝早くから日の暮るゝ迄アルハムブラ城廓の前なる道水の坂道を往來するのが絶えた事が無い。

繪畫などにも見えてゐる通り、此等の熱國では清水や井戸端は多くの人が集まつて世間話をする所であつて、今故に紹し出すアルハムブラの噴水井戸も又永き夏の日の倶樂部である。此の井戸端會議では市の閑人や老爺さんや、古

宮殿の書をしてゐる廣吳などが噴水の周圍にある石の腰掛或は木蔭の石盤の上などに陣取つて古宮殿に關する怪談や水汲みに集まつて來る男の評判や市の方の新聞や何や彼や手當り次第出放題の事を種として只喋もなく饒舌り續くるのである。

此噴水には水汲みを商賣としてゐる者許りでなく近傍の女房や下女などが頭の上に水瓶を載せて水汲みに來るのが矢張り井戸端會議の傷癒者にもなり又發言者にもなるのである。

偖此所に毎日集まつて來る水汲男の中に頸の太い脊骨の強いそして脚の極く短かい短兵衛と云ふ爺さんが居た。元來西班牙の水汲男はガリシヤと云ふ地方から出るので勿論西の靴磨きが多くナポヤードである如く、ホテルの荷物扱人が瑞西人であるが如く、東京の米搗き男と湯屋の三助が多く越後から來る樣なもので、此短兵衛さんもガリシヤの生れであつた。

閑話休題、水汲の短兵衛爺は初めの内は大きな水甕を頭の上に載せて水の賣りをしてゐたが、次第に客が殖えて來たから一頭の驢馬を買ふ事が出來

た。短兵衛は此耳の長い畜生が出來てから水甕二個を其背につけ無花果の葉で以て其覆をして水の溢くなるのを防ぐ事にした。

廣いグラナダの市で水汲渡世をしてゐる者で此短兵衛程精を出す男は無つた。そして例の驢馬を追立てゝ其後から愉快さうな聲を張上げ、

「水は買ひませんか、冷い〳〵水、雪よりも冷い、水は買ひませんか、アルハムブラの水の氷なのは入用ませんか、玉の樣な清い水は買ひませんか」

と觸れ歩くのが評判となつて、加之に美樣や下女に迄お世辭を振撒く爲め頗る多くの客が出來て正直短兵衛の水と云つて方々で歡迎されるのであつた。

水汲男の短兵衛は斯んな風でグラナダ市中の最も愛嬌ある愉快な人間として知られて居た。然しながら世間では大變で笑つたり戲謔を言つたりするからとて必ずしも其人が心中に苦勞の無い者ではない。此樂しさうな顏色の下に正直な短兵衛は澤山の心配事を有つてゐる。

正直短兵衛は所謂る修道者の子澤山で沸騰師の口調で云へば年子の餓鬼が

個煮にする種ゐるので、晩方になつて短兵衛が仕事から歸ると子供等の食物を求むる聲は巣の中の燕の兒見た樣に喧しい所で短兵衛には無論お神さんがある。所謂る苦樂を共にする妻君が居る譯だが其お神さんは只お神さんと言ふ丈けで短兵衛老爺には何の助けにもならぬのであつた。

此お神さんが短兵衛と結婚する前には村の評判娘で盛鬚りの巧者なのと三味線が上手なのとは尙更ら本人の自慢であつたから今では好い加減の墻さんになつてゐるけれども日曜日毎に近處の山の神巡中と遊び廻る事丈けはなか〳〵止まないのである。それも一週間に一度位なら好いが酉班牙では殆んど毎日の樣に種々な神樣の祭日がある。其度毎に短兵衛のお神さんは夫の大事な商賣道具の驢馬に乘つて出かけるので、短兵衛の助けをする事などは思ひも寄らぬ。そして會々家に居るかと思へば疲れたとか何とか云つて一日寢床を離れない。其代りにお饒舌と來たら近所近邊を駈ずり廻つて決して何處の山の神にも後れを取らないのであつた。

斯んな噂を持つた亭主に限つて必ず山の神の壓制に服從するもので正直短

兵衛は其妻子を養ふのに大變な苦勞と心配があるけれども、然し短兵衛は其驢馬が重い水甕を負ふて行く樣に何にも云はないで從順くして居るので時時内處では首を傾け耳を動かす事がないではないけれども其噂が家事上に不始末なのを咎むる事は決してしなかつた。

短兵衛は又其子供を大變に愛して居る。それは先づ鳥が其雛を可愛がる樣なものであつたらう。然し短兵衛は自身と同樣に首の骨の强さうな、脊の長い脚の短かい第二の國民が殖へて行くのを楽みにして、お祭の日などは僅許りの駄菓子を買つて曾を引連れ、一人を脊に負ひ二人は手を引き其殘りは衣服にぶら下らして遊び廻るのを無上の愉快として居た。其時お神さんの方は例の麗り朋友と共にダロー河の岸にある國堂の前で麗り狂つてゐるのである。

或る夏の日の夕暮多くの水汲男は最早其日の仕事を終つて家に歸つて了つた頃の事である。其日は非常に暑かつたけれども夕暮から涼しい風が山を吹の男さへ愛撫かに此愉快な空氣に陶されては夜の更くるを覺えないと言ふ譯であつたから、水を買つて喫れる夢客の人々も多くは家の外に涼みに

出てゐるから短兵衛は子煩悩の父親相當な考へを起して、子供等がさぞ喉を空して待つてゐるだらうと思つて、

「何一度井戸迄行つて今度の日曜日に子供等に何か買つてやる餌を儲けやう。」

と獨言ちながら又もやアルハムブラの坂道を上り初めた。そして例の噴水の在る所に來ると井戸端會議も最早疎くに解散したと見えて、只一人の亞剌比亞の老人がゐる許りである。ムアー人はマホメット宗の者であるから短兵衛は驚いて立停つた。夫から多少氣味が悪いから其方許りを眺めてゐると亞剌比亞人は短兵衛を手招きして此方へ來いと云ふ意を示し、

「私は身體が疲れて其上病氣だから市に歸る事が出來ないから、どうか其驢馬に乘せて行つて呉れる事は出來まいか。爾うすると水を汲んで行くよりも三倍の賃錢を出すがどうだね。」

正直な短兵衛は此旅人の頼みを聞いて氣の毒で堪らなくなつて、

「お安い事です。なあに賃錢なんかどうでも好い。そんな事をしたら神様の罰

が當るから。」

と言つて水を汲むのを止にして亞剌比亞の旅人を驢馬の脊に乘せながら徐ろ徐ろとグラナダの市の方に歸りかけると旅人は餘程病氣が重いと見えて短兵衛が後から助けて居なければ動もすると驢馬から落ちさうである。

短兵衛は兎も角もして病氣に惱むでゐる旅人をグラナダの市の入口迄連れて來て、偖其行先は何所であるかと尋ねた。

病み疲れた亞剌比亞の老人は如何にも弱り果た樣子で、

「私は實の處當地には全く初めて來た者で我家は勿論親族知己も無いのだから今晩はどうかお前さん方の軒の下に泊させてお呉れ。爾うすれば莫大なお禮をするから。」

短兵衛は正直で慈悲深い方だから之を謝絶る勇氣もなく、縱令異教徒ではあるけれども人間には違ひないから助けて遣らうと思つて仕方なしに此不意の客人を我家に連れて歸つた。

親父が例の驢馬を牽いて我家の門口に近づくと待設けた子供等は食物にあ

ゐついたと思つて口を開て見ると頭に長い布を巻附けた見慣れぬ老人が父親と一所に來てゐるので愕然して母親の後に隠れて了つた。

短兵衛の鼻は鼻を既ふ化鶏が野良犬の進入を拒ぐと云ふ態度をして上座前に進みながら。

『斯んなに遠くなつて宗旨違ひの客人を連れて來てお前さんはどうするつもりだね宗門の裁判所から八釜敷いお觸れが廻つてゐるではありませんか。夫に眼付つたらどうするつもりなの。』

短兵衛『まあ靜かにしねえ此旅の人は病氣で怖に誰も知る人がないさうな。夫を打捨つて置けば路傍で死ぬ酔りぢやないか。』

お神さんは宋だ〳〵八釜敷く云つたけれども頭の骨の固い短兵衛はなか〳〵平常の樣に鼻の云ふ通りにならない。そして傷れた旅人を臨馬から卸して家の内に案内しながら一番涼しい所に藺と半の夏を敷いて寢床を作つて遣つた。此寢床は短兵衛の家で出來る丈けの上等な待遇であつた。

暫らくして亞剌比亞の旅人は烈しい咳嗽を起した。水汲渡世の短兵衛にはど

うして介抱して好いか解らないが。すると少し苦しみの薄らいだ折に旅人は短兵衛を近く招き聲を低うして。

『どうも私は助からないと思ふ。若し私が死んだら此小箱をお前さんに上げる。』

と云つて懷中から檀香製の小さい箱を取出した。

短兵衛なあに。そんな事があるものか。此寶はお前さんの物だ。是から宋だ宅先き永いお前さんの事だから身體を大切にして此寶を樂しむが好いよ。』

と答へると旅人は頭を打振りながら例の小箱を短兵衛の手の上に載せて何か其説明をしやうとする時又も烈しい咳嗽が出て何も言ふ事が出來ない内に死んで了つた。

短兵衛の眼は之を見て狂人の樣になつた。

『お前さんが馬鹿正直だから何時でも斯んなつまらぬ事を仕出かして人に迷惑をかけるのだよ。お前さん此娘來はどうするのだよ。此死骸が他人の眼に着いたら私共は人殺しの罪下宋に入れられるぢやないか。それを解

うとすれば代言人から家を身代限りする程絞り取られるだらう。」と言つて怒しみ且つ狂ひ廻るので短兵衛も之には閉口して、あゝ善い事をすれば斯んな苦しい目に逢ふんだ。又と善い事はしないものだと後悔したけれども今となつては何とも致方がない。短兵衛は暫らく腕を組んで考へて居たが、

「好し〳〵未だ夜明には間があるから、そつと此死骸を持出して人の知らない様にダロー河の砂の中に埋めて置う。誰すれば誰も此旅人が此家に來た事を知らないから其死んだ事を知る人もないからな。」

夫が一番好い手段だと直にそれを實行する事にした。

短兵衛は嘸に手傳はせて旅人の死骸を庸に包いて再び驢馬の背に載せ曉近き星の光りを便りにダロー河の岸を辿つて行く。

此を誰も知つてゐる人が無かつたら何事もなくて濟んだのであらうが世間には必ず一種の關所があつて物事を聞う都合好く許りは運ばせない。

水汲短兵衛の對面の家に無耿六と云ふ一人の理髮師が住んでゐた。此男は非

常な飽否で人の秘密を探ぐるに妙を得た惡戯者であつた。其顏は水鼠の様で其脚は蜘蛛の様に細長く其氣味の惡い眼は眠つてゐても片方一つ宛は何時でも開いてゐると云ふ噂だ。加之其耳も一方丈けは眠つてゐても聽く事が出來るとの事で彼は寢て居ても決して其身の周圍の出來事を見逃さないのであつた。だから此理髮師はダクナダの市で第一番の物識であつて其お喋ひが上手であると共に同業者中では第一番に多くの事客を有つてゐたのである。惡戯者の理髮師は宵に短兵衛が何時になく遲く歸つたのと、其妻子が何事か雄高に罵り騷いでゐるのを聞いて其家の窓から長い首を突出して見ると短兵衛がヤホメット宗の服裝をした一人旅人を驢馬から卸して家の内に案内する所であつた。

此は實に不思議の出來事であるから理髮師の無耿六は其晩少しも眠る事が出來なかつた。そして五分間越し位に窓の穴から短兵衛の家の様子を覗いてゐると夜明け近くなつて短兵衛は例の驢馬に水甕で無い何か見慣れない品物を積んで出かける機子である。

物好きの無駄六は顱巾となつて夜次のまゝに我家を飛出した。そして短兵衛に氣附かれない樣に潛と其後を蹤て行くとダロー河の岸の砂濱に穴を掘つて人の死骸らしい物を埋める樣子だ。無駄六は其場の光景を見屆けて又ト短兵衛の後から氣附かれない樣にして我家に歸つたが、彼は夫から暫らくも靜としてゐる事が出來ない、夫で夜の明る迄仕事場の道具を振廻したり引繰り返したり大騒ぎをした末、旭日の影を拜むと直に例の金盥と理髮道具とを小脇に挾んで毎日髭剃りに行く御客の裁判官の邸に出かけた。

裁判とは賄賂を取る事だと心得てゐるダラナダの裁判官は今しがた漸く寢床を出た許りであつたが、毎朝其顏を剃らせるのが常であつたから直ぐに無駄六を呼出して椅子に掛け白布を頸に卷付けさせて先づ熱湯で顏面を濕らさせて居ると、毎日何事か一つの新聞種を持つて來る理髮師の無駄六は問はれないのに自分から語り出した。

「閣下、世間にはどうも奇妙不思議の事があるもので御座りまする泥棒と人殺しと葬式が只た一夜の内に行はれまして御座います。」

裁判官「何を申す、手には何の事だか少しも判らない。」

無駄六は石鹼で裁判官の鼻と口の端を磨りながら、

「精しく申上げますれば水汲みの短兵衛奴が昨夜亞剌比亞の旅客を刺殺した上に殺して了つて其死骸を葬むつたので御座りまする。どうも急な曉で御座りました。」

裁判官「貴樣はどうして其事を承知してゐるか。」

無駄六「聞うお急きなさいますな、私が是から始から終まで精しいお話を致しまする。」

と云つて裁判官の鼻の先を摘んで剃刀を當てながら、始め短兵衛が旅人を騙馬に載せて我家に連れ歸つた事から徐々話出して裁判官の顏を横に引張り見た丈の事を悉皆話して了つた。

此裁判官はダラナダの官吏中で最も厚顏好きの且つ最も强慾な廉敗した吝嗇家であつた。然し裁判と云ふ事を如何に大事にしてゐるかは其金錢の爲に

之を左右するのでも解るのであつた。

裁判官は無駄六の話を聞いて、此事件は殺人犯である。強盜である然らば澤山の贓物があるのは疑ふ可くもあらぬ事である。此財寶を法律の手に收むるのはどうすれば好いか、只犯罪者を捕縛した許りでは斷頭臺に血を滴せる、丈である。然し贓品の財寶を沒收する事は裁判官を富ましむるもので、彼の信仰に從へば斯うする事が裁判官の最後の大目的であるのだ。

裁判官は直ぐに一人の警吏を呼出した。すると何時も飢えた樣な顏色をした巨漢の其當時の習慣なる黑い上衣を纏然と着たのが直ちに其前に現はれた。其手にはグラナダの市民を懼ひ上らせる白木の棍棒を持てゐる。

此正式の獵犬は命令に由つて直に不運なる水汲爺の捕縛に向つた。そして短兵衛が其日の仕事を終らない內に其劇官たる驢馬と共に裁判官の前に引出した。

裁判官は最も恐る可き皺を其顏に現はして短兵衛を睨み付けながら、

「罪人奴、能く承はれ。」

と怒鳴つたので正直な短兵衛は冑帽を保はして膝を拔して了つた。

裁判官「罪人奴、能く承たまはれ。汝の犯せる大罪は悉く本官に知られて居るから今となつて包み隱しても何の役にも立たぬぞよ。斷頭臺に上らせる事がやに由つて何か申立つる事があれば聽き取つて遣はす。汝の家に於て殺されたる者は亞剌比亞人である。我々の信仰の敵たる異教徒である。汝が彼を殺したのは疑ひも無く宗教上の熱心から起つたものであらうな。左樣であらう。からして本官は其點に於ては寬大の處置をして遣はす。其代りに汝は其時得た寶を此處に出して終へ。左すれば此事件は此儘にして汝を放免するぞ。」

憐れなる水汲爺は總ての聖徒の御名を呼んで祈りを捧げ其無罪を主張した然し天に在ます筈の聖徒は一人も姿を現はして下さらない。若し其處に現はれた聖徒があつて正直短兵衛の無罪を證立てゝ呉れたならば裁判官は歷史上の記錄と云ふものを悉く信ぜなくなつたであらう。

水浸鉋は亞剌比亞人が病氣で死んだ事を少しも飾らず隱さずに述立てた然し夫は少しも裁判官を感動させる事が出來なかつた。

裁判官「汝は何亞剌比亞人が金貨も寶石も何物も所有して居なかつたと主張するのか、然らば汝が人殺しをした目的物は何だ。」

と怒鳴つた。短兵衛は已む事を得ず、

「私も生命が惜しいから閣下に申上げまするが、亞剌比亞人が死ぬる時に私に贈をすると云つて小さい檀香の箱を渡しまして御座りまする。」

裁判官は檀香の小箱と云ふ言葉を聞いて眼を光らせ、最早其中には貴重なる寶石類が輝いてゐるのを見る樣な氣がして、

「汝は其箱を何處に隱してゐるか。」

と言葉急しく尋ねる。

短兵衛「左樣で御座りまする。其小箱は驢馬の食物を入れる櫃の内に入れてありますで御入用とあれば何時でも差上げまするで御座ります。」

短兵衛の言葉の終らぬ内に側に居た例の書吏は直に驢馬を引出して間も無く一個

の小箱を提んで歸つて來た。裁判官は熱心の餘り手を慄はして其蓋を開けると、中には亞剌比亞語で書いた惡物と短かい蠟燭の片が這入つてゐる。

郵人の自白が少しも裁判官を利益する事が無い時には西班牙の法律と雖も公平の判決を與ふるのである。裁判官は失望から戰に回つて此事件には實際少しも贈物が無いのを覺つたので、短兵衛が尚熱心に辯解をしてゐるのを怒々し相に聞取つた。此際逃は其妻を呼出して調べたのと一致してゐる。かちして其無罪であるのを諒解したので捕縄を解かせ、彼の旅人からお贈に貰つたと云ふ檀香の小箱は其恩德の報酬であるので之を持歸る事を許したが、其所有の驢馬は裁判の費用を拂はせる代りに之を押收する事にした。

僅れむ可き水浸鉋は大事の驢馬を押收されたので又もや自分の肩で大きな水甕を運搬しなくてはならない樣になつて、アルハムブラの噴水からグラナダの街までトボ〳〵と少かねばならぬ。

夏の熱い日に再び此苦しい商賣を續けるやうになつた短兵衛は以前の愉快な側顔も白から消なくなつた。

『裁判官の貴ッ樂れ奴、大事な商賣な道具を取上げやがつた。一番仲の好い己の朋友を取上げて了つて人を酷い目に逢せやがる。』

と獨語して其可愛がつて居た驢馬の事を思出しては其情深い性質に堪らなくなつて拾石の上に水甕を卸して其額の汗を拭きながら呟くのである。

『驢馬が可憐相だ。嘘彼も己れの事を思つてゐるだらう。嘘彼も水甕を背負たがつてゐるだらう。あゝ可憐相な物だ。』

短兵衛が氣を腐らすのは夫許りで無い。一日働らいて都腐して歸つて來るとお神さんの挨拶は實に素晴らしいもので亦思痴の百萬遍を繰返すのである其爲に短兵衛の陣地は悉皆破壞されて了つて幾多の人情深い事すると飛んでもない眞難に逢ふのだと言つたのは此處の事だと貴上げられる。そして俺さうな顏をして何彼と言へば白い齒を露出して涕つくのが常となつた。若し又小供等の食物が不足なやら衣服に不自由をする時には口を尖らして、

『お父さんに聞う云つてお貰ひな。お父さんはアルハムブラ宮殿の王樣にお成りだつたから彼の亞剌比亞人の奥れた箱の中から何でも出して下さる

んだとさ。』

是では短兵衛たる者は堪らない。若し人間が善い行爲をした爲に罰を受けたとすれば此短兵衛程に酷い罰を受けた者はあるまい。憐れな短兵衛は精神にも肉體にも此苦痛を感じたが、彼れはお神さんの嘲弄を優しく忍んでゐた。

或日の事短兵衛は其日の熱さに働らき疲れてヘト〳〵になつて我家に歸るとお神さんの例の惡口が始まつたので今度こそ流石のお人好しも勘忍袋の緒を切らした。それでも別にお神さんに當る事をしないで、棚の上にある例の懷香の小箱が蓋の開いたまゝになつて居て宛も人を愚弄してゐる樣なのに眼を着けて怒りに任せて床の上に投付けながら、

『貴樣見た樣な物が眼に着いたり貴樣の主人を此家に泊らしたりしたからこの樣な酷い目に逢されるんだ。』

其機會に箱の蓋が飛んだから其中にあつた亞剌比亞文字の卷物は床の上に吐出された。短兵衛は尙怒つたまゝ暫らく此を打眺めてゐたが遂に氣を取直して心の中で、

「待ては、此卷物だつて何か大事の物かも知れぬて、彼の旅人の老僕奴が大切さうにしてゐたからな。」

と獨語して卷物を拾つて大事さうに懷中に納つた。夫から翌日朝市衢の方に水賣りに出た序にタンビアスから來てゐる玩具商の亞剌比亞人の店の立寄つて其文句を讀んで與れと頼んだ。

玩具商の亞剌比亞人は卷物の文句を叮嚀に讀んで居たが終て其顏を擡てゝ微笑した。

「此卷物には地の下に隱してある寶を手に入れる斯樣の文句が書いてある其寶は元來魔法の爲に封せられ居るのであるが、此卷物を讀んで斯樣すればどんな堅い鐵の扉でも大盤石の蓋でも獨りでに開くのです。」

然し短兵衛は、

「馬鹿にしてゐやがる、私等は魔法遣ひではないから地下に埋まつてゐる寶がどうなるものか。」

と云つて水甕を肩に擔いで、例の卷物は亞剌比亞人に渡したまゝ取戻しもし

ないで水賣りに行つて終つた。

其夕暮の事、短兵衛はアルハムブラの噴水の所に來て暫らく休息してゐると例の通り井戸端會議の連中が盛んに無駄話をやつてゐる。

其話の題目は最早逐魔が時近いに拘らず昔から傳はつてゐる種々の怪談であつた。

總て此等の井戸端會議の議員達は空家の鼠見た樣に貧乏であるけれども、アルハムブラの古宮殿には昔の王樣即ちマホメット宗最後の王であつたボアブディルが莫大な財寶を各所の地の下に魔力で封じ込めてゐるのであるから其魔力を破る事が出來る者には寶が自由になるし、別して七段の地下室の底には最も多くの寶が埋めてあると信じてゐる

此話は正直な短兵衛の心に常ならぬ感動を與へた。そして家路を辿る頃には其事が愈々深く胸の中に刺み込まるゝのであつた。

「若し彼の塔の下に左樣な寶が埋めてあるとしたら彼の卷物の文句はそれを掘出す斯樣ではあるまいか。」

と獨語して、斯う思ふと如何にも面白でありさうだから、短兵衛は嬉しくて堪らなくなつて浮雲く水壺を取落さうとした。

其晩短兵衛は床に就いても寢返り許りして少しも眠る事が出來なかつた。そして翌日は朝早く起きて昨日の玩具商の店に行つて今日聞いた事をすつかり話した。

『お前さんは亞剌比亞語が讀めるなら私と二人でアルハムブラの古宮殿の塔の所に行つて御覽なさいたらどうだらう。若し其効驗が無かつたとしても別に損の行く事ではなし又若し効驗があるとすれば二人で其寶を分けやうではないか。』

亞剌比亞の商人は之を聞いて短兵衛を押とゞめ、

『お待ちなさい。此卷物丈では未だ道具が揃はないんです。此經文は夜の五十二時に一種特別の蠟燭の光で讀まなければ効能が無い。其蠟燭の事が此卷物の端に書いてあるけれど、それが普通の人間の製造したものでないからどうしても手に入らないから駄目だよ。其蠟燭が無ければ此卷物は何の役にも立ないのさ。』

短兵衛『それは心配しなさるな。其蠟燭なら私が持つてゐる。今直に持つて來て見せるから待つて居て奥んねえ。』

と云つて我家に歸戻つて彼の木の箱諸共蠟燭の片を持つて來た亞剌比亞人は其香を嗅いで見て、

『此蠟燭は一種特別の香料を使つて製したもので卷物の文句にある通りの物です。此蠟燭の燃えてゐる間に此經文を讀んで祈禱すれば大金石の戸でも獨りでに開くのであるが若し蠟燭の火の消ゆる迄穴蔵の中に這入つてゐる者は暗い目に逢はねばならぬのぢやなければ此蠟燭の火が消えると共に開いた戸が又獨りで閉つて了うから其時穴の内に居た者は寶と共に再び魔法の爲に封せられて了うのです。』

正直短兵衛と玩具商の亞剌比亞人は其晩早速寶探しを實行する事に決心した。斯くて夜も深々と更渡るアルハムブラの古宮殿には夜地此地に鳴く鳥と飛交て蝙蝠の外に活きた物が居ない時に二人の人影は薄暗い提灯の光りを

便りに並木の坂道を登つて行くのである。夫から種々の怪談が傳はつてゐる彼の七段の地下室を有してゐると云ふ塔の下まで迫つて來ると生茂る數百年の大木は魔王の影の樣に塔の周圍を取卷いてゐる。其廻面には丈より高い雜草が右往左往に散亂してゐる拾石を包んで人の通る可き道もない。二人は慄へながら漸くにして塔の入口に達して其地下室を一段々々と降りて行くのでゐる。

此地下室と云ふのは大盤石を畳つてあるので一段毎に梯子段が刺んでゐる。北第四段目迄の室は皆れも空虛であつて陰氣な湿つぽい何とも云へない忌な空氣が籠つてゐる。そして第四段目の所に始めて石の扉があつて顔として動かない。昔から傳はる所によると此下に尙三段の地下室があつて其扉は魔法の爲に鎖されて其一番底の室にも又魔法に封込められた昔の人間が其儘に殘つてゐると云ふ事だ。此所の空氣は今迄より一層土臭い香がしていやに寒氣を催すので二人の者は身體が烈しく慄へ出して、爲に提灯の火が暗くなつたやうだ。

二人は呼吸を凝して立止まり互に顔を見合せた時遙かにアルハムブラの大時計が十二時を打つた。サア仕事は是からだと短兵衛は例の蠟燭に火を點し亞剌比亞人は荷物を延べて新膳を始めた。

此蠟燭は成る程一種特別の香料を使つたものと見え其香ひは得も云はれない好い薫りがする。亞剌比亞人は口早に新膳をして其終に近づくと、二人が今居る下の地下室あたりに地雷火の爆發する樣な凄まじい響がして金鐵の如き石の扉は獨りでに轟返つた。

其下の室にも今迄同樣の梯子段がある。其次の室の扉も又獨りで開いてゐるから遂に一番底の七段目の室に來ると其所の壁には澤山の亞剌比亞文字で何事か書記してある。そして室の眞中に七本の鐵の棒に支へられた一つの櫃があつて其周圍に七人の武裝した亞剌比亞人が坐つてゐる。然し此古代の人間は魔法の爲に封せられてゐるから石像と少しも異る所が無い。

其金櫃の前に澤山の壺がある。其壺には即ち寶を藏つてあるのだ。其内の一番大きいのに二人は手を指入れて見た。そして掬出した物は何であるか、云はず

七層の地下室

と知れた黄金の花と寶石の波である其内に長い物が手に觸るのは寶石と眞珠とを繋いだ首飾である。

短兵衛と玩具商は打慄ふ膝を踏張つて折々七人の番兵が恐ろしい顔をしてゐるのを覗いては其動かないのを確めつゝ忙しく此寶物を提出してポケットに押込み最早入れる所が無い樣になつた時何かしら遠りに物音がした樣らしかつたから二人は上になり下になりして梯子段を轉がり上つた。

二人は四段目の地下室迄驅上つて蠟燭の火を吹消したから石の扉は以前の樣な物音をして再び閉つて了つた。

餘りの恐さに二人は其處を驅出して塔の入口の所に來る迄は活きた心地がしなかつたけれども此所まで來れば星の光が木の間に輝いてゐるのでほつと太息を吐いて胸を撫卸する懷中には金貨と寶石とが一杯這入つてゐる。

二人は夫から草原の上で寶を分配して今晩は一應是にて引上げ又何時か機會を見て游の底迄探み出さうと云ふ事にした。

此約束を堅くする爲め二人は魔法の蠟燭と巻物とを一つ宛持つてゐる事に

七層の地下室

と知れた黄金の花と寶石の波である其内に長い物が手に觸るのは寶石と異珠とを繋いだ首飾である。

短兵急と玩具商は打怪ぶ膝を踏張つて折々七人の番兵が恐ろしい顔をしてゐるのを覗いては其動かないのを確めつゝ息忙しく此寶物を掘出してポケットに押込み最早入れる所が無い樣になつた時何かしら遠りに物音がした樣らしかつたから二人は上になり下になりして梯子段を轉がり上つた。

二人は四段目の地下室迄辿着上つて燭鐵の火を吹消したから石の扉は以前の樣な物音をして再び獨りでに閉つて了つた。

除りの怠きに二人は其處を漏出して塔の入口の所に來る迄は活きた心地がしなかつたけれども此所まで來れば星の光が木の間に輝いてゐるので、はつと太息を吐いて胸を撫卸する樣中には金貨と寶石とが一杯這入つてゐる。

二人は夫から草原の上で寶を分配して今晩は一應是に二引上げ又何時か機會を見て夢の底迄探み出さうと云ふ事にした。

此約束を堅くする爲め二人は歴法の蠟燭と卷物とを一つ宛持つてゐる事に

した。それは短兵衛は燭燭を、玩具商は怪物を保管する事にしたのである。夫から最早何の恐るゝ事もなくアルハムブラの宮殿を出て城廓の外なる並木の坂道を下り来る道すがら玩具商は世事に疎き短兵衛に向ひ其耳に口を寄せて、

「短兵衛さん、お前さんは抜りはあるまいが、今晩の事は大の秘密だよ。宋だ貴のある限りを掴み出して来る迄は決して此事を他人に感づかれてはいけない。彼の地の下の宝を皆な手に入れて終つてから我々は何處か遠い國に逃げなければならない。其後でなければ我々が富豪になつた事を世間に知られては大變だよ。若し此事がダタナダの裁判官の耳にでも入らうものなら大變な事になつて了ふんだ。好いかね。」

短兵衛「成るだとも。全く以てお前の云ふ通りだ。」

玩具商「短兵衛さんお前は賢い人だから大丈夫だがお前さんにはお神さんがあるだらう。」

短兵衛「あるけれども、彼女には今晩の事などは少しも聞かせるものでない。」

玩具商、それで安心した。私はお前さんを信用して堅く約束をして置くよ。」
短兵衛は確に約束をした。其精神は全く掌団なもので頗る眞面目であつたけれども、どんな良人でも其妻女に對しては絶對に秘密を保つと云ふ事は出來るものでない。況して水汲瓶の短兵衛さんの横なお人好しの噂の種かよりがどうして秘密などか保てるものか。
短兵衛は夜更けて我家に歸つて見るとお神さんは未だ眠らないで室の隅で泣いてゐた。そして良人の姿を見るや否や、
「とう〳〵お歸りだ。噂面白かつたらうね。こんなに遅く迄夜遊びしてさ。今晩も又亞剌比亞人のお客を連れてお出でないのが不思議だよ。」
と云つて大聲揚げて泣出し、自分の手で自分の胸を振振りながら、まだ〳〵口を休ませない。
「我程此世に不幸な者があらうか。家の寶は銃刑官に引掠られて了つてるのに、内の旦那様のお人好にも惚れるよ。小供はあんなに飢じがつてゐるのに食べる物一つ買つて來て呉れないで夜も遊も異教徒の外國人と許り遊廻

てさ。可憐さうなのは此子供だよ。妾や子供の身は是からどうなるだらう。市街に出て乞食をしなければならないに、極まつてゐる。」
正直な短兵衛は噂の遠慮に心を動かされて自分にも泣出し度くなつた。そして懐中に金貨や寶石が一杯這入つてゐるやうに胸が一杯になつて了つた。
短兵衛は愛へず其手を懐中に差込んで金貨三四枚を掴出しながら默つたまま、お神さんの手に握らせると、氣の毒なお神さんは愕然して眼を丸くし、此寶金の雨が降つて來た理由が解らない。それで例の水の流れる様な辯舌も開いた口から出ないので只眼許りをパチつかせてゐる内、短兵衛は又もや懐中から金鎖に寶石や眞珠を鏤めた首飾りを引出した。
此を見たお神さんは始めて物が言へる様になつて、
「おや〳〵、大層な物だ事、お前さんは人殺しや泥棒をしたんぢやないだらうね。」
お神さんは短兵衛が人殺しをして此寶を奪取つて來たのだと信じたので、其眼前には最早刑場の様子が現はれて脚の短かい短兵衛が絞罪に處せられて

ぶら下つてゐるのが見えるやうであるから、餘りの恐ろしさに氣も顛倒して烈しいヒステリーを起した。

氣の毒なのは短兵衛老爺で、此疑ひを晴してお神さんの氣を休めるのは實際の話をして聞せる他に途がない。然し短兵衛は玩具商の亞剌比亞人との約束を忘れないから流石に浮とは眞實の話をして聞せない。

『お前が賣う心配するなら話して聞せないものでもないが、婦女と云ふものは秘密が保てないから、困るのだ。己が惡い事をしたと思へばそんなに心配するだらうが、そこは正直短兵衛と云はれた己だよ。けれども大の秘密だから現在の女房にでも堅い誓ひをして貰はなければ聞かせる事が出來ないのだ。』

お神さんは何か深い事情があるだらうと氣が付て例の人殺しをしたと云ふ想像が間違つてゐると云ふ事に氣が付いたと見え少し安心したと云ふ樣子で、

『夫はお前さん妻だつてお前の秘密を聞せて貰つて夫を他人に饒舌る樣な

婦女ぢやないんだよ。大丈夫だよお話しな。お前の爲にならない事を他人に話してどうするものかね。好く灣へて御覽』

短兵衛『それぢや云つて聞せるが先夜の亞剌比亞人の病人が死ぬる前に奥れた彼の櫃番の小箱ね。』

女房『あれは何の役にも立ないと云つて裁判官が戻して奥れたぢやないかね。』

短兵衛『處があれが大變な物で、彼の蝋燭の片と雜物の文句で以て魔法に封じられてゐるアルハムブラの地下室の寶が皆な己の手に這入る事になつたんだ。』

女房『まあ偉いわねだから人は正直でなくちやいけないよ。けれども家に斯んな寶がある事が裁判官の耳に這入つたら又警察から來てお前を縛つて行くんだよ。』

短兵衛『それだから秘密だ。己がアルハムブラの寶を皆な攫出して來る迄は寶のたの字を云つてもいけない。玩具商の亞剌比亞人もさう云つたつけ。寶の有る限りを手に入れて外國に逃出す迄は決して他人に知られてはいけな

いんだと。」

お神さんは此話を聞て非常に喜んだ。そして嬉しさの餘り小さい短兵衛の身體を手玉に取る樣にして可愛がつた。

短兵衛「なあお花」

と正直な心にも多少感動して云つた。

「お花や、お前は今亞剌比亞の旅人が呉れた箱の有難さが今解つたらう。からして他人の困難を助けるのに決して惡口を云つてはならないぞよ。」

短兵衛は安心の餘り羊皮の寢床の上に横になつて倉庫の中の荷物の樣に靜かに眠つて了つた。然るにお神さんの方はさう容易には眠られない。そして短兵衛の衣服のポケットを引繰り返して金貨と寶石類を床の上に並べながら、先づ金貨の勘定をして夫から首飾や腕輪などを一々自分の身體に着て見て是から先き此立派な物を自分の身に飾つて好い時が來たら嘸嬉しい事だらうと其事許りを考へるのであつた。

翌朝短兵衛は金貨一個を持出して市街の寶石商の所に賣りに行つた。そして

他人の怪みを避ける爲に此金貨はアルハムブラの古宮殿の壊れた庭から拾つて來たと何氣なく言つて誤魔化したが、寶石商人は其金貨を調べて見ると全く純金で亞剌比亞の文字が書てある樣子がどうも餘程昔の物らしい。

然し水汲の短兵衛には其價値が解らぬらしいから寶石商は其眞價の三分の一位しか渡さなかつたけれども短兵衛は夫に充分の滿足を表して、其金で先づ子供の衣服や玩具などを買求め次に澤山の食料品を買集めて我家に歸ると之を待受けたわた子供等は短兵衛を取卷いて踊り廻るのである。

短兵衛は其眞中に坐りながら一生涯に覺へのない程の幸福なる父親たる事を感じた。

短兵衛のお神さんは仲の秘密を頗る嚴重に守つた。そして朝から晩迄眞面目な顏をして子供等を相手に暮してゐる。然し其心は殆んど燃立つ樣であるけれども何ッット耐へてゐた。

お神さんが此儘で我慢をして呉るれば好いのだが、そろ〳〵口先で贅沢な事を言ひ始めた。斯んな破れた衣服は嫌になつたとか、新らしい櫛笄が欲しいと

か箱がどうだとか、夫から近處の井戸端會議で、良人はもう身體が續かないから水浜の商賣を止すつもりだとか、子供等を海水浴に遣れて行くつもりだとか云つては近處のお神さん連中を驚かした。

之が爲に近處では水浜短兵衛の噂は少し氣が狂つてゐるらしいと評判をして其後妻を見ては指さし笑ふのであつた。處がお神さんは外で幸棒して歸つて來ると内では其反動で少々詐り贅澤な眞似をする。そして金鎖の首飾や寶石の腕輪などを飾め又は金剛石の髮飾りをして見ては室内を彼地此地と少行いて折々半分缺けた鏡見の鏡に映して見るのである。

お神さんが是丈で我慢をしてゐて呉れば好つたのだけれども婦女の虚榮心と云ふものはどうしても抑へる事が出來ないので一寸窓から顔を出して外を通る人に見せて遣り度くなつた。

お神さんはほんの一寸の間だから關はないと思つて純金に寶石を飾めた首飾をした儘窓から顔を出すと不幸にも對面の廻髮師も又例の窓から首を出して此方を見てゐた所だつたから堪らない。其鋭い眼がどうして金剛石の光

を見過さうぞ無駄六は何氣なく首を引込ませて物蔭より能く此樣子を見定るや否や一目散に裁判官の所に駆付けた。夫から飢えた狼の樣な警察官は直ぐに短兵衛の行先を追廻して其日の暮れない内に裁判所に引張つて來たのである。

裁判官は短兵衛を睨みつけ、

「惡人奴、此度は最早逃れぬ所だぞ、汝は汝の家で異教徒の旅人が死んだ時横香の小箱しか殘さなかつたと申したけれども、今汝の妻は繼續の衣服の上に眞珠や金剛石を飾めた純金の首飾をしてゐると云ふではないか。此惡人奴、大嘘吐き奴、汝は言語道斷の曲者である。サア眞直に白狀致せ汝の手に奪ひ取つたる寶物を皆な此處に差出して了つて刑場の露と消失せろッ。

正直な短兵衛は最早際してもの駄目だと思つて、彼の亞剌比亞人が遺物に呉れた例の小箱が即ち地下に埋まつてゐる寶を掘出す原因となつたのである事から、自分で彼の魔の不思議なる探險をして寶の一小部分丈を掴み出して來たのだと有の儘を白狀して了つた。

理髪師の無耶六は今度も又訴人であるから警察官と共に法廷に連つて短兵衛の裁判を聞いてゐたが、アルハムブラの地下室に埋もれた寶を掘出す所謂を知つてゐるとの話を聞いて短兵衛の大事な水汲商賣の副官たる驢馬の耳よりも其耳を長くして聞いてゐた。

裁判官の耳の長さも又之に劣らなかつた。そして直に警察官を遣らせて短兵衛の相棒なる亞剌比亞人の玩具商を捕縛させる事にした。

玩具商は意外の事に驚愕して裁判所に引かれて來ると法廷に水汲の短兵衛が居所の羊の樣に萎れ切つてゐるのを見て大體の成行きを悟つて了つて其側を通る時小聲にて、

「仕樣のない野郎だな、お前の山の神には何にも云ふなと被程言つて置いたぢやないか。」

裁判官は夫から玩具商を取調べると其申立てる處も短兵衛の言葉と符合するのである。然し裁判官は俄かに之を信じないで、

「汝等二人は申合せて出鱈目の嘘を吐くのぢやな。好し／＼夫れならば拷問

にかけても眞實の事を白狀させるぞ。」

玩具商は爲時氣が沈鬱で來て平常の滑稽な態度に圓へり。

「先づ御待ち下され。私共は決して嘘は申上げません。寶の事は全く眞實の話で折角私共はこれを手に入れる事が出來るやうになつて居りますから、之を打捨てるのは惜しいものです。世間では誰一人此秘密を知つてゐる者はありません。之を知つてゐる者は此所に居る五人丈でありますからして五人の者が此秘密を保つて居て寶の有丈を取つて來れば皆々大富豪になる事が出來ます。どうです貴下方も私共の仲間に這入つて寶取りに行かうではありませんか。それがお嫌とあつて私共二人を罪に陷す事になると、地の下の寶は誰も取る事が出來ないのです。」

裁判官は此話を聞いて警察官と別室に行つて相談した。處が警察官は其職務上の吉徳であるから、

「何とでも約束を爲さるが宜しう御座いませう。そして寶の有る限りを掘出した末、貴官が全部を没收して了つて、奴等を魔法使ひと云ふので罪に行つ

て了へばそれでお終いでせう。」

裁判官は此忠告に從ひ再び玩具商に向つて、

「汝等の申立は不思議千萬の次第である。然し嘘ではないかも知れぬが、本官は自身に現場を見なければ之を信ずる事が出來ぬ。若し實際汝等の申立る通りの實が在つたら我々は之を平等に分配して、其儘口を噤んで了へばそれで好い。若し又汝等が僞りを申したとなれば其時は法律の制裁を受けねばならぬ。先づそれ迄は二人の者を拘留するから左樣心得よ。」

短兵衛と玩具商は喜んで此約束に同意した。それは寶を掘出すのは二人の手の裡にあるから決して驚くに及ばないからだ。

其夜十二時少し前に裁判官は警察官と理髮師とに充分武裝させて、水汲郎と玩具商を捕縛したまゝ引立てゝ、彼の沒收の驢馬をも寶の壺を背負はする爲に引張つてアルハムブラの古宮殿に向つた。

此一行は率に僅人に見付らないで例の地下室のある塔に進したから、驢馬を無花果の木に繫いで地下室に降りて行つた。其第四段目迄は何の事も無く、其

處の石の扉の處に來て短兵衛は例の蠟燭を點じ玩具商は爆物を背べて廻廊を初めた。其終に臨んで地の下に爆烈彈の樣な音響がして以前の時の樣に石の扉は獨りでに後退つた。夫から下を覗くと狹い石段があつて其下は今迄よりも一層陰氣である。裁判官も警察官も理髮師も悉皆度胸を抜かれて是からは先はどうしても降りる勇氣がない。

水汲短兵衛と玩具商とは平氣で第七段目の地下室迄降りて來ると、此處には先夜の通り七人の亞剌比亞人が金襴の帶をしてゐるけれども例の通り魔法に封ぜられてゐるから呼吸もしなければ眼の玉も動かさない。

二人は大きな壺二箇を動かした。其中には金貨と寶石が一杯這入つてゐるので、短兵衛が水甕を運ぶ樣に一つ宛肩に乘せて運び上げやうとしたけれど、其重量が非常であるから動もすれば尻餅を搗きさうである。其時短兵衛は不圖驢馬の事を思出したので、斯んな重い壺を二箇も負はせるのは可憐想である。是は成る可く輕い壺を拵て行くが好いと獨斷した。

玩具商も「今晩は最う是で止にしやうではないか。是丈の寶を皆で分配しても

大したものだからな。」

と喋りながら第四段目の室に上つて來ると待設けた裁判官は二個の盗を檢べて勇氣を振ひ起したと見え、今迄怖ひ上つてゐたのに引變へて傲かに嚴格な態度となり、

「貴は是でお終ひか。」

玩具商「いや、斯んな遊も來た澤山ありますが第一の寶物は其中にある大きな金櫃で其内には寶石が一杯這入つて居ります。」

裁判官「其金櫃を是非共持つて歸らうぢやないか。」

玩具商「私共は二度殿下に降りる事が出來ません。」

裁判官「左樣な事があるか、汝等は其道に精しいからも一度下に降りて其金櫃を持つて來い。」

玩具商は涙として其命に應じない。

「私共には是丈で澤山です、此以上は多過ますから宜しくありません。」

短兵衛「私も是で澤山です、第一羅馬が可憐想であります、此盗二つより以上の

荷を負せたら潰れて了ひますから。」

裁判官「慾の深い奴等だな、汝等はそれで澤山であらうが本官が承知しないから是非共も一度降りて持つて來い。」

玩具商「此事許りはどうあつてもお斷り申します。」

短兵衛「私もどうか御免を蒙ります。」

裁判官「宜しい、夫では汝等二人を放免すると云つたけれども取消しにして死刑に處するぞよ。」

二人「假令へ死刑に處せられても二度と下に降りる事は出來ません。」

裁判官は苦打ちをして警察官と理髮師を應き、

「好し〳〵、夫では我々三人で其金櫃を持つて來るとしやう、そして三人で其賞を分配する事にするから。」

斯く言ひながら衝標へてゐる二人の家來を引連れて裁判官は恐る〳〵下に降りて行くのであつた。

此態を見澄した玩具商の服部比亞人は三人の姿が第四段目の室の石の扉か

ら下に隙るゝや否や彼の魔法の蠟燭をふつと吹消して了つたので石の扉は例の如く雷の如き音響と共に閉つて了つた。其爲に裁判官以下三人の者は悉く地下室の實と共に封じ込められたのである。

玩具商は以前の遊を肩に載せて一生懸命に塔の外に驅出した。水淺瀬も無論其短かい脚の及ぶ限り大急ぎで之に續いて、星の光りの見ゆる所に來る迄は息をも吐かずに驅つて來た。

短兵衛「お前さん大變な事をしたぢやないか、裁判官と他の二人は地下室に閉込められたんだよ。」

玩具商「あれは神樣の御心だ。」

と勿體をつけて云つた。

短兵衛「夫でも此儘にして打棄つて置く譯にはゆくまい。」

玩具商は將を捨りながら、

「彼奴等を許してやつては神の御心に背くのだ。此事はちやんと運命の本に書いてあるから、彼奴等は魔法の爲に封じ込められて死ぬる事も活きる事

も出來ない儘に永來の救護者を待たねばならぬ事に極つてゐるのだ。夫だから彼奴等は永來に現はるゝ冒險家が魔法の力を破らなければ到底此世に出づる事は出來ないよ。神の御心は今實行された。之を救ふのは我々の役目ではない。」

と云ひながら彼の蠟燭の燃え殘りを遙か向ふの溪底に投捨て了つた。

斯うなつては最早取返しがつかないから二人は驢馬の脊に二箇の壺を負はせて市街の方に歸つて來る。其途すがら短兵衛は大事の驢馬が自分の手に戻つたのが嬉しくて堪らないから幾度となく其顏に頬ずりをして、可愛がつた實際の處が短兵衛の正直な心には壺一杯の寶を手に入れた事よりも一頭の驢馬を取戻した方が嬉しかつたかも知れぬ。

二人は都合好く他人の眼に觸れないで寶を分配した。そして其分配方も頗る公平であつた。然し玩具商の方が寶石類の鑑定に精しいから最は小さくても値の貴いのを取つて短兵衛には見かけの美くしい大きい物を遣つたのだ。短兵衛さんは大に滿足したのであつた。

二人は此莫大の資を持つて此グラナダの市街に住んで居ては又どんな難が降りかゝるかも知れないから、遠い外國に行つて此富を楽しむ事にしやうと約束して玩具商は亞弗利加のタチュアン市に歸り短兵衛は其生れ故郷なるポルトガルの葡萄牙のカリレヤに歸る事にした。

短兵衛はお神さんと二人で大勢の子供と大事の驢馬を引連れて無事に其故郷に歸つた。そしてお神さんの働らきで、昔の水汲短兵衛は短兵衛殿と云はる様になつて其子供等も父親の通り肩幅の濶い脚の短かい愉快げな紡績や織機と成長してお神さんのお花も短兵衛殿の奥様と云はるゝやうになつて、今では金剛石の髪飾も真珠の首飾も誰憚からずに見せびらかす事が出來るやうになつた。

裁判官と警察官と理髪師の無駄六とは七層の地下室の底に封じ込められたまゝ今日迄其儘になつてゐるのである。若し今後西班牙國中に無駄六の様な猾み深い理髪師と狡猾な警察官と腐敗した裁判官とが現はるゝ事があつたら、其後を追つて資探しに行くかも知れないが、彼の地下室の石の扉を開く事

は最早此世の終りでなければ駄目である、さても世界最終の日に天帝が裁判を下し玉ふ時、彼等三人は其監獄を解かるゝ外、誰あつて彼の魔法に閉ぢられた地下室に這入り得る者はないのである。

第四節

△ヘチクリフェの離宮
△許可証無しで逆戻り
△伊太利式庭園の美觀

懸の巡禮

アルハムブラの丘陵と相對して聳へてゐる日の山の麓がダロー河の流れに臨きる前に術數多の丘陵を爲してゐるものゝ一つで丁度アルハムブラの丘陵と相對して然も其よりは一段高い所の中腹に、ヘチクリフェの離宮と稱する繪畫的の一建築がある。

此ヘチラリフなる言葉は亞剌比亞語で建築を意味したもので、即ち建築に驚奇を盡した離宮との意味を現はしたものらしい。此處はアルハムブラ宮殿がグラナダ王マホメット王の物であつた頃其皇子達の夏御殿に充てたもので、マホメット王沒落の後はグラナダ侯爵の所有に屬して居たのだが、其後轉じて以太利人の所有となり現今では古代のムアーの建築に以太利風の庭園を有する事と西班牙中古時代の帝王の肖像及び所謂グラナダの侯爵十四名の肖像畫の多くは模寫に係る物が保存してある事とを以て有名な所である。因に其内にポアンデル王の肖像があると云ふけれども之は眞僞が保證されぬものである。此建築はアルハムブラの主なる廣間より五十年程以前に出來たとの事であるが、其當時の粧飾は大部分改修されて多くは白堊塗りとなつて了つてゐる。又此離宮とアルハムブラ宮殿との間に設けられてゐた直接の交通路は近來使用されぬ事になつて正面にある獅子の門は閉鎖されて了つてゐるから、現在の見物客は曾な遠かに右方に迂廻して行かねばならぬ。

此門の内にはムアー時代の彼の中庭があつてマートルや橙子の樹が繁茂し

てゐる。而して其中間にはアルハムブラに通ずる溝が横過ぎつてゐる。其東部に當る建築は十六世紀時代の物で西部の方は目下寺院に使用されてゐる。又其北部には長方形の廣間があつて、其兩側に寢床に用ゆる中段の室があつて其後にある四角な小室の出窓からはダロー河の絶景を眺むる事が出來るやうになつてゐる。

此所の室の左右兩側に前記の肖像畫が懸けてあつて、其外にムアー時代の武器などが陳列してある。次に離宮の建物より東方に當つて高段になつてゐるヘチクリフの庭園にはムアー時代の築山や岩窟や泉水などを其儘に保存してある。此は近世復興紀時代の以太利別莊の庭に能く似てゐる。此庭園に這入るには先づサイプレスの門と云ふのがあつて其内には古代の大廊下と巨大なサイプレスの木に覆はれた泉水がある。此汀の所が六百年以前に彼のポアンデルの皇后がハメットと云ふ騎人と密會した場所だと言傳へてある。

離宮の案内記は先づ此位に止めて置いて、是から予が寫生帳に移るとしやう。予等は離宮に行く道を能く知らないで、無も寫生の爲めであるから案内者無

しに出かけたが、拝美道が判らぬのに困つた。前にも述べた通り古代の本道は正門が〆切になつてゐるから、行ても駄目である。其に角右の方の山道を登つて大廻りして行く内に、赤と青の衣服に妙な帽子を冠つた西班牙の老人が居たから、例の先方に通じない言葉で尋ねると、先方では何と思つたかイヤナリ可笑げな身振りをして嚇つて見せる。ハヽア此先生は能くある物貰ひだなあと思つて小銀を出して遣りながら、尚もヘヤリフと云ふ言葉を繰返すと、今遣つた銀貨の効能で直ぐに指さして教へて呉れた。其處にある鐵の門が即ち離宮現代の通用門であるらしい。予は番人に向つて例の判らぬ筈の言葉を繰返すと今度は先方から英語で以て許可證があるかと問ふから、其様な物は持たないと答ふると、夫では内部を見物する事が出來ぬと言つて、其許可證を貰ふ所を教へて呉れた。

予等は彼の許可證を取る爲に一旦ホクルに歸つて、其場所を尋ねると以太利の領事館はグラナダの市中にあるとの事であるから今日の間に合はぬと解めて其日は近所の小景などをスケッチして過した。

翌日午前中に市中に行て以太利領事館を探して廻つたが、例の案内者無しの旅行だから、間違で見當を付けて來た位ではなか〳〵分らない。其中に珍らしい物があれば立止つて見物などして居た爲に存外時間を費して漸やく半ば疲れかゝつた様な領事館を突留めた時には既に事務所の時間が過ぎて了つて居たので、如何に叩いても開けて呉れぬ。繰り叩いたので一人の婦人が窓から顔を出して用事を尋ねたから、西班牙語よりは少し上手な以太利語で、離宮見物の許可證を呉れと迫ると、時間が切れて居るから遣られぬと答へる。予は呉れぬなら歸らぬと云ふ歌四押問答の末遂に一枚の書付を呉れた。なあに何時でも遣れるやうに印刷した物があるのを外國人だからとて馬鹿にしてあたのだ。斯様な場合は更に角押强く行くのが旅行の秘訣である。

一日を費して漸く手に入れた許可證を持つて、以前の通路から離宮の南に當る鐵の門に迫り付き、予は始めて門内に進入つてナイプレスの並んだ庭を通つて夫から又次の門を叩くと、西班牙の少女が出て來て戸を開けて呉れた。處處は離宮の小庭となつてゐる。其真中には水の一杯溜つた槽があつて黑

側には種々なる草花が咲揃つてゐる。此點はアルハムブラの干乾びたのに比して如何にも水々しい生命が見える。然し中庭を廻つて建つた廻廊や廣間は荒れもムアー時代のものであるけれども陶器の敷瓦と植込み其他の構樣は總て以太利式である。予は澤山のムアー式小室を通つて彼の肖像畫の掛つてゐる室にも行つて見たが、繪は荒れも拙いものでボアンデルの肖像としてあるのも頗る曖昧なものであると思つた。總て此等は模寫畫であつて俄かに集めたものらしい。

此所は夏の涼風と遠望とでアルハムブラに勝つてゐるので、眺望の爲に設けた物見臺の塔がある。其三階の上が即ち下に話す獄の巡廻に出た皇子の室であつて、彼の文通ひの最初に鳩が鷹に追はれて逃げ込んだ所だ。

予は此塔の頂上で對面のアルハムブラからグラナダ市街の全景乃至遠かに光り流るゝダロー河の流域に於ける荒野を眺めて此一幅のパノラマに暫らく恍然として居た。又此塔の後即ち日の山に向つた方には猶王樹などの凸間した岩石の間に見える外、所々にムアー時代の瓦や物見臺などの遺跡が見え

て遥か東の方にはシエラ、ネバダの千古の雪が澄渡つた秋の空に光り輝いてゐる。

見に角ヘチラリフェ離宮の見物は此雄大廣濶な眺望を予に與へた丈けで別に寫生の材料を供給しなかつたので、歸り途に先日祭殿の日に邪魔をされたインファンタスの塔を寫生してホテルに歸つた。然し今日の見物に就ても又一場の物語が無いでもない。

聖の巡禮

戀の巡禮

皆々グラナダのムアー王に喰鞨りの皇子しか有たなかつた王様があつた。其皇子の名は銅戸太子アームドと呼ばれたのであつたが、其家來共の力で無理の銅戸太子と云ふ綽名を半つた。其意味は太子が嬰兒の頃から總ての點に於て完全無缺の人であるとの徴候を示したからであつた。而して星占家等も其將來を豫言して完全なる皇子として、且つ榮華ある帝王と謳ひるのであつたけれども、其運命の上に只一點の雲が懸つてゐると云ふ事に一致した。其雲の色は薔薇の花の色ではあるのだけれども、尚精しく言へば薔薇色の雲が其運命の上に懸つてゐると云ふ事は太子が戀愛の情に富んで其感覚なる性質の爲に大なる危險に遭遇すると云ふ事であるが、然しながら其成年に達する迄の内に戀の誘惑にさへ堪へてゐれば此等の危險は消滅して終つて生涯は少しも障碍なき幸福のものであるとの事であつた。

此様の危難を豫防する爲に父王は熱考の末に厩戸太子を或る場所に閉籠めて決して婦人の顔を見られない様に又は戀愛に關する話を聞せない様にする事にして、其目的の爲にアルハムブラの上なる丘陵の中腹に立派な宮殿を新築した。其周圍は愉快な花園に圍まれてゐるけれども又高い塀に取卷かれてゐる。今は迄へヂラリア「の離宮として知られてゐるのが夫であつた。此宮殿の内に年若い皇子は全く幽閉されて了つてエベンボナッペンと云ふ最も物識りの且つ最も武骨な學者の監督の下に置かれた。此養育掛の學者は其生涯の大部分を挨及で過つてゐた者で、活きた人間の花の艶麗に接するよりは象形文字の研究やピラミッドや墓などの探檢に從事して挨及の木乃伊の事に精通してゐると云ふ先生であつた。此學者は皇子に總ての事を教育せよと命ぜられたが唯一つ戀愛と云ふ事丈けには全く盲目にして置く様にと厳命された。そして父王の曰はるゝには、

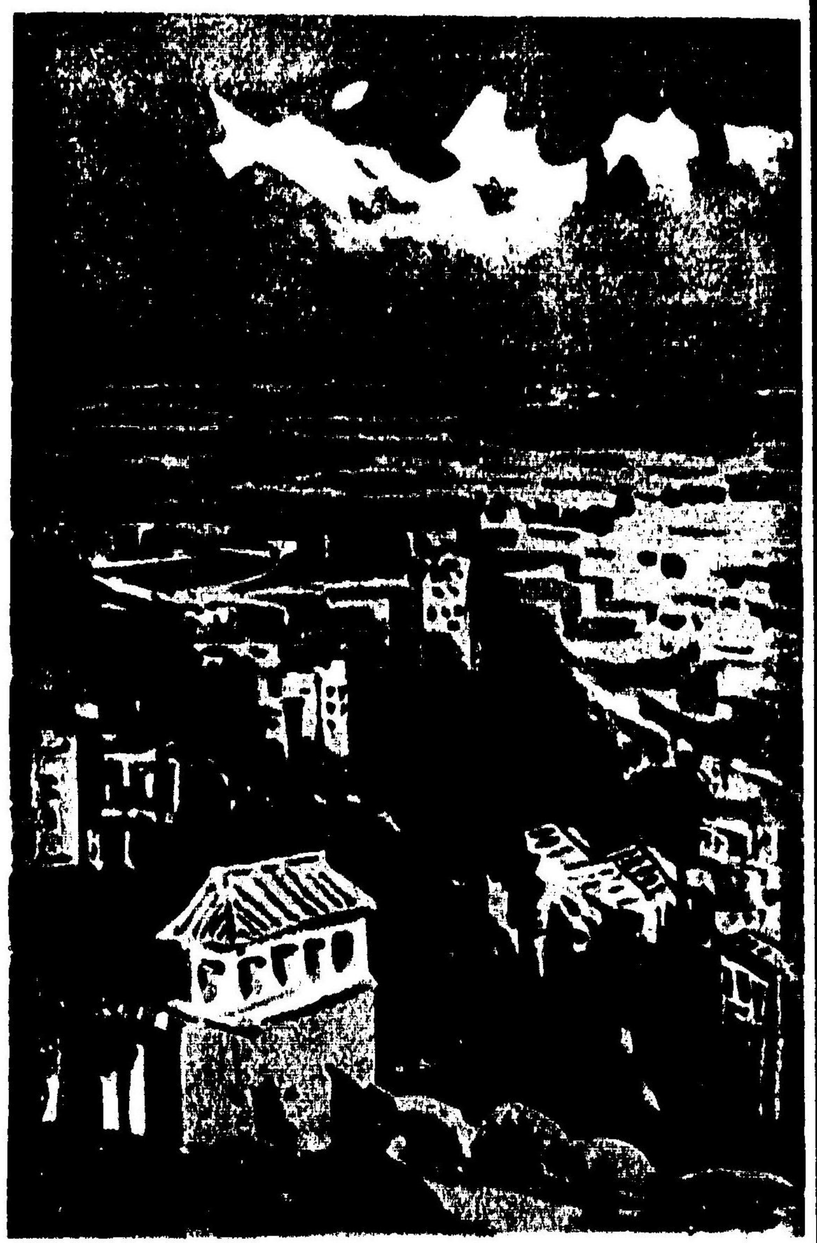
「汝が必要と認むる丈けの總ての警戒をして夫でも其効能が無つたら汝は其責任を償ふ爲に汝の首級を失はねばならぬぞよ。」

之を聞いたボナッペンの無味乾燥な顔色には變れた様な微笑が現はれて、

「其邊はどうか御安心下さいませ。私も私の首級の飛ぶのを心配する必要はありませぬ。私としてもそんな無用な教訓を與ふる様な者では御座いませんから。」

此哲學者の嚴肅なる監督の下に皇子は宮殿と其庭園との内で成長された。其從者としては黑奴の奴隷が居る計りで、恐ろしい容貌をした黑奴共であるから戀愛などは思ひも寄らぬ道中で、若し彼等が戀をしたとしても其思ひを遂べる言葉を有たないのである。

エベンボナッペン先生は夫から皇子の特殊な天才に注意して挨及の荒誕無稽なる物語に一致させやうと試みたけれども、皇子は此點には甚だ進歩が緩いのであつて、直に皇子は哲學上の傾向を有してゐない事が明白となつた。然しながら皇子は又驚く可き程從順な性質で如何なる忠告にも容易に從ふので、常に彼の養育掛の教訓の虚になるのであつた。斯くて皇子は其不平を抑へながら忍耐して長い講義を聞いて居たので、其二十歳に達した時には皇子



ヘネラリフエよりアルハムブラを望む

としては能く可き學識を備へたのであつたが、厭愛なるものに就ては全く門外漢であつた。

此頃から皇子の行爲には一の變化を來した。皇子は全く勉强を止めて了つて庭園を散歩し噴水の側で沈思默想する事が好となつた。其内に今迄少し計り習つた事のある音樂の趣味が非常に進歩して來て詩人になる徴候が著しく現はれた。養育掛の先生は非常に驚き恐れて此等の空想を追拂ふ爲に代數學の嚴格な課程を與ふる事にした處が皇子は一向之を好まないで、

「私は代數をやるのは嫌で仕樣がない。私は何か外の心靈上の事問がして見度い。」

と云つて嘆願さるゝけれども先生は冷淡なる顔を打振り其心の中で、

「是は哲學では最早駄目ぢや」と皇子は自分で心を持つてゐると云ふ事に氣が付いたのだ。」

と獨語して尙も皇子の靈性を嚴重にして其成行を見てゐると、其天性の中の隱れてゐる優秀な點が今將に活動し初めて、何かの目的物を視してゐる事を

ヘキクリエトリアルハムクを望む

魔の宮殿

として見る可き學識を備へたいであつたが、感受なるものに就ては全く門外漢であつた。

此頃から皇子の行爲には一の變化を來した。皇子は全く勉强を止めて了つて庭園を散歩し噴水の側で沈思默想する事が好となつた。其内に今迄少し計り習つた事のある音樂の趣味が非常に進歩して來て詩人になる徵候が著しく現はれた。養育掛の先生は非常に驚き恐れて此等の空想を追拂ふ爲に代數學の嚴格な課程を與ふる事にした處が皇子は一向之を好まないで、

「私は代數をやるのは嫌で仕樣がない。私は何か外の心靈上の學問がして見度い。」

と云つて嘆願さるゝけれども先生は冷淡なる頑を打振り其心の中で、

「是は哲學では最早駄目だや哩。皇子は自分で心を持つてゐると云ふ事に氣が着いたのだ。」

と獨語して尙も皇子の監督を嚴重にして其成行を見てゐると、其天性の中の隱れてゐる優美な點が今將に活動し初めて、何かの目的物を探してゐる事を

覺つた。皇子は離宮の庭園内を何とも原因の分らぬ狂熱の爲に徘徊して、或時は只茫然と冥想に耽つてゐるかと思へば、俄に琵琶など取上げて最も斷腸の音を奏し、次に其琵琶を投出して烈しい身振りをしながら嘆息するのであつた。

夫から皇子の愛情深い行動は草木の樣な物に迄及んで、非常にお氣に入りの花が出來て之を可愛がらるゝ事が夥しい。又特別に好きな樹木が出來て、其内に最も優美な恰好をした枝葉の垂下つたのに其愛着心を注せかけて、其幹に自身の名を彫付けるやら、其小枝に花束を掛けるやら、其琵琶の音に合せて賞賛の詩句などを歌ひなどする樣になつた。

養育掛の哲學者先生は此激動し易い樣子を見て非常に恐怖した。最早是から一歩先が大事な所である。僅か計りの手騙りが出來れば秘密の智識の幕が開かるゝのだ。是では皇子の身の上も又は自分の首の上にも危險千萬であるからと言ふので急ぎ彼の誘惑多き庭園の散歩を禁じて離宮の一番高い塔の内に閉籠めて了つた。此塔の内には立派な室が幾個もあつて非常に眺望に富ん

であるのであるが、其代りに地上から頗る高く聳へてゐるから皇子の感興し易い風情に危險の恐ある香氣ある容氣や、人を魅する様な小亭などから、遥かに上の方に在るのであつた。

此側縛の裡に在る皇子を慰さめ、其徒然の時間を覺へず費さしむるには如何したら好いか、養育掛の先生は最早智慮の有り丈を出して了つてゐる、そして又代數學でも持出さうものなら大變であるから、之には頗る閉口した。然るに偖にもエペン、ボナッペン先生は換及に於てセバの女皇から賜へられたソロモン王の後裔と名乘る一猶太人から烏頭の言葉を聞分ける事を學んで居たから、早速之を皇子に告ぐると皇子の眼は活潑に輝いて熱心に其研究に從事さるゝ様になつたので遠からずして其道に熟練の人となつた。

偖此から以後の離宮の塔は最早寂寞を感じなかつた。皇子は羽毛の生えた朋友と話する事が出來るやうになつたのだ。先づ第一番に皇子の愛意になられたのは、其塔の裏目に巣を作つて居て餌食を探す爲に遥かに飛び廻る鷹であつたが、皇子は此鳥に對しては餘り愛する氣も出ず又之を尊敬する心も生じ

なかつた。此鷹なるものは元來空中の海賊であつて、傲慢無禮の性質であるから其話す事も掠奪や暴勇や亂暴なる功績に關するもの許りであつたからだ。

次に皇子の愛意になられたのは一羽の鴉であつて、此像樣相な顔をした鳥は塔の壁の穴の中から大きな頭に驚いた様な眼を睜つて終日人を睨み詰めて居るけれども夜になると何處とも無く遊びに行つて了ふ。そして非常に物識りの風を裝つて居る先生で天文學や月の事などに就て語をしたり、又は魔術の様な事にも一寸眼を容れて見たりするのであるから、精神上の學問に憧憬して居る皇子の事であるから、養育掛の哲學者の話よりは深奥なる意味がある と思はれるのであつた。

北次には蝙蝠と云ふ先生がゐて、穴蔵の天井の眞闇な隅などに終日ぶら下つて居て夕方から翼々と舞出すけれども、其見る眼は萬事にかけて朦朧たるものであるから、從つて又何等の興味も有たない様子である。

其他に皇子が先づ最初丈け氣を奪はれたのは燕子であつたけれども、燕子は

只お饒舌と云ふ丈で暫らくも靜としてゐないで屋根の上で騒いでゐる許りで、時とすると非常に長い間囀を續ける事があるけれども、眞覺軍に其淺學を現はすのみで、何事でも知つてゐる風をするけれども何事にも精通して居ないのを告白するのである。

皇子が鳥の言葉を了解するやうになつてから以來、實地に話をしたのは此等の數種に過ぎなかつた。皇子の居らるゝ塔が餘り高いので其他の鳥は之に近寄る機會がないのである。皇子は直に此等の新らしい朋友に倦が來て、其話は少しも腦を刺戟せず又心に何等の感動を與へないから、次第に元の寂しい境遇に復つたのである。其内に冬も暮れて春が來たから世間は花と香薬と新都たる香氣とに充ち滿ちて、鳥は其伴侶を求め其巣を作る可き樂しき時節となつた。

不意に感動の事、離宮の下の林や庭園内から一齊に鳴出す鳥の聲が聞ふて塔の上なる皇子の耳を驚した。其聲は各方面から全く同じ問題に就て起るので――戀愛、々々、々々――と鳴くのが種々なる音調で響き渡るのである。皇子は之を默つて聞ゐて居られたが、頗る心配で堪らない。

「其戀愛と鳴く聲は何事を意味するのであらう。今や世界の問題は皆此一語にある樣であるが自分には少しも其意味が分らない。」

と呟きながら、朋友の鷹に之を尋ねらるゝと惡党の鳥は嘲弄的の口調で、

「其事ならば地上の平凡な鳥輩に御尋ねなさい。私は空中の皇子であるから其奴等を餌食にする樣に出來てゐる。一語にて盡せば私は軍人であるから戀愛など云ふ事は一向に知りません。」

と答へたから皇子は怒つて其方を打捨てゝ此度は隙の穴の中に居る鳥に尋ねられた。そして心の中で、

「此奴は平和な習慣の鳥だから多分自分の疑念を解いて與れるであらう。」と獨語して、此塔の下の林の中で棲てゐる鳥が歌つてゐる彼の戀愛と云ふ言葉は何事であるかと尋ねられた。然るに鳥は之を聞いて態と怒つた樣な顏をして答ふるには、

「私の夜の時間は全く學問の研究に費されるので、晝間は又之を追想してゐ

る許りだから。殿下の御話の様な烏の嗜癖に耳を傾けた事はありません。私は彼等の問題とする所を排斥する者です。私は神に感謝します。私は歌ふ事が出来ないのが仕合であります。私は哲學者ですから、戀愛と呼ぶ所のものに就ては少しも知る所がありません。」

鬼子は次に六歳に達入つて、朋友の蝙蝠が倒しまにぶら下つてゐるのに向ひ同様の問を發した。すると蝙蝠は其鼻を最も荒々敷く顰めて、

「殿下は何んで左様な馬鹿げた質問で私の朝寢の愉快を妨げますか。私は他の鳥が寢て了つた夕暮の頃から解出すので、左様な問題に關係した事はありません。私は且又烏でもなければ獣でもないです。私は夫を天に感謝して居る者です。私は總ての鳥や獣の罪惡を知つて居ますから彼等全體を嫌ひ者であります。一語にて盡せば私は厭世家ですから、戀愛などゝ云ふ事に就て少しも知る所がありません。」

と答へた。鬼子は仕方なしに今度は最後の頼みとして熊子を探されたが、了度塔の頂に輪を描いて飛んでゐるのを見出したから同じ問を發すると、熊子は

例の通り非常に輕蔑にしてゐるので碌に返事をせうともしない。

「私は御承知の通り非常に多忙な身體ですから澤山の仕事に追はれてそんな問題に注意する閑暇がありません。私は毎日千圓位の勘定をしなければなりません。又千圓位の重要な事件に關係しますから、そんな歌の様な小さい事柄に費す暇とては一瞬間としてもありません。一語にて盡せば私は此世界の市民であります。私は戀愛など云ふものに就ては何も知る所がありません。」

と言捨てゝ箭の如く溪の方に下りて行つたが直ぐに其姿は見えなくなつて了つた。

鬼子は失望と疑惑の裡に暫らく茫然としておられたが、尚其好奇心を滿足させる事が困難であるのに少し腹立しく感じて居らるゝ時、丁度も彼の養育主任の哲學者が其室に這入つて來たので、鬼子は何時になく熱心に之を出迎へて、

「先生貴下は私に此世界の知識を澤山授けて下さつたですが、然し唯一つ未だ殘つてゐるものがあるやうで、私は全く其事には盲目であるからどうか

して之を尋ねたいと思ひますが。」

哲學者「夫は御易い事で只問題さへ御出しになれば私の知恵の及ぶ限りの事なら何事でも教へて進せます。」

皇子「夫ぢや、教へて下さい。貴下は最も深奥なる學術を究めた人であるから、戀愛と呼ばるゝ物の性質はどんなものであるかを教へて下さい。」

大哲學者のエペン、ボナッペン先生は此一言に雷霆から撃れた様に感じた。そして身體を戰慄はして面色を失ひ其首が最早肩の上にぶらりと下つた様な氣がした。

「何者が皇子に其様な問を教へましたか、又皇子は何處から其様な馬鹿げた言葉を覺へて居らしやりましたか。」

皇子は先生を塔の室の所に連れて行つて、

「彼を開て御覽、塔の下の林で蛍が其情婦の薔薇の花に歌つて聞かせてゐるではないですか、又晩れの花の泉にも青葉の浪からも同様の歌が響き渡つてゐるではないですか、戀愛、々々、々々と云ふ歌が皆な一様な音樂を奏べて

ゐるではないですか。」

哲學者「神様の力は絶大無限である、彼の鳥でさへも此秘密を裏切りしやうとしてゐるのに人間の心から之を秘密にして置く事がどうして出來やうぞ。」

と言つて皇子に向ひながら、

「殿下には彼様な誘惑の音樂には耳を閉いで御出なさらんければいけません、殿下は彼様な危險な知識には心の門を閉めて居らつしやらなければいけません、彼の戀愛なるものが併び可き人間の愚事の原因の半分を占めて居るのであります、此が骨肉や親友の間に深怨を結び、爭鬪を惹起す所のもので、其結果は人を謀殺し或は惨憺たる戰爭となるのであります、其爲には心配や悲嘆が生じ、嫌な日を送り眠られぬ夜を過し、青年の血氣を消磨し衰して老年の苦痛と悲嘆とを與ふるのでありますから、皇子は此戀愛と名付くるものには全く盲目でゐらつしやらなければなりません。」

哲學者のエペン、ボナッペン先生は斯く答へて直に其室から退いたが、皇子は以前よりも尚ほ深い疑惑の網に彷徨ふて居らるゝのみであつた。夫から皇子

ば正直に其事を忘れやうと試みたけれども、反つて其事に種々なる空想を起す丈けで、彼の戀愛なるものが依然として其思想中の最も上位を占むるのである。夫から皇子は尚も能く鳥の囀音に耳を傾けてから獨語さるゝには、彼の囀音には決して悲みが籠つてゐないで、總てが優美に且つ愉快さうに見えるから、若も戀愛なるものが此の如き惡事と爭鬪と滅は骨肉相食む事の原因であるならば、何んで彼等は林の中で愉快さうに飛翔り、花の中で歌ひ戯してゐるものかと。

或る朝皇子は長椅子の上に横になつて此譯の解らぬ問題を默想してゐると、其室の窓の扉はそよ〳〵吹く朝風に開いてゲローの溪から吹上ぐる橙子の花の香で充滿ちた。夫と同時に矢張り同じ問題を歌つてゐる鳥の囀音が微かに聞ゆるので、皇子は深い溜息を吐いて尚耳を傾けて居らるゝ時、鳥と落し來る鳥の羽音と共に窓に迫はれた一羽の鳩が、窓から内に飛込んで來て呼吸も絶々と床の上に落ちた。其間に之を追つて來た鷹の方では得物を失つたので山の方に高く舞ひ去つて了つた。

皇子は喘ぎ苦んでゐる美しい鳩を手捕にして其羽毛を撫でながら自分の胸に抱いて進つて、其次に黄金の籠の内に入れて最も白い小麥と最も清い水を與へた。然しながら鳩は食物を嫌つて頭を傾れながら苦しさうに喘つてゐるのである。

皇子「お前は何がそんなに苦しいか、お前の欲しい物は皆な其處にあるではないか。」

皇子は無論鳥の言葉に熱進してゐらるゝので、其話は自由自在に出來る。

と鳩は之に答へて、

「否、別に其樣な譯ではありませんが、私は私の心の仲間から別れてゐるではありませんか、そして此戀の時候の幸福な春の空に此不幸な目に逢つてゐるではありませんか、どうぞ私の心中を御察し下さい。」

皇子「戀愛の事で苦しんでゐると云ふのか、其戀愛と云ふ事が、私には少しも解らないが、少し其話しをして呉れる譯には行くまいか。」

鳩「御話申しませうとも、戀愛と云ふ者は一人では苦痛で、二人では幸福で、三人

では喧嘩と怨敵になるものであります。之は、二人を一所に引寄せる呪ひで、宝の血き同情で二人を結び付け、双方共に本願を成すやうにするのであります。然し夫が別れて居ると憐れむ可き者となります。殿下には此優美な感情で結び付けられた人はありませんか。

皇子「私は私の牧師のエベン、ボナッベン先生が一番好であるけれども、先生は時々面倒な事を云つて困るから、どうかすると私一人で居た方が氣樂に思ふ事があるんだ。」

鳩「私の申上げます同情と云ふのは其様な事ではありません。私は戀愛の事を申上げるので、戀愛は大々的不思議のものであつて且つ人間生活の原理であります。青年時代の限り無き快樂で老年の真面目な愉快であります。眼を放つて世間を御覽なさい。此時候では天地萬物が皆く戀愛であります。縱て活とし活ける者は其配偶者を持てゐます。最も見すぼらしき鳥でも其情婦と嗜き変して居ります。彼のむくつけき甲蟲でさへ蓋の中で女の甲蟲を慕つてゐるのです。又塔の頂よりも高く舞ふてゐる彼の胡蝶は矢張り二人の

戀愛を楽んでゐるのです。然るに殿下には青年の貴重なる時日を此戀愛なる事を知らないで過しなさつたのですか。誰も女性と云ふものは居ませんですか。殿下の心を誘惑にする美しい泉女とか愛す可き處女と云ふものがあつて、殿下の胸の中に慕しい様な苦しみや可愛らしい悩みを起させて其爲に多少の混雜を起させたと云ふ様な事はありませんか。」

皇子「少しは解つて来たやうだ。心の内で其様な混雜を起した事は再々あつたのだが、自分には其原因が判らないでゐた。然しお前の云ふ様な相手は何處に居るだらう。斯んな寂しい住居で何處を探せば好いのだらうか。」

其次に鳩が答へた事と、尚少々許りの問答で以て皇子の始めて學ばれた戀愛學の課程は充分であつた。

皇子「是は仕損つた事をした。若し戀愛なるものが其様なに愉快なものであつて、其に妨げをするのが左程に悲惨なものであるならば、上帝は私が其樂の妨げをするのを御許しなさるまい。」

と言つて鳥籠を開いて鳩を外に出し、親しげに之に接吻してから窓から放つ

てやり

「お前は幸福な鳥だ、是から歸つてお前の年の若い青春の時節を其心の配偶者としてゐる者と樂しむが好い、私は戀愛なるものが決して訪づれて來ぬ此恐ろしい塔の内にお前を私の囚人仲間として置くに忍びない。」

鳩は嬉しげに其翼を羽打きして空高く舞上り、颯と落し行く羽風諸共ぱーー河の花咲く岸邊を指して飛んで去つて了つた。

皇子は其影の見えなくなる迄見送つて、尖から深い煩悶に陷つた、曾つて其耳を喜ばせた鳥の囁音は今や苦々敷く聞きなさるゝので、戀愛々々、々々と囁く聲は實に斷腸の思ひを與ふるやうになつた。憐れむ可き青年の皇子は今や其清淨無垢なる心中に戀愛なる色を了解したのであつた。

其次に養育掛の先生が皇子の前に出た時に皇子の眼は火の如く輝いた。

皇子「先生は何故に私を盲目同樣に育てましたか、何故に人間生活の一大不思議と原理とを私に隠してゐましたか、私は尤も嬉しい歡樂でも其事に通じてゐるのが漸く解りました、御覽なさい天地萬物は皆快樂に滿い

でゐるのです、總て活とし活ける者は其配偶者と二人で樂んでゐるのに、私許りは何故に此快樂を禁じられてゐるのです、何故に私の青年時代は此快樂を知らないで過して來たのですか。」

哲學者のボナッペシ先生は最早此以上に秘密にしても駄目である事を覺つた、皇子は既に彼の危險なる禁せられた思想を自覺して了つたのである。

先生は其處で仕方なしに彼の運命の上に降つてゐる災難を變じて幸福となす爲に此の如き教育方を採つたのであると打明けた。

「嘗う云ふ次第でありますから、私の生命は最早殿下の御考へ次第で無くなるのですから、殿下が戀愛の情を御覺りなさつた事を父君に御話し下さい、左すれば私は首を差出して其責を負ひます。」

と打嘆いた皇子は然しながら普通の青年の樣に道理に明るい爲に、其養育掛の先生が斯く嘆くのを聞いて、流石に道理ある事だから此事をば父君には知らさない事に決心した、加之のみならず皇子は實際此老先生に心服してゐるのと、彼の戀愛なるものも只理論として之を感得した許りであるから、此哲學

者の首を殺ばすよりも自分一己の胸中に秘め置く丈の事で滿足する事にした。

皇子は斯く決心されたけれども其運命の手は尚も進んだ境遇まで皇子を連れて行くのである。夫から數日の後皇子は塔の間の處に腰掛けて先日以來の事を思出しで居らるゝと、丁度其時の鳩が空中から舞下りて來て恐れげも無く皇子の肩に止つた。

皇子は懷かしげに之を抱いて、

「お前は實に幸福な者である。其羽翼を持つてゐるお陰で世界中何處でも飛廻る事が出來るのだ。時に我々が先日分れてから以來お前は何處に行つてゐたのか。」

鳩「遠い〳〵國に參つて居りましたが、私は今度殿下の御慰に報ゆる爲に其國から珍い消息を持つて參りました。私が先日の歸途に野越へ山越へして空高く飛行きますと、私は不圖花と果物で一杯に爲つてゐる美くしい庭園を見出しました。其場所は緩るく流るゝ河の岸にある綠の牧場の中で、其庭園

の眞中に一つの宏壯な宮殿がありました。私は羽翼が大分疲れて居ましたから其上に舞下りて一つの小亭の屋根に止りますと、丁度其下の草原に年若い一人の皇女が居られまして其姿は花耻かしき少女の盛りでありました。其周圍には同じ年頃の侍女が大勢附添ふて居りまして、頻りに花の冠や花の環を做ふて皇女の身體を飾つて居りましたが、其處にある庭の花も野の花も皇女の美しさには叶ひません。然し此皇女は此處で秘密に成長されて居りますので世間では其美しさを知る手段がありませんのです。何故なれば此庭園は高い塀に取圍まれて居りまして人間の出入を許しませんからであります。私は此美しい皇女が浮世の塵に染まぬ清淨無垢の無邪氣な處女であるのを見まして、之は殿下の戀を爲さる爲に天が特更に作られたものと思ひました。」

鳩の此說明は皇子の燃易き心には火花の如きものであつた。皇子の心中に潜んだ戀愛は直ちに其目的物を得て無限の情を其皇女に送ふ樣になつた。夫から皇子は直ぐに最も熱心な最も優しい心を籠めた手紙を書いて之を鳩に托

つける事にしたが、其手紙の中には皇子も又其身體の自由を束縛されて居るから皇女の脚の下に身を投げて其愛を求むる事が出來ないのを悲しむ由をも認め、次に其天性の詩才が戀情の爲に興奮されてゐるので、最も優美にして最も能雅なる對句をも書添へながら、其文句の始に、

世に知られざる美人の君へ　　幽囚の皇子網戸より

と署名し、麝香や薔薇の香水を濺ぎかけて之を鳩に渡しそして、

「最も信頼す可き使者よ、山や溪や野や河を越へて飛んで行つて私の寵中の人に此手紙を渡す迄は決して小亭に休息したり又は地上に脚を着けてならぬぞよ。」

と命せられたので、鳩は容高く舞上りながら其行先の見當を定めてから藍地に一方の天を望んで飛去つた。皇子は眼を擧げて之を見送り其姿が次第に消へ失せる迄一心に眺めて居た。

夫から皇子は毎日〳〵鳩の文遣ひの歸つて來るのを待つて居たが、然し少し

も其効が無つた。皇子は其爲に鳩の忘れつぽいのを惡口して居ると、或日の夕方彼の信ずべき鳩は其宮内に舞込んで來て皇子の脚下に落ちた儘死んで了つたのである。

鳩は此處に來る途中で何處かの惡戯者の箭に其胸を射られたのであつたが其使命を全ふする爲に一生懸命此處迄飛んで來たのである。皇子は此忠義の爲に一命を落した勇ましい鳩の運命を惜んで其死骸を抱上げて見ると其頸に小さい眞珠の鎖が卷付けてあつて、其鎖に綴り着けた小さい書像が胸の下に隠されてゐる。其は實に花の如く愛らしき皇女の肖像である。此本人こそ疑ひもなく「世に知られざる美人」に相違ない。然し何處の誰であるか、どうして皇子の手紙が其手に入つて、又どうして此肖像を其相思の情を現はす印として贈つたのであるかは、不幸にして此忠誠な鳩が死んで了つた爲に少しも知る手掛りが無い。

皇子は一心に其肖像を打眺めて居たが遂に涙の爲に眼白も分らぬやうになつた。そして之に接吻し又は懷中に抱きなどして殆んど狂氣の如くして居

たが、

「美しい偶像の君よ、然し君は罪に偶像たるに過ぎない、北露を宿せる如き眼は優しげに我顔を眺め、北薔薇色の唇は宛も我を勵ます言葉を洩らしさうに見ゆるが、矢張り之は無益の空想である、此美しい眼は我よりも幸福な観審者を矢張り此様にして眺めたのでは無らうか、我はどうして此廣い世間で此肖像の主を尋ね出す事が出來やうか、我々の中間にはどんな山嶽が隔てゝ居るかも知れない、又どんな闇々が挾まつてゐるかも知れないのである、又どんな危難が之を沮搭するかも分らぬ、恐らく今の間でも眞の只今でも多くの惡人が其周圍を取卷いて居るかも分らぬ、其間に我は只一人此塔の中に幽囚されて、徒に悶いた妻に憧憬れつゝ貴重の時を費してゐるではないか、」

銅戸王子の決心は遂に、

「自分は此宮殿から逃出さう、斯んな忌はしい牢屋から一刻も早く逃げ出して戀の巡禮となつて世界各國を廻り此皇女を探し出す事にしやう、」

と云ふ事になつたが、然し壹の間に此塔から抜出す事は頗る困難である、只今日迄頗る從順であつた皇子の心中に斯んな企圖があらうとは誰も氣が着かないから夜中であれば警戒が左程に嚴重でない、然し盲目滅法に逃げ出して田舍の道路さへ知らないから何處をどう辿つて好いのか少しも判らぬ、此時皇子は例の鳥の事を思出した、此奴は夜中各所を徘徊て居るから何處の小徑も抜路にも好く通じてゐる筈である、皇子は早速其處居所を訪ねて地方の地理を尋ねられたが、之を聞いた鳥は非常に鹿爪らしい顔をして、

「殿下よ、我々鳥は今こそ斯く零落して居るけれども元來は非常に眼先の利いた繁殖した家柄でありますから、西班牙國中到る所に廣宮や古城を有つてゐるのです、其爲に何處の山の塔でも野原の城廓でも又市街の城壁でも伯父か兄弟か從兄弟かゝ住んで居ない處は無いのです、私は其眷族廻りをして居た時何處の隅々でも覗いて來ましたから此國内の秘密ならば何事にでも通じて居ない事はありません、」

皇子は鳥が深く此國内の風土記に通じて居るのを聞いて非常に打喜び、其後

の由來から決心の程を打明けて、其道伴となり且つ相談役になる樣にと懇請した。すると鳥は不愉快な顏をして、

「殿下が御出かけなさるのは好いですが、私は戀愛の事に關係する樣な鳥ではありません。私は一生涯を冥想に耽る事と月に嘯く丈に伸けてゐるのですから。」

皇子「嘗う怒つては困る。其冥想と月に嘯く事を判らくの間見合せて、私が踏出すのを助けて呉れるならお前の望む品物は何物でも御殿に上げるが。」

鳥「私は望む品物と云つても二三匹の鼠があれば澤山で、私の書齋には此穴があれば結構であります。私の樣な哲學者には其以上に何物が必要があるものですか。」

皇子「好く考へて御覽。お前は穴の中で嘯いて月を眺めて暮らして居る丈けでは其技量が少しも世間に現はれないで終るではないか。自分は他日國王になる時節があるから、お前を充分名譽と權勢の地位に上せる事が出來るのである。」

鳥は哲學者で其生活上の希望が極々低い者であつたけれども、然しながら野心は頗る盛んな先生であつたから、遂に皇子の頼みを聞いて其逃亡を助け夫から其遠路の顧問になる事を承諾した。

斯くて遂に囚はれたる青年の計畫は遂かに實行された。皇子は先づ所有の寶石類を集めて密かに其身體に着け、此を旅行中の費用に當てる事にした。そして其晩塔の出窓から網を下げて夫を傳ひながら難なく庭園に降立ち次に離宮の外廓を乘越へて、鳥に案内されつゝ夜の明ける前に山路遠かに落延びたのである。其所で皇子は其顧問に向つて將來の方針を協議した。鳥の云ふには、

「私の意見としては、先づセビイルの市街に行くのが宜しう御座いませう。私は數年前私の伯父を尋ねて其市街に行つた事があります。其折の事に私は毎晩市中を飛廻つて居りますと、或る寂しい一つの塔から微かな火の光りが洩れるのです。私は其塔の矢間に舞下つて見ますと、其火の光りは一人の亞剌比亞の魔法師の點して居るランプで、其周圍には澤山の魔術書があつて、其周の上には魔法師に捧及から隨て來た年老つた一羽の鳥が停つてゐ

たのです、私は其鳥と懇意になりまして、私の今日知つてゐる事の大部分を教へて貰ひました、夫から魔法師が死んでからも其鳥は矢張り其塔に住んで居ります、何故なれば其鳥は非常に長命であるからです、處で私は殿下に此鳥を御訪ねなさる事を御勧め申します、此鳥は元來賢者で魔法使ひでありまして不思議なる魔術を有してゐる者で、此點は總ての鳥がさうであります、けれども別して埃及の鳥が一番有名なもので御座ります、

皇子は此智慮ある忠告に感心して、其鳥にセビイル市の方に向つて進む事にしたそして其進伴を待過する爲に壹は眞闇な洞穴や崩れた塔の内などに眠つて夜丈け歩く事にした、鳥の方では又能く此等の隱れ場所のある所を知つて居つて、且つ此等の廣野などに深い趣味を持つて居るのである、

種無く此一行は或日の朝セビイルの市街に到着した、然し鳥は離別した市中を好まないから城廓の外にある大木に宿を取つた、

皇子は一人で市街の門を通入つて見ると、彼の鳥の住んでゐると云ふ古い塔が總ての建築物より一段高く聳へてゐる、其塔は今日迄セビイルの盟刺比盟

式塔として殘つてゐるゼクルダの塔と呼ばるゝものであつた、

皇子は大きな梯子段の曲り屈つたのを登つて塔の頂上に達すると、彼の話に聞いた不思議な鳥が其所にチャンと居るのである、此鳥は餘程年老つてゐると見えて頭の毛は灰色になり羽毛は總て荒れて了つて、片脚には濕膏がかゝり如何にも物懶い光りを放つてゐる、そして其脚も又一つしか無いので、片脚で止つて片脚で以て床の上に記した圓面を眺めて居る處であつた、

皇子は其尊敬す可き容貌と非凡の智識に感動してゐるから、恐る〳〵其傍に近づいて、

「御免下さい、私は世界の人を驚かせる貴下の御勉强を妨げて實に相濟みませんが、今貴下の前に現はれた者は總の爲に巡禮をして居る者で、如何したら其目的を遂する事が出來やうかと貴下の御意見を伺ひに參りましたのです、」

鳥は意味ありげな顏色をして、

「言葉を換へて言へば、殿下は私に手相を見て貰ひに御出になつたのですな

宜しい、貌て上げますから近う御寄りなさい、そして手の平を出して運命を司る所の不思議な線を御見せなさい。」

皇子「否、私ではありません、私は上帝から人間の見る事を禁じられてゐる運命の告示を聞いて見やうが爲に此處に來たのでは無くて、私は戀の遍歷である から、只其遍歷の目的を遂する予摂りを得る爲に來たのです。」

鳥は例の片眼で皇子の顏を睨みながら、

「夫では何ですか、戀愛の風の盛んなアンダルシヤ地方で戀人にでも逃げられたと云ふのですな、夫で此セビイルの市街に來て黑眼勝ちの處女さん達が橙子の木の下でザムブラを踊つて居る處に行つて好い相手を探さうと云ふのでせう。」

皇子は嚴格らしい一本脚の老鳥が斯んなに快活に語をするのを聞いて顏を紅くして且つ多少驚愕したのである。

「私はそんな氣樂な用事で旅行してゐるのではないです、アンダルシヤの黑眼勝の處女がグワダルクイヴアーの橙子の木の下で踊つて居やうとどうしやうと私には夫は何でもありません、私は何處に居るかも知れない神秘な一人の美人を探してゐるので即ち此の肖像の本人であります、かもして、最も有力なる貴下が其智識と技術の範圍内に於て出來る事であるならば此美人が何處に居る人であるか教へて下さい。」

顏の毛の白い鳥は皇子の執念深いのを見て怒り出した。

「若い者や美人の事を何で私なぞが知つて居るものですか、私の行つて見る物は古い者と壞れた物許りで新しい美しいものではありません、私は運命の象徵者で、人の死ぬるのを爆笑の上から知らせるやら死に瀕つた人の室の窓で羽打きをするやらが私の仕事ですから、そんな見も知らぬ美人なんぞの事は何處か他の所に行つて御尋ねなさるが好いでせう。」

皇子「貴下の樣な運命の予圖に精通した智慧者が斯う云はるゝ位であつて見れば、私は何處に探しに行つて好いのでせう、私は星の運命に由つて一國の皇太子と生れ、一國の運命に關する不思議な企ての爲に旅行をして居るのであるのに。」

鳥は皇子の言葉が其生れた屋に關係して居るのを聞いて、俄かに其態度と口調とを變へて尚も皇子の話に耳を傾けて居たが其の終るを待つて答ふるには、

「其皇女を探す事に就ては私の飛ぶ所が宮殿内の庭園や小亭の周圍でないから、殿下の御參考になる事を告る譯にゆきませんが然し、コルドバの市街に行つて大寺院の庭にある棕櫚の木を御探しなさい、其木の下に一人の大旅行家が居て各國の宮庭の皇后や皇女の事を能く知つて居ますから、殿下の御探しになつてゐる人の事も教へて上げるでせう。」

皇子「是は實に有難い、左樣なら夫では是にて御別れ致しませう。」

鳥も又無愛想に、

「鯨の巡禮さん、左樣なら。」

と答へて原の樣に首を傾けて床の上の圖面を眺めるのであつた。

皇子はセビイルの市街から驅出して城外の大木に居眠りをしてゐる道伴の鳥先生を探し出して、夫からコルドバの市街の方に進んで行つた。

繼て皇子は果物の勝生した庭園やグワダルクイヴアーの渓間を見下した美しい橙子やシトロンの林に沿ふてコルドバの市街の城門に着いたが、例の鳥は直ぐに城廓の中の眞閑な穴に隱れて了つたから、皇子は一人して彼の昔の頃有名なアヅダクマンの植ゑたと云ふ棕櫚の木の在る所を探しつゝ進んで行くと、此棕櫚の木は大寺院の廣庭の眞中にあつて兩方には樓子やシトロンの樹が茂つてゐる所に聳へてゐるから、直ぐに之を發見する事が出來た。

此處には澤山の僧侶達が廣庭の隅々の屋根の下に群集して大勢の信者は寺院の禮拜堂に近入る前に噴水で身體を淨めて居る。

處が彼の棕櫚の木の下にも又一群の人が居て何か非常に熱心に論じてゐる者があるのを聞いてゐる樣子である、皇子は心の中で、

「此男が見も知らぬ皇女の事を告げて與れる大旅行家に相違無い。」

と獨語して群衆の内に加はつて見ると、驚いたのは其話をしてゐるのは青く光つた羽毛の鸚鵡であつて、其世話好きらしい眼付と勿體らしい鳥冠とは如何にも自から英俊さうに思つてゐるのを示して居る、皇子は傍に立つてゐる

一人の男に向つて、

『是は一體何事です、斯んな堂々たる人達が人眞似をする鳥のお饒舌に聞惚れて居るのはどうした譯ですか。』

と尋ねると側に居た一人の男が、

『貴下は此鸚鵡の事を御存じないと見えますね、是はペルシャの有名な鸚鵡の子孫で其話の上手なので有名なものですぞ、其口先で東方の學問を總て覺えて居つて、詩を吟ずる事でも普通の話と同樣に遠くするのです、只此鳥は各國の朝廷に謁見をして來たので何處に行つても其博學は一つの奇談と賞贊されたものです、又何處に行つても美人の寵愛を受けて詩句を引用する事の出來る博識な鸚鵡として有名なものであります。』

皇子『夫で悉皆解つた、私は此有名な旅行家に少々内談がある。』

と言つて鸚鵡に秘密の會見を申込んで其用向の性質を打明けた、皇子が其話をして了うや否や鸚鵡は呵々と腹高く打笑つて殆んど眼には涙を溜めながら、

『御免下さい、餘り笑つて失禮ですが一寸繼に關した事を聞いても私は笑はないでは居られませんから。』

と云ふので皇子は此人を馬鹿にした笑顔に少し憤として、

『繼なるものは天然の大秘密で、人生の秘密な原理で同情の源泉たる可きものではないか。』

鸚鵡『御待ちなさい、殿下は何處から其樣な感情的の噂話を覺えて來ましたか私を信用なさい、決して惡い事は申しません、元來繼なるものは最早時代遅れであつて決して智識や教育のある人士の交際場裡では之を口にする者もありませんのです。』

皇子は彼の親友であつた鳥の言葉を思出して嘆息された、然し此鸚鵡は宮廷の内にも生活し、智識ある教育ある人士と相接してゐたけれども繼愛と稱する所のものは少しも知らぬと云ふのは不思議である、然しながら最早是以上に彼の胸中に溢れてゐる感情を思弄されるにも及ばぬなら、此處迄訪ねて來た直接の目的に向つて尋ねる事にした。

皇子『君は今日迄旅行した内には何處にでも自由に出入を許されて多くの美人の秘密な小室に迄行つたと云ふ事だが、其旅行中に此處に私が持つて居る肖像の本人に出會つた事は無つたか。』

鶏鶴は肖像を其爪で握んで頭を左右に傾けながら片眼窪で不思議さうに打眺めて居たが、

『どうも素的な美人ですな。美しい顔で實に美しい顔ですが、私共の樣に旅行中に澤山な美人に出逢ふ者には……だが、御待なさい。ゴめたぞ。尚一度見て見やう。全く有琴姫(アルヂヂンダ)に相違ありません。彼樣に可愛がられた皇女だから決して見忘るゝ氣遣ひはありません。』

皇子『有琴姫と言つても其居らるゝ所は何處だね。』

鶏鶴『靜かに〳〵探出す丈ならば譯はありません。此皇女はトレドの市街を支配して居る耶蘇教徒の王樣の獨娘で、彼の星占家と云ふ面倒臭い奴の讒言の爲に滿十七歳の誕生日迄世間を見せないやうに閉籠められて居るのですからして世間の男子は一人として此皇女を見た者はありません。私は皇

女を喜ばせる爲に其前に呼出されましたが、世界各國を見物して來た鶏鶴として申しますが、私は今迄此皇女の樣な柔婉な女性と語をした事はありませんです。』

皇子『私は本氣の御話をするのだが、私は一つの王國の皇太子で他日必ず王位に登る者である。私はお前を才能のある鳥で世間の事を總て了解して居るものと信ずるが、其皇女を予が手に入れるやうに助けて呉れる事は出來ませいか。左すれば予が宮廷内に成る立派な地位を與ふる事を只今から約束して置くのだが。』

鶏鶴『夫は至極結構でありますが、若し出來る事なら名義丈けの役目にして御扶持を頂戴する事にし度いもので、私共の樣な智慧者は一體に勞働する事が非常に嫌ひですからな。』

約束は是で出來上つた。皇子は以前に這入つた門から出てコルドバの市街を去る事にして、城壁の穴から鳥を呼下して鶏鶴に引合せ、是から別嬢同志として交際するやうにして一同打連れて旅館に上つたのである。

處が其旅程はなか〳〵皇子の氣の急く程には速どらない。鵜鳥は元來上流の生活に慣れてゐるから朝早く起されるのを好まぬ。之に反して一方の鳥は旅嚢の爲に頗る長い時間を費すのである。加之のみならず其古物好の趣味の爲に途中に在る凡ゆる古跡を探つて其度毎に長々しい傳說を得意に語すのであつた。皇子は始め此鳥と鵜鳥とは兩方共に學問した鳥であるから、調伴に旅をしたら至極愉快に感激するであらうと思つて居られたが、此程程間違つたものは無つた。

鳥と鵜鳥とは絶えず口論許りしてゐる。其一方は智慧者で一方は哲學者である。つたからだ。鵜鳥は詩歌を諳誦し、新らしい書物などを批評して博學を衒い其內の一圓題を何か捕へては絮りに議論を揮ふのであつたが、鳥は此等の問題を眞の些事と見做して形面上の事でなければ少しも相手にならないのであつた。

鵜鳥は其爲に鳥を馬鹿にした歌を詠つたり駄洒落を言つたりして絮りで笑ひ興がつてゐると、鳥の方では其感嘆を漏されたとして非常に怒つて顏を顰

めて膨れ返つた。一日語を言はない事が常であつた。

皇子の方では又自分の空想に耽つて美しい皇女の肖像に許り見惚れてゐた爲に此等の家來の不和な事などを注意してゐる暇が無つた。斯んな風で一行はモレナ山の嶺を越へてクマンチャとカスタイルの野を横切り西班牙と葡萄牙の平分以上測してゐるタガス河の邊を沿ふて行く內に遥か向ふの小山の上に城壁に圍まれた一つの市街があつて其眞下にはタガス河の急流が渦巻き流れてゐるのが見える。

鳥「彼處に見ゆるのが古へて有名なトレドの市です。市中には又有名な古物が澤山あります。御覽なさい彼の赤い瓦や圓い屋根の多い事を。彼樣のは皆な滿月を經て白けてゐますけれども又傳說上の壯觀に包まれて居りますので、私の先祖の者は彼處で異想に耽つて居た事が往々ありました。」

鵜鳥「なんだ馬鹿々々しい。古器物や傳說や昔の先祖の夢が我々に何の役に立つものか。夫よりも我々の旅行の目的を眺めた方が何程好いか判らぬ。若い人と美人の居る所として見た方が。御覽なさい。殿下。彼處が殿下の長い間探

されました皇女の住家であります。」

皇子は鵬鷄が秋へて奥れた方角を眺めた。するとタガス河の堤に續いた緑の牧場の中に華麗なる宮殿が見える。夫が彼の鳩の話に聞いた背像の主の住家の有様に能く似てゐるから、皇子は胸を躍らせて尚も其方を打眺め、

「彼の美しい皇女は今しも彼處の木陰に遊び戯れて居るか、或は彼の壯麗な廻廊に優しい歩みを運んで居るか、或は彼の崇厳なる屋根の下に身を横たへてゐるであらう。」

と獨語して尚能く眺めて居ると其庭園の周圍には非常に高い塀が廻らしてあつて如何しても乗越へる事が出來ないらしい。而して其外には又多くの武裝した番兵が厳重に巡邏してゐるのが見える。

皇子は鵬鷄に向つて「お前は人間の話が出來るから、彼處の庭園に飛んで行つて私の意中の人を探出して、――網戸皇子と云ふ天の星に導かれた戀の巡礼が皇女を探す爲にタガス河の岸に到着した――と傳へて奥れ。」

鵬鷄は此大事な使を命せられて意氣揚々と彼の庭園を望んで飛去つたが、

て高い塀の上に翼を休めてから再び庭園内の芝生や林の上に舞上つて方々を見廻した。來河の上に差出た一つの小亭の出窓に下りて其内を覗いて見ると、例の皇女は長椅に凭れながら一片の紙を眺めて其青褪た頬に涙を流してゐるのであつた。

鵬鷄は一寸羽繕いをして其頭冠を正しうし、勿體らしく其傍に進みよりながら出來る丈け聲を優しうして、

「美しい姫君よ、其涙をお拭きなさい。私は殿下の御心を慰むる爲に來ました。」

と云つたので皇女は人の聲がするのに驚いて近傍を見廻したけれども青い羽毛の鵬鷄が一羽居る許りであるから、

「お前がどうして私を慰める事が出來やう、高が一羽の鵬鷄ぢやないか。」

鵬鷄は得たり賢こしと、

「私は今日迄多くの婦人方を慰めました。然し夫は何でもありませんが、今度は一人の皇子の御使者で來りました。其皇子と云ふのはダワナガの網戸皇

子と申す方で殿下を御探しなさる爲に今しも當地に御着になりまして今現にタガス河の花咲く堤の上に御休憩になつて居ります。」

美くしき皇女の眼は此言葉を聞いて其寶冠の金剛石よりも鮮やかに輝いた。

「お前の消息は眞實に此上もなく嬉しいものである。私は鄰戸皇子と云ふ御方の心が變りはしまいかと其事許り心配して最早死ぬ程に病み衰へて居た。お前は是から皇子の御出になる所に飛歸つて言う申上げて御呉れ。皇子の下さつた玉章の文句は一々私の胸の中に刻み付けられまして、其歌の文句は私の魂を今日迄活かして居たのであります。然し其願を果すには武力に訴へねばなりません。明日は私の滿十七歳の誕生日に當るので私の父王は多くの皇子達を招いて武術の試合をさせた上、その其勝利者に私を進る、と云ふ事になつてゐると申上げてお呉れ。」

鶴鴨は再び庭園の上に舞上つて皇子の待つて居らるゝ場所に飛歸つた。皇子は其報告に由つて今迄實現して居た背後の寶物を探出して其眼切な眞心の程をも知る事が出來たので、蓋後の夢が實際となつて現はるゝ時が來たのを

喜ばれたが、茲に一つ困つた事は彼の武術試合の一件である。折からタガス河の岸には武器の光りが輝いて喇叭の聲が盛んに響き渡り多くの武士は威めしき容姿の行列を從へて彼の試合に出席する爲めトレドの市街の方に進み行くのである。

皇子の運命を支配した星は同じくトレドの皇女の運命をも支配して、其滿十七歳になる迄は世間に変る事が出來なかつたのであるけれども、其美くしい評判は早くも人の傳ふる所となつて、多くの有力なる皇子達から結婚の申込が續々あつた。皇女の父王は非常に賢明であつたから之に偏頗の所置をして怨を買ふのを避くる爲に、武力に頼つて之を決定する事にされたのである。其候補者となつた皇子の中には武勇と力量に於て頗る有名なのが鄰山あつた不幸なる鄰戸皇子は武器の用意も無ければ又武術の練習をもして居ないから、

「不運不幸な者はない、哲學者の監督の下に浮世離れた教育を受けた此場に臨んで如何共する事が出來ぬ、彼の代數や哲學が戀愛の事件に何の役に立

つものか、彼のエベン、ボナッペンの叔は何故に私に武器を持つ事を敎へなかつたらう。」

と嘆息さるゝのを聞いた彼の島は大のマホメット宗の信者であるから、

「神樣の力は偉大なものであります、神樣の御手の裡には總ての秘密が握られて居ります、神樣許りが皇子の運命を支配なさるのです、殿下、私の申上ぐる事を御聞きなさい、此國には測る所不思議な事があります、夫は私共の樣な夜間の研究をした者で無ければ判らないのでありますが、此附近の山中に一つの洞穴があると思ひ下さい、其洞穴の中に一個の鐵の卓があつて其上に一個の魔術の武具甲冑等が載せてあります、又其横の方には魔術に因はれた一頭の駿馬が居りまして此等は數世紀の間其處に閉込められて居たものです。」

皇子は驚いて眼を瞬つて居ると島は其太い丸い眼を瞬たいて其耳を突立てながら、

「數年前私は父に伴はれて其領分内の旅行をしました時、其洞穴の内に宿しまして其秘密を知りました、此話は私の祖先から傳はつたもので、私は子供の時分に祖父から聞て知つて居ましたものです、其甲冑や武器等は皆マホメット宗の魔術師が持つて居た物でトレドの市街が耶蘇教徒に攻落された時、魔術師は其洞穴の内に逃込んで其處で死んだのですが、其武器と馬とは魔法の爲めに閉ぢられて、マホメット宗の人で無ければ之を使用する事が出來ない事になつて居るのです、夫も日の出から眞晝の時刻迄を限りとしてあつて、其間ならば其を使用する者は如何なる敵にも打勝つ事が出來るのであります。」

皇子「話はそれで澤山だ、是から其洞穴の在る所に行かうではないか。」

と云つて昔話上手の島に案内されて皇子は洞穴のある所に行くと、其所はトレドの市街を圍んでゐる斷崖の裂目にある岩の奥であるから、島の樣な者の事を穿鑿する者でなければ到底其入口を見出す事が出來ないのである、其内には常往不斷の燈明が點つてゐて何となく墓場の如き厳肅を覺えしむるのであつた。

其洞穴の其中にある鐵の卓の上には魔法の甲冑が載せてあつて、其横に魔法の槍が立掛けてあつて、又其横に亞剌比亞馬が一頭戰場に出る計りの用意をして立つてゐるけれども石像の横に靜としてゐる。而して武器は悉く新らしい物の様に光り輝き、馬は今しも牧場から引入れた様に能く肥へて屬て、皇子が其手を肩の上に置かるゝと馬は前足を動かして洞穴の中に響渡る程に喜ばしげに嘶いだ。此の如く乘るに馬あり帶びるに武器ありで、皇子は明日の試合には如何なる敵にも打勝つぞと決心した。

其大事な型日となると、トレドの城壁の外に試合の場所が設けられ、其周圍には見物人の爲に高座敷が組上げられて、太陽の光りを避くる爲に美麗な組の幕が張り廻はされた。そして座敷の上には此地方の美人が悉く集つて今や遲しと試合の始まるのを待つてゐる。又其下の廣場には小姓や家來を引連れた武士が羽毛を飾つた帽子を被つて威勢よく往來してゐる。其中に今回の試合に出る皇子達も交つてゐるでのある。

然しながらトレドの皇女有澤姫が設けの席に着れたので總ての美人は悉く

顏色を失つて了つた。是が有澤姫が始めて其姿を世間に現はした時であつた。此光り輝く如き絶世の美貌を望み見たる群衆の間には驚き嘆く聲が湧の如くに廣がつて、其婿君の候補者に選ばれた皇子達は聞きしに勝る皇女の美くしさに試合に對する勇氣を十倍した。

之に反して皇女の顏には頗る心配の色が現はれて、其頰の色は赤くなり又白くなりして羽毛を飾つた武士の群を氣遣しさうに眺めてゐるのであつた。斯くて第一回の試合を始むる合圖の喇叭が鳴らうとする時、取次の役人が出て來て今しも一人の見知らぬ武士が此場に到着したと披露した。其武士とは黑ち銀戸皇子であつた。只見る其兜には晶かと見紛ふ寶石を鏤め、金の象眼した胸甲を身ち、大小の劍共に寶石を鏤めた物で左手に圓形の楯を持つて肩の上に斜せ、右手には手槍を提げてゐる。其乘馬も又黃澤を飾めた鞍を置てゐるのが、威勢好く駈けつて再び武器の行列に接するのを喜ぶが如く嘶いた。此不意に現はれた皇子の高貴優美な態度は群衆の眼を驚かし次で其姓名を「鐵の盾」と讀上げたので、座敷に在る貴婦人達の間に深い感動を與へたのである

網戸皇子が到着傳に此姓名を附けた爲に其出席を許可さるゝ譯に行かなくなつた而して皇子で無ければ此試合に出る事は出來ぬ由を告げられたから皇子は仕方なしに自分の本名を名乘つた。然し此は反つて幸になるものでマホメット宗の者であるから尚其出席を許され無つた。此試合に出る者は總て耶蘇教徒の皇子許りと極つて居たのである。

試合に出席してゐる皇子達は此態を見て網戸皇子の廻りを取卷き、其内の一番體格の逞ましい一番亂暴なのが網戸の體格が柔弱さうであるのを嘲り、態の巡廻と名乘つたのを罵つた。皇子は怒心頭に發して此者を相手に試合を挑んだ。斯くて二人の騎馬武者は左右に立分れて相當の距離を取り矢から馳の頭を廻らしながら場地に衝て掛つたが、網戸皇子の槍先が敵の武器に觸るや否やヘルキュルスの樣な體格をした男士は眞倒さまに馬より落ちて了つた。此時網戸皇子は武器を收めて馬を停めなければならぬのであつたが魔術の槍と馬とは一度此を使用した以上は決して其儘に止まらないのである。網戸皇子の乘つた亞剌比亞馬は疾風の如く飛出して武士の最も多く群集してゐ

る中に突貫した。其携へてゐる魔術の槍は向に在る者を盡く突倒した。皇子は仕方なしに此試合場の内を縱横に乘廻して或は高く低く或は優しく或は簡單に敵を待遇つて戯ながら其亂暴張藉を愍しひのであつた。

之を見て居られたトレドの王樣は最早靜として居る事が出來ないので、其王衣を擦ね除けながら鎗と楯とを攫んで馬を乘出し、國王自身の出御で以て怪しい旅の皇子を威嚇しやうと試みたけれども、此場合に於ては國王の尊嚴も尊常一樣の騎士同樣で魔術の槍と馬は人間の區別をしないから、網戸皇子が是は大變だと思つた時には國王の脚は天に朝して其寶冠は泥に塗れて居た。

折から太陽が丁度正午に達したから魔法の力は最早盡きて了つた。此時疾し亞剌比亞馬は野原に驅出して堤防を乘越し、タガス河に躍り込んで矢の如き急流を押渡り、彼の洞穴の内に歸つて彼の卓の横にスックと立たまゝ以前の樣に石像の如くなつて了つた。

皇子は呼吸も吐かず此所まで運れ歸られたのであるが、漸く我に返ると共に驚んで馬より降り魔術の武器を元の通りに返して、偖て其次の運命はどうな

るだらうかと考へた。

皇子は夫から洞穴の中に坐つて此魔法の棒と鳥との爲に悲しむ可き運命に遭はされたのを深く打嘆いた。皇子はトレドの勇士を彼の如く傷殺し其國王に彼の如き不敬を働らいたのであるから以來決して彼の市街に雲を現はす事は出來ないのである。況んや彼の皇女は皇子の亂暴狼藉をば如何に怒つてゐるであらうかと考ふれば一時も斯うしては居られないから、例の鶏鵡と烏とを放つて先づ其皇子を探らせる事にした。鶏鵡は市街の公署或は酒乘の場所を彼地此地と飛廻つて來て直ちに其報告を齎らした。其言葉に由るとトレドの市街全體は大恐慌を來してゐる。皇女は其場で氣絶されて宮殿に運ばれ武術の試合は大混雜に終つて、酒乘は不意に現はれたマホメット宗の武士と其武勇の働らきと其行術が俄に判らなくなつた事許りを話合つてゐる。或者は彼はマホメット宗の魔法師であると言つてゐる。或者は彼は人間の形に化けた惡魔であると思つてゐる。又或者は彼は此附近の山中に隱れてゐるマホメット宗の武士であつて、俄かに其洞穴の中から飛出して來たのだと云つて

魔法に閉られた書話を繰返してゐる。そして此の如く耶蘇教徒の武士を憎い目に逢はする者は到底尋常人間の能くする所でないと言ふ事に皆なの口が一致したとの事であつた。

烏は夜になつてから其探訪に出かけて眞闇な市街を彼地此地と飛廻り、屋根や煙突の上に止つて世間の模樣を觀察した末、トレドの市街の其中にある若山に築かれてゐる宮殿に舞上つて、城壁や高塞を徘徊いては其大きな眼を睜つて光りの見える窓と云ふ窓を盡く覗いて殆なからず宮中の侍女等を驚かした。夫から夜の明くる迄烏は斯んな風の偵察をした後皇子の所に歸つて來て其見て來た事を報告するのである。

「私が宮殿の中の一番高い塔を覗いてゐますと、窓の内に一人の美くしい姫君が居られました。其姫君は侍女や侍臣に牽仕かれて長椅子の上に横たはつて居られましたが其顏色には少しも落付いた所が見えませんでした。夫から侍女共が皆な引込んで仕舞ひますると姫君は懷中から一通の手紙を取出して夫に接吻をして涙を揚げて泣出されたので、流石の冥界者たる私

も之には驚く感動させられましたのです。」

御門皇子の優しき心は此報告に由つて非常に苦悩を加へた。

「エベン、ボナッベン先生の言はれた通り嫌をする人には心配と悲嘆と眠られない夜とがあるとは此所の事である。アヽ天の神様は此の嫌と名付くる障害多き勢力から姫君を助け給ふのだ。」

其後トレドの市街から来る種々なる報道は島の言葉と一致した。同市では人々が不安心と恐怖に充たれて、皇女は宮殿内の最も高い塔の内に守護されて道路には著く厳重なる番兵が配置されて居る。矣と同時に皇女の心には幽閉な氣が食ひ込んで誰も其原因を知る者がない。皇女は全く食事を廃して終つて誰が慰めても耳を傾けられぬ。最も熟練な醫師も遂に匙を投げた。而して何か一種の魔力が皇女の身體を支配してゐるとは一般に信ぜらるゝ所となつたので、國王は布告を出して誰でも此病氣を癒した者には寶庫にある第一等の寶石を褒美に遣ると仰せ出されたとの事である。

今しも隣の方で居眠りをして居た島は、此布告の出た事を耳にして、例の太い

眼を睜り平生よりも尚不思議さうな顔をして、

「此病氣を癒し得る人は半分であるが、其褒美として寶庫の中の何品を撰ぶかゝ見物である。」

皇子「お前は一體何事を言つてゐるのか。」

島「先づ私が申上ぐる語を一通り御聞きなさい。御承知の如く私共の國類は貴な博學な國體であつて、闘鶏や座禅の中で種々な研究をしてゐるのです。私が此程トレドの市街の塔や圓屋根の附近を飛廻つて居りました時、私は國王の寶庫になつてゐる大きな圓形の塔の中で私共の國類中で最も古物學に通じた者許りが會議をして居る所に出會ひました。此學者仲間は寶庫の内に貯えてある各國から集まつた各時代の寶石の種類や、其豪になつてゐる金銀の莊飾の意匠や、夫に彫刻してある文句などに就て種々なる問答をして居ましたが、其内で皆なの者はゴッスのローダリッタ時代から傳はつてゐる一種の遺物で護符になる品に興味を有して居るのでした。其遺物中で東洋流の細工をした銀の体の這入つた白檀製の箱があつて極々僅かな者

文が之を讀み得ると言ふ一種不思議の文句が彫刻してあるのです。此箱と彫刻した文句に就ては此仲間で幾度も研究會を開いて非常に長い激論を生じた物ださうです。私が此仲間の所に顔出しをして居た時は、丁度埃及から到着した一羽の鳥が居て、箱の蓋の上に止つて其文句の講釋をしてゐる所でした。其言葉に頼ると箱の内にある品はソロモン王の玉座を飾つた組の敷物の布であつて、此品は疑ひもなくゼリユサレムの沒落後其處を逃亡した或る貴太人の手でトレドに持ち運ばれたものであるとの事でした。」

鳥が古物學の講演を終るや否や皇子は暫らく深き物思ひに沈んで居られたが、

「予はエベン・ボナッベン先生から聞いて居た事がある。其ソロモン王の敷物即ちゼルユサレムの沒落後行衛の不明になつた不思議なる護符は其後人間の手に渡つて恐らくトレドの耶蘇教徒の間に秘密として保存されてゐるであらうとの事であつたが、偖は國王の寢床の内に藏つてあるのか。若し其品さへ予が手に入るならば予が願は全く叶ふのである。」

と言つて其翌日今迄着て居られた立派な衣服を脱捨てゝ沙漠生活をしてゐる亞剌比亞人の樣な質素の風に化けて、其皮膚さへ汚ない褐色に變つて了ひ是が彼の試合の場に現はれて大喝采を惹起した立派な武士であるとは誰も思はない樣にして、片手には杖を突き腰には袋と小さい牧笛とを下げてトレドの市街に入込んで、夫から王宮の門前に現はれて、皇女の病氣を念ずる爲に罷出たのであると申出でた。之を見たる門番の兵士は、

「貴樣のやうな亞剌比亞の無宿者が何を仕出かし得るものか。此國の大學者達が皆な失敗してゐるのに。」

と言つて叩き出さうとして居ると、國王は其驚ぎを耳にして見に角其亞剌比亞人を呼出せと命ぜられた。皇子は斯くて國王の面前に出でゝ、

「國王陛下の御覽の如く私は沙漠の寂しい中で生涯の大部分を生活して來た亞剌比亞人であります。此寂しい沙漠の中は惡魔や鬼神などが出るので、有名なもので、我々の樣な牧羊者を誑らかして羊を盜んで行くのが常で時としては忍耐强い駱駝迄荒れ狂ふ事がありますから我々は其惡魔を捕ふ

為に音樂を奏します。其為に我々には眼先から傳はつた歌曲がありまして、之を笛に合せて吹きますと此等の惡鬼は直に退散するのです。私は系統の正しい家柄に生れました者ですから此惡魔を拂ふ力を充分に有てゐるのです。若し姫君の御身體に其樣惡魔が憑いて居りますならば私は謹つて之を退散させて御覽に入れます。」

と申上げた。國王は道理の能く解る人であつて、亞剌比亞人が種々の驚く可き奇術を知つて、ゐる事を承知して居られたので、皇子の斷言するのを聞いて自分にも希望の心を起された。そこで直ちに彼の皇女を守護してある高い塔の下に皇子を導いて行かれたが、此塔には多くの扉があつて堅く鎖が卸してある其一番上の室に皇女が隱してあるのだ。此塔の前にある高臺になつた石原は丁度皇女の室の窓から見下せるやうになつてゐて、又トレドの市街や附近の田舍を見渡すやうになつてゐる。

皇子は此高臺の上に坐つて彼の牧笛を取上げながら昔つてヘネラリッフの離宮に居た時附屬の者から習つた事のある亞剌比亞の音曲を歌度か吹いて

見たが、皇女は何も元の位に寢て居らるゝ許りであるから、侍臣や侍女などは顔を見合せて此大膽なる牧羊者を嘲弄してゐると、皇子は遂て牧笛を横に置て彼の皇女に捨つた玉章の中に書いて置いた短かい歌の文句を歌ひ出した。すると皇女は其文句を耳にして直に夫と悟つたので頭を上げて耳を澄しながら覺えず眼から涙を流し、胸は大波の如く高く低く騷ぎ打つのであつた。そして其音樂を眼の前に迎れて來て下さいと言はうとしたが、流石少女心の恥しさに其位默つて了つたけれども、王樣は此有樣を打眺めて直ちに御戸皇子を室内に呼入れられたのである。

二人の戀人は双方共に巧妙であつて、只眼と眼と見合した許りであつた。然し其間に千萬無量の意味が籠つて居た。偖此の如く音樂の力で成功した事はあるまい。皇女の柔らかな頬には紅の色が圓つて其唇も活々となり、今迄萎れて居た眼の中にも眞の如き光りが深うて來た。

其場に居合せた侍臣等は皆く顔見合せて打驚いた。國王は亞剌比亞の音樂師に對して恐怖と賞賛とを混じた眼で眺めて居られたが、

「驚く可き青年よ、汝は今日より朕が朝廷の第一位の侍醫として用ひ遣はすぞ、朕は是より汝の骨董以外には總ての醫藥を用ひない事にする而して只今の褒賞として朕が寶庫の内にある最も貴重なる寶石を遣はすぞよ。」

皇子「私は金銀の様な物や寶石などは欲しくは御座いません、只寶庫の内に在る一個の古物で、昔トレドを支配して居たマホメット宗の人から傳はつた白檀製の箱と其中に這入つてゐる絹の敷物が欲しいので御座います。」

之を聞いた總ての人々は亞剌比亞人の願が賢案であるのに驚いたが其箱が眼の前に持出されて其中からヘブリューやアラビヤの文字を記した立派な緑色の絹が引出された時には尚一層深く驚いたのである宮廷の侍醫等は互に顔を見合せて其肩を竦りながら新らしく任用された侍醫の慾望の小さいのに微笑ひのを禁じ得なかつた。すると皇子は彼の絹の敷物を取上げて、

「此敷物は昔つてソロモン王の玉座を飾つたものであるから美人の足下に置く價値がある。」

と言ひながら皇女の椅子を下に之を擴げて次に自身も又皇女の足下に坐り

「誰が運命の書物に記してある事に反抗する事が出來るものか、見よ星占家の言つた事が今嬉しを現はすのである。國王よ、私と皇女とは長い間秘密の間に双方から戀をしてゐた者で、私は彼の「愛の巡禮」ですぞ。」

と言ふ言葉の終らぬ内に敷物は皇子と皇女とを包んだまゝ中天に舞上つて了つた。國王と侍醫等は開いた口を閉ぐ事が出來ないで其行衛を見送つてゐると其姿は遥かに白雲の中の一點となつて遂に青空に消えて了つた。國王は怒りに乘じて寶庫の番人を呼出し、

「汝は異教徒と示し合せて彼の如き大事の護符を彼の手に渡したのだな。」

と責めたけれども番人は一向何も知らないのであるから、

「否、私は一向彼の品の性質を存じて居りませんので、又箱に割り付けてある文字をも讀み得ませんので御座いました。然し若し夫が果してソロモン王の敷物でありましたとすれば、其品には魔術の力がありまして、其所有者を空中に運び去る事が出來る筈であります。」

と答へた。其處で最早何と云つても仕方がないから國王は大軍を起してグラ

ナダの方に進軍する事になつた。夫から道路行軍の困難を嘗めた末、ベカの渓谷迄來てトレドの國王はグラナダの國王に向つて其皇女の返濟方を迫つたそして王自身が陣頭に現はれて其受取に行くと、敵の陣頭に現はれたグラナダの國王と云ふのは誰あらう彼の亞剌比亞の吟遊詩人であつて、今や其父君の崩御と共にグラナダの王位に登り有名姫を其皇后としてゐるのであつた。

耶蘇教國の王の怒は其姫君が尚其信仰を變じないでゐると云ふ事で容易に宥められた。之は國王が非常に信神者であるからと云ふ譯では無かつたが、宗教の事は元來當時の國王の最も威嚴と禮儀作法に關するものとして居た所であつたからである。斯くて血の雨を降らせる戰爭の代りに宴會や娯樂が引續き催されて父なる國王は喜んでトレドの城に歸り、若い國王と皇后とはアルハムブラの城を樂しく治めて行かれたのである。

又彼の島と鶏鳴とは無論皇子の後を追つてグラナダに歸つて來たのである。島は夜の間丈け旅館して其間頻の住居に宿を取りながら、又鶏鳴の方は其旅程の各市府に於て詩歌の間に交つて例のお饒舌を演じながら、

網戸皇子は此二羽の家來に向つて其巡廻中に發して來れた忠誠に對して相當の賞與をされたのは又無論である。皇子は島を其宰相とし鶏鳴を其式部長に任ぜられたので其朝廷の政治は自出度く栄えたさうである。

第五節

△丘陵の逍遥
△園中の葬式
△米國紳士の怪談

空中飛行の馬

予はアルハムブラの中庭や廣間や塔などには漸く親密になつて、ヘネラリフェ離宮の以太利式庭園とも知己になつたし今日は風が強くて高生に適しないから背後の丘陵を少々逍遥して見る事にした。

其爲に予等は徒歩して折からの夕日がグロー河の平野に輝いてゐる峰伝の

離宮の上なる小徑を「日の山」の方に進んだ。

此附近には尚離宮に附屬した果樹園があつて時節に開せぬ菫の香が聞える。此から少し上ると岩石を畳つたムアー時代の水溜が幾箇所もある。夫から尚ほ上ると直ぐに岩石詐りの禿山になつて樹木は一本も無く只彼地此地に新王樹などが悪戯に生へて居る詐りである。

此邊迄來ると數百歩の下にはハネクリンエ離宮の如き樹木の繁茂した樂園があるとは思はれない位で、況んや花園と噴水とで有名なグラナダの市街が直ぐ其眼下にあるとは思はれない位である。然し此の如きは西班牙一般の風であつて全く耕牧の手を逃れた土地が豊饒なる庭園と隣りしてゐる事は珍らしくない。

益々登つて行く内に丘陵の左の方に當つて一段高い所がある。此處は「ムアー人の椅子」と名付けられた高臺で、彼のボアブデル王がアルハムブラから退却する時此所迄來て暫らく足を止め、今迄榮華を盡してゐた宮殿を顧みて涙を流したのを當時同行して逃げた王の母后は「汝は男子として此城を守り得なくつて只女子の様に泣くとは何事ぞや」と叱つたとの言傳へがある所である。其直ぐ上に聳えてゐる山が即ち「日の山」である。此時夕日は西山の最高峯に沈まんとして、歸途を急ぐ牧羊者や牛追ひなどが遠かの山道を辿つてゐる。折からグラナダの大寺院から撞出す日暮れの鐘が彼地此地の小寺院の鐘と相呼應して山間に在ると云ふ尼寺の優しき鐘をさへ呼起し夕靄遙けき遠山の反響となつて聞えるのである。此音を聞くと今迄小徑を急いでゐた牛追ひなども悉く立止つて夕暮の新緑をする。其樣子の鷹爪らしさは彼の悪戯好きのお祭騒ぎ好きの國民のある事と思へない。然し是は夕日の寂寞な感じに伴つた自然の感應で又心の底から此新緑をするやうに彼等を餘儀なくせしむるのであらう。

加之のみならず今手が立つてゐる所は荒涼たる岩山で、彼の幽靈や化物の出る話に富んだ「日の山」の絶頂に近いのである。アルハムブラ城郭内の間道は此邊迄通じてゐるとか傳說がある。が予は之を信じない。又此附近には壊れた水溜や廣大な建築の礎や其他以前には隨分人口の稠密して居たらしい遺跡が

殘つてゐるけれど、今打見たる所では生命ある者は予等の一行許りである。此係蹟に富んだ遺跡の眞中に立つて曠々たる夕の餘を聞き、遠かに迫る牛羊者や牛追ひの鬱鬱して居る樣を望むのは實に何ともいへぬ寂しさと又尊さとを覺えしめるのである。

予等は御日の全く暮れない内に少し許り上に登つて見やうと思つて此物凄い樣な遺跡の中を徘徊いて行くと行先に當つて一つの大きな丸い穴がある之は確かにムーー時代に掘つた大きな井であつて最も清冽なる水を湧出したのらしい。處が後に聞く所に由ると此穴こそはポアンガル王及其臣下が盡く此山の地の下に魔法に閉ぢられて龍つてゐるのが、時々夜の眞中にアルハムブラの背の榮華を繰返す爲に現はれ出る、其出口であるとの事であつた。

予等は至る所の外圍で夕暮でも夜明けでも方々の山水を寫生して廻つてゐるから別に氣味の惡い事も感じないで、只夕映した遠山の色や足下に暮れて行くグラナダ市街の全景を眺ひるに餘念が無つたけれども、久し振りの遠足に多小の疲勞をも感じて來て、第一腹が空て承知をしなくなつたから、遂ぶ此

山から廻下る事にした。

此邊の緯度では日が暮れ掛ると思ふと其間くなるのは實に遠いのであるから、少し下りかけたと思ふと足下が既に浮雲くなつて居て牧羊者や牛追の影さへ最早見えなく、近邊に存するものとては予等の足音と鳴れに啼つ蟋蟀の聲許りで、溪間から上つて來る夜の色は直ぐに予等を包んで了つて附近は何一つ見えぬ闇となつて了つた。

只シエラ、ネバダ山の最高峯には尚微かに夕映の色が彷彿て其千古の雪の頂が後ろの眞黑なる空から浮出して非常に間近く見ゆるのであつた。

予は「シエラ、ネバタが非常に近く見ゆる、之がほんとの手に取る樣だ」と言つてゐる内に雪の頂の眞上に當つて只一つの夕星が輝と現はれて非常に鮮かな太い光りを放ち出した。

程なくシエラ、ネバタの雪の峯より少し低い所に一點或は二三點の火光が見え出した、之は此國の習慣としてネバタ山の雪を取りに行く者が夜の寒さを凌ぐ爲に焚火をしてゐるのだと後に聞いた。

予等は眞闇になつた山道を見に角下りさへすればヘネクリフェの上に出ると思つて、無闇と急いだが來る時には通らなかつた一つの狹い溪谷に出た。此處は「道の谷」と呼ばるゝ所ださうで、背しムアーの金貨が一杯這入つてゐる壺を掘出した事のある所ださうだけれども、予等は最早寫生も實探しも今では必要がない。只早く歩み好い大道に出たい許りの考へで頻りと急ぐ内に、左の方から人聲がして二人許りの連れが此方へ近づいて來る樣子である。予等はドンナ奴が出て來るか、化物め幽靈の出る時刻には少し早いがと思つて平氣で進んで行くと、彼等の話し聲は近づくに從つて能く聞える位になり其意味は判らぬでも英語である丈けは確となつた。更に次第に接近すると、之は實に好い道連れを得た。此二人の男女は同宿のニューホール氏夫婦であつた。

ニューホール氏等も予等と同じく午後から丘陵の上を散歩して居たのださうで、夕暮の景色に見惚れて歸るのが遲くなつたのだと云ふ。

其間勢は確かに我々の下ると反對に此方に登つて來るのらしい。ニューホール氏は「彼れは葬式の行列である。」と言つたが、其行進つたのを見ると、黑の喪服を着けた人物許りで、此淋しい山路に出逢ふた者としては餘り好い心持のものではなかつた。況んや西班牙の風俗として棺に蓋をしないで死人の顏を上に向けたまゝ露出で担いでゐるのである。

話好きのニューホール氏は此行列を進過してから予等に語るやう、

「此葬式で思ひ出したが、私が一つ不思議な話をしませう。御婦人方も餘程御疲の御樣子であるから、歩きながらお話しでもして行つたらホテル迄遠りあくのが左程苦痛でも無いでせう。」

と前置きして物語り出した所は左の通りであつた。

昔しグラナダの市街に住んでゐたナコッと云ふ老人があつて、シエラ、ネバダの山の雪を驢馬に積んで來て市街で賣るのが商賣であつた。此商賣は午後から出かけて徹夜してネバダ山と市街の間を往復せねばならぬので、つまり夜更けから先方を出發して丁度夜明け頃に市街の門に辿り着かねばならぬの

である。

或夜チコロ爺さん此雪の塊を驢馬の脊に着けて歸り道を辿つて來ると如何したものか何時になく眠くて堪らないから、驢馬の脊に打跨つたまゝコクリ〳〵と居眠りをして進つて來ると、驢馬の方では平氣なもので凸凹の烈しい山路を丁度野原を行くやうに下つて來る。其内にチコロ爺さんは不圖眼を覺したが、是は又眼を覺さずには居られないのであつた。

チコロ爺さんは兩乎で眼を擦つて周圍を見廻すと、此時月は眞昼の樣に照り輝いて、其足下に一つの市街があるのを明瞭に示してゐる。處が其市街なるものが當然其所にある可きグラナダの市街でない。グラナダであれば有名な大寺院の尖塔が誰が眼にも見ゆるので其上に輝いてゐる十字架が此明月の光に見えない譯はない。否な其の樣な耶蘇教の寺院は影形もなく代りにムアーの寺院が彼地此地に見えてゐるから爺さん頗る驚いた。其驚きは此許りでなく今しも麓の方から大勢の軍隊が溪間を傳ふて此方に上つて來る樣子で、處時は月の光に照され或時は山の影に隠れて見ゆるのである。

ニエーホール氏は此處で言葉を挾んで。

『其爺さんが幽靈の兵隊に出逢つたと云ふのは直ぐ此上の山らしい何でも此話は餘り古い事では無いと云つて、ホテルに來る洋服屋が私に話したのぢや。』

と註釋をして物語を續けた。

チコロ爺さんは妙な事もあるものぢやと思つて驢馬を急がせて下つて行くと彼の軍隊は益々近づいて能く見えるやうになつた。處が其騎兵も歩兵も皆くムアーの軍服を着けてゐるのであつたから爺さんは側はと思つて傾ひ上つた。是は話に聞いた事のあるムアー軍隊の幽靈である。爺さんは驢馬に鞭を當てゝ逃出さうとしたけれども、驢馬は物こそ言はね同じ樣に恐ろしいと見えて風に戰ぐ木の葉の如くに身を慄はせて一歩も動かうとしない。

夫から幽靈の軍隊は次第に爺さんの邊に近づいて來る。其樣子を恐々ながら打眺むると或者は喇叭を吹き、或者は太鼓を打ち又は鐘を叩いて居るけれども不思議な事には其音や響が少しも聞えない。只繪に畫いた軍隊が動き出し

てゐる樣で、何の事は無い活動寫眞を見てゐるのだ、否な活動寫眞の人物の樣な愉快な表情を顏に現はさないで死んだ者と同じ顏色をしてゐる丈けの違があるのだ。夫から其行列が大分終に近いた頃二人の騎兵の間に挾まれて雲の如く眞白い驢馬の背に跨つた僧侶風の人が連つ來る。チコロ郎さんは其男を見ると又驚いた。此ムアーの幽靈の道連れになつてゐるのは誰あらう當時グラナダの宗教裁判所で異教徒の裁判を司る尊い僧侶でもつたのだ。

チコロ郎さんは此裁判官が妙な所に出て來たものだと思つた。此裁判官は元來ムアー人が非常に嫌いで、其他の異教徒よりも一番憎い待遇をムアー人に與へて居た者であるのにと思つたが、然し見に角此高貴な僧侶が出て來て與れたので自分の身も安全であると考へて、其惠みを呼ぶ爲に先づ十字形を切つて何か言出さうとする時、郎さんは忽ち驢馬と共に深底目がけて真倒さまに突落されて了つた。

チコロ郎さんは夫から翌日の旭が登つて折角の雪や氷の荷が悉く解けて水になる頃迄正氣が着かなかつたが、其漸く我に歸つた時は、

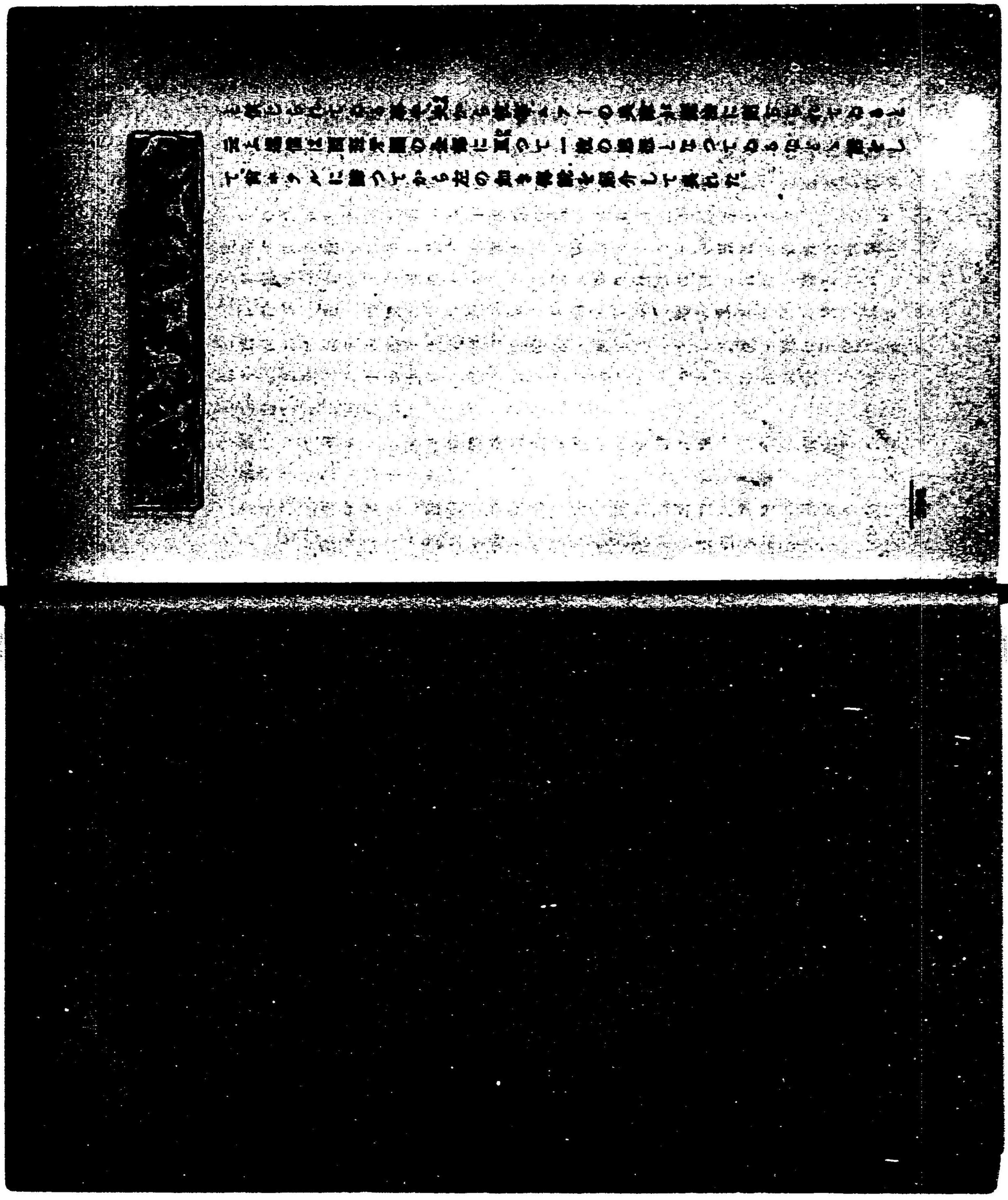
と言つてユーホール氏は今我々が歩んでゐる所の大地を指んで、

「郎さんは此所等邊の路傍に打倒れて居て、横には忠實な家來の驢馬丈けが番をして居との事です。」

と語つて一休みして予が卷煙草に火を點ずるを待ち更らに今の物語りの終りを告ぐるを聞けば、

郎さんは見に角生命丈けは拾つたので喜んでグラナダの市街に歸つて來ると市街は勿論元の僧で大寺院の十字架も勇ましく旭日に光り輝いて居た其から皆なの者に昨夜の不思議を話して聞かせると、誰も之を一笑に付し誰さんは驢馬の背の上で居眠りをして、其横な夢を見たのだと言つて對手になる者が一人も無つたが、其後一年經たない内にグラナダの異教徒裁判官が死んで了つたので、人々は俄かに不思議の思ひを爲したとの事である。

ユーホール氏は此奇怪な西班牙的の傳說に深く趣味を有してゐると見えて、彼のボアブデル王及其軍隊が魔法で閉ぢ籠められてゐると云ふ山の話をして、夫が丁度予等が日の暮るゝ前に見た大きな古井の穴かも出入するのだ



魔法の言葉の威力

と信じられてゐる事や、夫から彼等ムアーの兵隊が魔法に閉ぢられてゐると云ふ迷信は西班牙國の全部に亘つて一般の思想となつてゐるなどゝ話をして、尚ホテルに歸つてから左の如き傳說を紹介して與れた。

空中飛行の馬

昔アルハムブラの大守にユルゴベルナドル、マンコー或は「片腕の太守」と云ふ人があつた。其片腕は若い時戰場で失くしたので如何に其勇猛であつたかを證する記念となつてゐる。其老年に及んでも頗る剛勇の老將であつた。口髭そは眦の逆立ち上げ常に戰役用の長靴を穿ち、鋼の樣な長い劍を引ずつて其樣の處に手巾を卷付けて歩くのが常であつた。

此「片腕の太守」は老將軍として風采が堂々たる許りで無く非常に高慢で嚴格で其權力及び特典に對して頗る强情なる主張を爲すのを常としてゐたから して王國の一城主たる權利を主張する事即ちアルハムブラ城の特權及び免稅の特典なども最も嚴格に執行された。其爲に此城に出入する者は誰でも悉く武器を取上げらるゝので偉樣位階の高い者で無ければ帶劍の他城内に入る事を許されぬ又何人にても正門の處で馬から下りて自ら轡を取つて歩かねばならぬ事になつて居た。新くてアルハムブラ城がノヴァナダ山の眞中に突

山た丘陵の上に築いてあるので此地方を守備してある隊長の爲には頗る厄介な獨立國の觀があつた。其爲にシラナダ市の守備隊長とアルハムブラ城の太守とは屢々權力爭ひの爲に爭論を惹起して末は互に相反目して居たのである。

斯くて「片腕の太守」即ちマンロー將軍は其武力の下に澤山の惡黨や密輸入者を蹂躪まうてゐるとの評判が立つたので、老太守は非常に之を憤慨して城内の大廓清を始め此等の惡人を城外に放逐するは無論附近丘陵に穴居してゐたジプシー族の流民迄も遠方に追ひ遣つて了つて、其上城に通ずる大路小路に巡邏の兵士を出して怪しの者を捕縛させる事にした。

或る夏の旭日輝く朝の事である。老功の一下士と二人の喇叭卒と他に二人の者より成る巡邏の一隊が日の山から降りて來る坂道で丁度ヘヂクリンユ離宮の庭園の下に當る柵の蔭に休息してゐると、遥かに馬の蹄の音が響いて間子能く軍歌を謠ふて來る男の聲が聞えた。すると程無く亞剌比亞風の馬具を備いた立派な亞剌比亞馬を引いて歩兵の服裝をした一人の目に焼けた顔の

男が現はれた。

巡邏の下士は怒しい山の頂から軍馬を牽いた不思議な兵士が降りて來たのを見て打驚き、一歩前に進んで之を誰何めた。

「其所に行くのは何者だ。」

「味方の者です。」

「一體貴樣は何者で何と云ふ姓名だ。」

「今漸やく戰場から來た許りで敗軍のお蔭に財布が空虛になつてゐる者です。」

此時下士は怪しい歩兵の容貌を尙能く見極むる事が出來た。此歩兵には顔の上に黑い刀痕があつて頗る威めしく鬼とも組まんず面魂をしてゐるけれども其眼が少々藪睨みであるから其内心の樸直なお人好しである事が判る。歩兵は巡邏の訊問に答へた末此度は自分の方から質問を發した。

「お尋申します。彼處に見へる市街は何處でありますか。」

「何と云ふ市街だッ。コ畢竟山賊るな。そんな馬鹿な事を尋ねる奴があるか。

はの山の附近を彷徨つゐてグラナダの市街の名を問ふ叡が何處にある。
と此度は喇叭卒の一人が答へた。すると歩兵は憮然した樣子で、
「グラナダの市街だつて、そんな事があるものか。」
喇叭卒、あるものかも無いものだ、向ふに見えるのはアルハムブラの塔だぞ。」
歩兵「喇叭卒だつて問う法螺を吹くなよ。然し彼處が實際アルハムブラだとす
ると奇妙不思議の事を太守に言上したいのだ。」
下士「無論貴樣に其機會を與へてやるんだ。是から貴樣を引立てゝ行かうと思
つた所だからね。」
其言葉の下に喇叭卒は馬の手綱を攫み二人の平服の男は歩兵の間手を取つ
て之を引立て下士は其先頭に立つて命令した。
「前へ進め。」
斯くて此一行はアルハムブラ城を指して進んで行つた。
此汚ない歩兵と立派な亞剌比亞馬とが巡邏兵の爲に捕まつて來たと云ふ噂
はアルハムブラ城の前の噴水に朝の水汲に來てゐる途中や婦人の間に忽ち

擴がつた。そして一人の下女が今しも水壺を抱へやうとした時巡邏隊の一行
が丁度其前を通過したので澤山の彌次馬は其後に隨き隨ふた。
夫から群衆はゾロ〳〵と其後に隨いて行く内に知つた風な口を利く者もあ
り眼と眼と見合せて囁くものもあり種々樣々な想像をしてゐる。
甲「彼は脱獄兵だとよ。」
乙「イヤ、密輸入者だらう。」
丙「なあに山賊だとさ。」
と言つた樣に種々な名稱を附せられた來歷に獰猛なる山賊の頭領で我巡邏
の下士と其部下の勇敢なる働らきで生捕つたのだと決定した。すると一人の
老人は、
「山賊の頭領でも何でも關はないから一うか太守の手に渡し度くないもの
だて、太守は片腕しか無いけれども一度攫んだらなか〳〵許さないからな。」
と言つて其運命を氣遣ふ者もあつた。
太守のマンコーは今しがアルハムブラの内殿で近傍の寺院から來た僧侶と

共にチョコレートを飲んで居たので其側には執事の娘が給仕に出て居た。此娘はマクガ生れの黒眼勝ちの嚴格な處女であつたが、又なか〳〵敏捷で快活な點もあつたから彼の如き老英雄の太守にも頗るお氣に入りであつた。からして此娘の言ふ事は大概は聽かるゝのが常であると世間では評判してゐた。然しながら那樣事はどうでも宜い。此像大なる名譽を荷ふてゐる太守の私行に迄吾人は深く立入るには及ばぬ。

其處に家來が出て來て今朝城廓の附近を徘徊して居た怪しい男があつたので、巡邏の下士が捕縛して來て只今次の室迄參つて閣下の御都合次第にて御面前に召出さるゝのを待受けて居ります。と申上げたので成程さる事を好きな太守は早速此を檢べて見やうと、手にして居たチョコレートのコップを彼の侍女の手に渡し例の長い劍を持つて來させて之を腰に帶び、口髭を捻上げながら、いと嚴格に身體を反らして後の高い大きな椅子に着席して囚人を是へ呼出せと命令した。

我兵は尚も二人の男に兩手を握まれて下士に監視せられた儘太守の前に現

はれたが然しながら其態度は頗る沈着で太守の鋭い輕蔑の眼光に對して例の無頓着な表情を運したので嚴肅な老太守は非常に氣を惡くした。

太守「コク、囚人。」

と言かけて暫らく默つた儘其鳳眼を打眺め、

「何か申す事があるか、貴樣は一體何者だ。」

歩兵「戰場から歸つて來た許りの兵卒で其御土產と申しましては身體の負傷許りで御座います。」

太守「歩兵だと申すか、フム成る程服裝は其通りである。然し汝は立派な亞剌比亞馬を率いて來たと申す事ぢやが、汝は負傷の外に其をも戰場から持つて來たのぢやらう。」

歩兵「其馬に就きまして一場の不思議な御話しを申上げ度いのであります。實に不思議も不思議最も驚く可き話であります。其事柄は此御城の安危に關はる事で又實にグラナダ市の興廢に關するのでありまして此事は只閣下御一人の御耳に入れ度いのであります。

尤も閣下の深く御信頼なさる人達ならば差支へませんけれど。」
太守は少し考へた末下士と警固の兵に次の室に下れと命じたが、直ぐ戸の外に居て一言の命令で這入つて來るやうにして、
「此神聖の御坊は余が懺悔をする神父であるから汝は何事をも此御坊の前には隠すに及ばぬ。そして此侍女は……
と言つて非常に好奇心を起して此場から下り度くないやうな素振りをして伴ついてゐた處女を顧でながら、
「此處女は非常に利巧で嚴格に秘密を守るから何事を聞かせても大丈夫である。」
歩兵は微晩と色眼とを混合した眼で處女の方を見て居たが、
「宜しう御座います。此處女も此處に居て差支へはありません。」
夫から來來共が皆次の室に引下つて了つてから歩兵は其物語を始めた其所吾は一歩毫などに似合はない流暢なるものであつた。
「私は閣下に前以て申上げました一件で隨分大戦爭に出遭つた者であり

ますが、其内に年期が滿ちましたからパウドリフドに於てつい先日除隊になりまして、徒歩でアンダルシヤ州の私の郷里に歸りかけました、處が昨日の晩方に私はオールドカスタイルの大野原に通りかゝりました、
太守「コクツ待て、汝は何を申す、オールドカスタイルの野原と申せば此處より二三百哩を隔てゝ居る遠方ではないか。」
歩兵「で御座いまするけれども私は閣下に不思議千萬の御話を致すと申上げて置いたのでは御座りませんか、閣下が私の申上ぐる事を暫らく御辛棒なすつて御聞き取り下さいましたら不思議と言つても實際の事である事を御承知下さる事が出來ます」
と冷やかに答ふるので、太守は舞を捨りながら、
「好し先を申せ」
歩兵は言葉を續け、
「日も暮れ果てましたから、私は何處にか合宿するのに適當な家屋を探す爲に近傍を見渡しますと、見える限りの所には人の住家らしいものは一軒も

ありませんでした。私は此時背嚢を枕にして此野原に露營しなければならぬと、諦めました。然し閣下も古英雄で居らせられますから、戰場に臨んだ者には此位の事は何でも無いと云ふ事が御判りになりませう。」

太守は首肯いて同意の旨を示し劍の柄から綱つて居た手巾を取つて鼻の上に群つて來る蠅を追拂ふた。

歩兵「偖御話をグット縮折つて申上げますると、私は夫から尚數哩進みまして一つの深い溪に架けた橋の上迄來ますと、下には糸の様な流れが見えて對岸にはムアーの塔が頭は壊れてゐるけれども下部の方は完全にして居るのが立つて居りますのを見出しましたから、私は此塔の内に道入つて寢るのが一番樂だと考へまして、先づ溪に下りて腹一杯清水を飲みまして渴を止め、夫から携帶食糧の麻袋の皮と麻とを出して、河原の石の上で晩餐を濟しソロ〳〵塔の内に道入つて寢てやらうと考へました。斯んな場合にも閣下の如き經驗の多い御方には好く御判りで御座いませうが、塔の内などは最も適當な宿舍でありまするので。」

太守「余はもつと暖い所にでも寢んで遊たものぢや。」

と平巾を又も劍の柄に結り付けながら答へた。

歩兵「夫から私は靜かに麻袋の皮を噛つてゐますと、塔の内で何か動く者が居る氣配が致しますから耳を澄して聽いてゐます。確かに馬の蹄の音でありましたが、すると間もなく一人の男が立派な馬の手綱を握つて塔の内から出て來まして、水の流るゝ所に近づいて來るのであります。私は星の光に透し見て其男の容子を見定めましたが、此荒野原の中の崩壊れた塔の近傍を徘徊つくのでありますから怪しい者に相違はありません。但し私見たやうな通行の旅人であるかも知れないのですが、多分は密輸入をする者などで或は山賊强盜かも知れないのです。處で私には有難い事には盜まれる様な荷物がありませんから何も取られる心配はないから私は尚麻袋の皮を噛りながら靜としてゐました。すると其男はズット私の側近く來ましたから其服裝が好く判りましたが、驚きましたよ。其奴は亞剌比亞の服を着けて鐵の胸甲を佩め光り輝く兜を戴いて居ります。其馬にも又亞剌比亞風の馬具

を置て大きな火斗の様な鍋を下げてゐるのであります。怪しの男は此馬を流れの所に進れて來ますと馬は殆んど眼の所まで顔を水に突込んで腹の膨裂ける程に飲むのであります。私は横合から聲をかけて、

「君の馬は能く水を飲んでるが、馬が頓狂水に突込で飲む時は眩暈が好いと云ふぢやねえか」

と言ひますと、怪しい男は、ムアーの語調で、

「そりや其筈さ、丸一年振りに飲むんだもの。」

「そいつは驚いた、それぢや僕が亞弗利加で見た駱駝でも跛足で逃げるよ、尖はまあ好いとして君も軍人の様だから此處に坐つて僕と一所に食つたらどうだい、僕だつて寂しいから君とは宗旨は違ふけれどなあに闘う事はないぢやないか……」

閣下も御存じの通り兵士は餘り宗教の事には八釜敷く言はない方で又平時であつて見れば各國の兵士は總て同僚でありますからな。」

太守は之にも首肯いて同意の旨を示した。

「私は斯く言ふ内にも私の食事を分配して怪しい男に與へやうとしますと其男の申しますには、

「僕は飲んだり食つたりして居る暇がない。夜の明ける前に長い旅をしなければならないから。」

「君は是から何方の方角に向ふんだ。」

「アンダルシヤの方に。」

「夫は丁度僕の行く方角と同じだ。そこで君は僕と飯を食ふ暇はあるまいが僕を君の馬に乘せて行く事は承知するだらうな。見れば立派な馬だから二人乘つても大丈夫だよ。」

「宜しい。」

と承知して乘れました。夫は私が飯を分配して遣らうと云つた好意に對しても軍人として嫌とは言へなかつたからでありませう。そして其男が先づ馬に乘りますから私も續いて其後に乘りました。すると其男は、

「確と捕まへて居ないと駄目だよ。此馬は疾風の様に速く駆るから。」

「大丈夫だよ。」

と言つて私共は其處を出發しました。處が私共の乘つてる馬は始めは並歩から速歩になり次に全速力で驅出しましたが、家だそれに滿足しないで、其次には無茶苦茶に突進して宙を飛んで行くやうになつて岩角も樹木も家屋も其他凡ゆる物體が疾く後に飛んで逃げるやうでありました。夫から間もなく一つの市街が見えましたから、私は

「此處は何市だい。」

と尋ねますと、

「セゴビヤ市だ。」

と答へる。其言葉の來だ終らぬ内にセゴビヤの寺院の塔は最早見えなくなつて了ひました。私共は夫からグリダヤクの山腹を驅登つてエスキロリアルの方に下り次にマドリッドの城廓を廻つてタ、マンチャの野原に飛んで來ました。斯んな風に私共は山を登り溪を下り總て眺つてゐる市街を過り越え山でも野でも川でも只星の光りにチラつく許りの間に飛越えて了つ

たのであります。

偖お話が餘り長くなりますから閣下が御退屈なさらない樣に手短に申しますと騎兵は或る山腹迄來て不意と馬を停めました。そして

「此處が僕の旅行の目的地だ。」

と申すのですから私は近邊を眺めますと、此處には一つの洞穴の入口がある外には人の住家らしい物もありません。其時私の眼に着きましたのはムアーの服裝をした多くの群衆が四方八方から騎馬或は徒歩で疾風の如く急いで參り、宛も蜂が巣の中に飛込む樣に洞穴の内へ這入つて行くのであります。私は此は何事かと尋ね樣と思ひましたが其言葉を發しない内に騎兵は馬に一鞭當た者ですから私共の馬も又群衆の中に交つて洞穴の内に雪込みました。夫から私共は嶮しく曲つてゐる道路を拔けて山の中心に地下の隧道を下るのでありました。さうして次第に奥深く進んで行く内に何處からとも無くホット光りがさして來て少しづゝ明るくなつて遂に夜明け位の明るさとなりましたが、然し私には其原因は少しも判りま

せんでした。其不思議な光りは尚次第々々に強くなりまして最早周圍に在る物は何でも能く判るやうになりました。其處を尚も進んで行きますと別段は大きな岩窟となつて居りますので其左右の幅の廣い事は武器置場所の廣間と言つて好い位でありました。其廣間の樣な處には槍や兜や胸甲や楯や劍戟やらが盛に置けてありまして其次の處には軍糧品が澤山積重ねてありまして其處邊の地面には野營用の雜類材料などが夥しく轉がつて居ました。

私は閣下の樣な老巧の將軍に此次けの軍器や軍需品の書へをお眼にかけたい位でありました。其次の岩窟には精銳の騎兵が長い列を作り槍を捧げ軍旗を翻して今にも出陣の命令を待つて居る樣子。然し怪しいのは此等の騎兵は只石像の樣に動かないで鞍の上に跨つて居るのでありました。又次の岩窟には馬の横に寢てゐる兵士が澤山居まして歩兵などが今にも列を作りさうにしてゐるのでありました。處で此等の兵士は悉く古代のムアーの服裝をして其武器も又夫に相當した物許りでありました。

閣下。お話が又長くなりかゝりましたからダット端折つて申上げますが、私共は遂に廣大な岩窟の內に來ました。此處は洞穴の中の宮殿と言ふ可き所で其壁は金銀の筋金で裝飾して其間に金剛石や青玉や其他の貴重な寶石が嵌めてありました。其上座に當つて金色燦爛たる玉座の上にムアーの王が居つて其兩側には貴族達がズラリと居列び又其側に劍を抜いた護衛利加黑奴の親衛兵が並んで居りました。夫から私共の樣に此處に集まつて參りました群衆は數千人に達しませうが一人宛王の前を通つて敬禮を捧して行きます。其群衆中の或者は全く新らしい立派の服裝をして寶石などを飾かして居ります。又或者は磨き上げた甲冑を着けて居りましたが、其內には色の褪めた汚ない服裝をしたのもありましたし又錆てバラ〳〵になつた甲冑を着けたのもありました。私は是迄何も言はないで居りましたと言ふのは閣下も御承知の通り軍人と言ふ者は滅多に無駄口をきくものでありませんからでありました。然し私は此時最早堪へ切れなくなりまして、

「君、此有樣は一體何事だ。」

「是は恐る可き大秘密だ。君等の様な耶蘇教徒は能く知つて置くが好い。君は今眼の前にグラナダ最後の王様であつたボアブデルの軍隊と其朝廷を見てゐるのだ。」

と答へますから私は、

「何だ、嘘なら止して呉れ、ボアブデル王と其家來は數百年前に此國から追放されて亞弗利加に渡つて死んで了つたぢやないか。」

「其通りに君等の嘘吐歴史家は記してゐるけれども、君能く聞玉へ、ボアブデル王とグラナダを最後迄死守した其軍隊は悉く魔力なる呪詛の爲に山の下に封込められたのだ。夫れから降伏の後にグラナダを明渡して出て行つた王と軍隊とは只魔神や悪鬼が耶蘇教の君主を欺く爲に偽りに其姿に化けたものであつた。加之のみならず僕は君に言つて聞かすが西班牙國全體も呪詛の力の下にあるので山にある洞穴と云ふ洞穴野原にある塔と云ふ塔、又は丘陵の上にある寨と云ふ寨の遺跡には悉く魔法の爲に封じ込められた軍隊が其地下室に眠つて居つて其軍隊が消滅して

上帝の御許しが出る時を待つて再び此世に出でやうと思つてゐるのだ。それで毎年一度宛聖約翰祭の夕丈けは王様の處に敬意を拂ふ爲に夕暮から夜明けまで其魔法の制縛を解かれて元の身體に歸るのを許される先程から君の見た大勢のマホメット宗の兵士が洞穴の中に這入つて居たのは悉く西班牙の全體から馳參じた軍隊である、僕自身は君も知つて居る通りオールド、カスタイルの野原の廣塔に數百年の寒秋を過してゐた者であるから僕は夜の明けない内に又元の處に歸らねばならぬのぢや。又君が通つて來た途中の岩窟の中に整列してゐた騎兵及歩兵の一隊は元グラナダの軍隊であつたのが魔法の爲に封じ込められてゐるので、運命の書物に書いてある通り魔法の力が破れる時が來たらボアブデル王は此軍隊の先頭に立ちて此山から下りグラナダを回復してアルハムブラの王座に座り西班牙全體から呪詛れてゐる兵士も悉く召集して此半島全體を征伏してマホメット宗の政治の下に回復するのだ。」

私は此時言葉を失みまして、

「して其時代は何時だ」

と尋ねますると騎兵の答ふるには、

「矣は上帝謂りが御存じなのだ、僕等は其詐るされるものを直ぐ間近の事だと頑んでゐたけれども今現在アルハムブラ城には有名なマンロー太守と云つて剛毅な老將軍が守護してゐるから、斯んな軍人が此大事な城に居て此山から最初に繰出さうと云ふ我軍兵を防止する用意をして居るのなら僕の考へでは『アブダル王も其家來迄も宋だ此山で武器を枕に寢てゐた方が樂だと思つてゐるだらうよ。」

と申しました。」

此時太守は其身體を眞直に反して其劍を握み片手で其鞘を拾り上げた

歩兵其先は至極手短に御話し申上げまするが彼の騎兵は此答をして後に馬から降りました、そして

「此處に待つて居玉へ、僕は今から王樣の處に行つて敬禮して來るから其間馬の番を願ひよ」

と言ひ捨て群衆と共に玉座の方に行つて了ひました、私は此時考へますには、私は彼の異教徒の奴が歸つて來る迄待つて居て、又此化物の馬に乘せられて歸途の伴れにされたなら何處で擯落されるかも知れないのであるから、今の間に此化物の群衆から逃出した方が好いのではあるまいかと斯う思ひますと閣下も御承知の通り軍人の決心は直ぐに附くもので御座いませう、此馬は何でゐるかと言へば我々の異教徒の熱も盛敵と明言した奴の所有で戰爭の法から言へば立派な戰利品でありませう、私は直ぐに體に足をかけて鞍壺に突立ち上り馬の腹に拍射を一つ呉れまして元來た通りに洞穴の出口の方に一生懸命で駆出しました、私は以前に見た軍隊の行列が石像の横になつてゐる廣場に參りますと私の耳に武器の鬨合ふ音と人の吐く横な聲が聞へましたから、私は又も拍射を呉れて馬の速力を倍になしました、すると後の方で暴風の吹いて來る樣な音がしまして百千の馬蹄の響がして無數の兵士が私を追かけて參りますと其爲に私は前に押出されました、遂に洞穴の口から突出されましたが其時數千の影武者は天風に吹散

されて四方八方に別れて了ひました。

此大混雜の爲に私は地上に撃落されて暫らく氣絶して居りましたが不圖我に回ると私は一つの小山の中腹に倒れて居て例の馬は靜と私の側に立つて居るので御座います。夫から好く檢べて見ますと私が落馬する折に手綱の中に手首を透して居ましたので私の考へでは此馬が私を振捨てゝ元の住家に歸る事が出來なかつたものと見えます。其時私が如何に驚いたかは閣下にも御判りでありませう。私の周圍にある物は南方植物の御眞木や無花果などであつて眼の下には大きな市街が見えて塔や宮殿大寺院などありませう。

私は夫から馬に乘らないで注意して山から下り始めました。若し馬に乘つたらどんな惡戯をされるか判らないのでありますから。夫から下つて來る途中で閣下の巡邏兵に出會ひまして私の前に見ゆる市街がグラナダであると言ふ事を聞されました。其爲に私は實際に彼の呪詛れたるムアー等が總て恐れを爲してゐる剛勇なるマンロー太守の居城なるアルハムブラ

城の下に參りました。私は此事を聞きましてから直ちに閣下に謁見して私が見聞した事を御詳申上げて閣下の御身邊否な足の下に隱れてゐる危險を御注進致し閣下に於て閣下の御居城を守護なさる御用意あると共に此國の地の下に籠つてゐる獅子身中の蟲の樣な敵兵をば此王國から退散させる樣な御工夫ある樣にと思つて參りまして御座ります。」

太守「處で貴樣の樣な古參兵で戰場の經驗に富んでゐる者だから尋ねるが此惡魔を防ぐのにはどうすれば好いと思ふのか。」

參兵は謹遜して。

「私共の樣な拙らない階級の者が閣下に其意見を述べるなどは甚だ恐入りまするが私の考へますには閣下には山の中心に入込む樣な總ての洞穴や岩窟の口を嚴重な石灰で閉いで了つて。*アブダルヤ其家族が悉く其地下の隱家に密閉されて了ふ樣になさりましたら好う御座りませう。」

と言つて彼の信仰の方に向いて敬禮をして十字を切りながら。

「そして此處に居らせらるゝ神父が十字架と聖徒の像を建てゝ其防禦物を

清める祈禱を爲し下さつたら、彼の異教徒の魔法の呪詛の力と對抗する事が出來ると考へます。

「夫は勿論大いなる効驗のある事ぢや。」

太守は此時突と立上つて劍柄に手をかけたまゝ兩手を後に廻して、歩兵の顏を睨めながら靜かに首を左右に打振り、

「夫で何か、貴樣は余が實際貴樣の馬鹿げた呪詛れたる山とか魔法の爲に閉込められたムアー人とか言ふ迷に誑らかされると思つてゐるのか、囚人奴、能く承はれ、最早貴樣は何も言ふ必要はない、貴樣も古老兵卒あらうが相手の余は尚一層の古老兵ぢやから貴樣などの手に合ふ樣な者でない、家來共、此奴を鎖の鎖で縛り上げろッ。」

最前から此場の有樣を見てゐた侍女は此時囚人の爲に一言口を挾まうとしたけれども太守は眼で以て默れと命じた。

夫から親衛兵が囚人に鎖の鎖を掛けやうとしてゐると一人が其ポッケットの内に何か嵩張つてゐる物に觸つたので其を引出して見ると何かしら一杯

物の這入つてゐる長い革財布であつた。そして其底を攫んで太守の前の卓の上に中身を振ひ出すと如何なる頭盔の財布でも此程の美麗な品物を吐出した事はなかつた。其品物とは指環や寶石の飾り眞珠の念珠や金剛石の十字架や種々なる古代の金貨等で、其内には床の上に轉がり落ちて遠か向ふの隅迄も飛んで行くのがあつた。此一瞬間こそは裁判の機關全く中止されて了つて其光り輝く落武者征伐の爲に皆々狂氣の如く騒ぎ廻つた。只太守一人は眞正の西班牙的の威嚴を保つて其位置を崩さなかつたけれども其眼光のみは最後の寶石が盡に歸る迄は多少心配らしく輝いてゐた。神父は太守の横に沈着てはゐなかつた。其顏は竈の火の樣に眞紅になつて念珠や十字架を見る眼は光り輝いた。そして、

「神聖なる寶物の盜賊よ、汝は何處の御寺から斯んな神聖なる品々を竊取して來たのか」

と責問ふたが、囚人は頗る落着いて、

「何處の御寺からでもありませぬ。若し神聖なる寶物を竊取したものであり

ますれば夫はズット昔の事で私の今申上げた長敬徒の騎兵の仕た事であります、私は閣下が御差止めになります時丁度次の通りの申立をしやうと思つて居りました、私が彼の馬を分捕しました時其鞍嚢に着けてありました革財布のあつたのを外づして私の懐中に入れました、其時私は其内を見ませんでしたけれども多分ムアー人が昔我國を征伏して居た頃の戰爭中に彼の騎兵が分捕した物であらうと思つてゐました。」

太守「夫で結構ぢや、其方は是から當分の間パーミリオン塔の一室に起臥する様に決心せねばならぬ、其處は別に魔法に閉ぢられた場所で無ないけれども其方の話した魔法に呪詛はれたムアー人の洞穴の様に確と其方を閉籠めて置く所ぢや」

囚人は冷やかに、

「閣下の御好み通りに爲るが宜しう御座ります、別して閣下の御城内に私を泊めて下さりますならば私は閣下に感謝します、閣下も御承知の通り軍人と云ふ者は宿舎に就ては別に苦情を申さぬもので、丈夫な寝屋で三度の食事さへ下さりまするならば私は兼に其日を送るやうに仕ります、只私の希望する所は閣下が私の一身に此の如き御注意を御拂ひ下さる間に、御城の要害を堅固になさる事と彼の山々の洞穴を塞める事を御忘れなさらない様に願ひます。」

是にて囚人の取調べは終つた、そして歩兵はパーミリオン塔の中なる堅固な寝屋に閉籠られて彼の亞剌比亞馬は太守の厩に革財布は其金庫の内に納められた、然し議員なる僧侶は此財布中にある神秘なる器物が何處かの寺院の分捕品であるとすれば御守の方で保管するのが至當であると主張したけれども太守は之に耳をも傾けないで終つたから、僧侶も非論を止めて此事をグラナダの寺院率行に訴へやうと決心した。

マンコー太守の此横敏にして斷乎たる所置を探るに至つた理由を説明すれば、此當時アルプザタラ山の地方に於てマニュエル、ポクスコと云ふ巨魁の下に優勢なる盜賊の群が跋扈して田舎を騒がせ、苦しきは商人などに強をやつしたる其使徒がグラナダの市街にさへ入込んで、商品輸送の有様や財寶を携帶

した旅客の進退を探偵して其途中の寂しい場所で之を襲ふ手段を講じてゐた。此等の遭難が屢々繰返さるゝので政府でも打捨てゝ置く譯に行かず各地の太守に命じて嚴重なる警戒を加へさせる事となつた。マンロー太守は別して其居城の附近が一番物騒であるから非常に嚴重な警戒をしてゐた際であつたから此回の捕縛は確かに賊徒中の最も兇惡なる頭領であると信じたからであつた。

此話は忽ちに風の如く傳はつて城郭内許りでなくグラナダ市全體の噂となつた。そしてアルプヤラ地方を震駭した賊徒の巨魁なるマヌエル、ボラスコが太守の手に捕縛されてパーミリアン塔の中にある堅固な牢屋に打込まれたと云ふので皆て其爲に掠奪された數害者は續々其見物に行くのであつた。然るにパーミリアン塔はアルハムブラ城とは別な丘陵の上にあつて其間には一帶の溪谷があつて其間に剛方を連絡する道路がある。而して塔の方には城壁が無くて其周圍は番兵によつて守備されてゐる。又彼の歩兵の監視せられてゐる一室には鐵柵を嵌めた窓があつて其外には小さい草原がある。此處

にグラナダの良民等は集合して此囚人を打眺むるのを常としてゐたが、而しながら誰一人其のマヌエル、ボラスコの顔を見識つてゐる者は無つたけれども其顔は獰猛な人相であるとの評判であつたから、此囚人の人相がお人好しの微睡みであるのを見ては誰も之を盜賊の巨魁とは信じなかつた。斯くて見物人は市街から來る許りでなく各地方の田舍から迄出て來たけれども誰も此男を見知つてゐる者は無つた。夫からして人民の胸の中では彼の話が多少事實ではあるまいと云ふ感念が生ずるやうになつた。

ポアブダル王と其軍隊とが山の下に閉籠められて居ると云ふ話は古老等が組先から傳へ聞てゐる所であつたので、多くの人々は日の山の頂に登つて歩兵の話したと云ふ洞穴の入口を探したが、成る程一つの洞穴の口があつて其其開い穴を覗いて見ると深さが何程あるか判らない之が今日迄も殘つてゐるポアブダルの地下の住居の入口として傳へられてゐるものである。

却説彼のパーミリオン塔の中に監禁されてゐる歩兵は次第に人民と盜賊になつて來た。元來西班牙の山賊なる者の性質は諸國の盜賊に比して最も頑惡

なるもので敵る筈であるのに此處の捕房は下等社會の者が見ても武勇に長けた只の人間としか見えないから、中にはヤンコー太守の清潔な所置を憤慨して囚人を目して殉教者などゝ同一視する者さへあつた。

囚人の歩兵は又愉快な話好きの男で窓の外に來る人々に向つて戯談を言つたり婦人などには一々お世辭を振撒くのであつた。そして何處から手に入れたか一張のギーターを所有してゐたので窓の下に來ては小曲や雑歌などを歌つて近所の婦人達を驚ばしむる。そこで婦人連中は毎夕方草原の處に集つて其歌に連れて舞踏するのを常とした。夫から其武者震ひに生れた顔顔を奇麗に崩つて了つたので其男振がズット上つたので、此時始も來合せて居た太守の侍女は其蒼白平分の秋波を拒む事が出來なくなつた。

此親切な侍女は太守の心を和げやうとして失敗したので夫から後は微かに其埋合せをする事にした。其爲に毎日太守の食卓に殘つた御馳走や衣所にある品騒平或時は酒の餞さへ持つて來るのであつた。

斯んな少さい謀叛が行はれてゐる一方には、猛烈なる職守が外部の敵から挑

まれて來た。夫は盜賊の巨魁と認定された囚人のボクケッドから寶石の一杯這入つた革財布が出たと云ふ事が非常に大袈裟にグラナダの評判となつて太守の强敵なるグラナダの守備隊長の爲に裁判の問題が起つて來た。其主張する所に由ると太守の城廓以外で捕まつた罪人はグラナダ地方官の裁判權の下にあるので其身柄と没收品とを引渡せと云ふのであつて、又一方寺院の行の方からは寺院の神聖を瀆したる賊物は之を寺院に没收すると云ふ掛合が始まつたので、双方盛に爭論をした末太守は窓地になつて彼の囚人は城廓の附近で捕縛した山賊の斥候であるとしてアルハムブラ城の内で絞罪に處すると宣言した。

次に守備隊長の方では一隊の兵士を繰出して囚人をパーミリオン塔から市中に移すと言出した。又寺社奉行は此事は政府の寺社局に訴へると恐迫した。此等の通告書は夜遲く太守の許に達したが太守は之を聞いて、

「來るなら來て見るがよい、余が如き老兵を相手にせうと思ふなら明朝餘程早く起て來なければ駄目ぢや」

と言つて聖朝非常に早く彼の囚人をアルハムブラ城の眞中に連れて來る樣に命令を下して、偖て例の侍女に向つて、

「明朝鶏が鳴いたら直ぐ自分の寢室の戸を叩いて呉れ。自分は此事を自身に指揮するつもりだから。」

と言渡して其晩は寢て了つたが、聖朝鶏が鳴き旭が登つたけれども誰も太守の寢室の戸を叩く者が無かつた。そして旭日は最早山の上に照つて其寢室の内を照す時一人の下士は忙たゞしく太守の前に出て、

「逃げました彼奴は行つて了ひました。」

と叫んだ。

太守「誰が行つたのぢや、誰が逃たのぢや。」

下士「少兵、盜賊、惡魔、私には何と呼んで好いか判りませぬが、見に角牢獄は空虛になつて居ります。然し戸は錠の卸りたまゝでありまして誰も彼奴がどうして逃げたか知つてゐる者はありません。」

太守「一番最後に見た者は誰ぢや。」

下士「閣下の御召使の侍女であります。彼の女が晩食を持つて參りました。」

太守「其侍女を直に呼んで參れ。」

此時又新たな混亂が生じた。侍女の室も又空虛で其寢臺には昨夜寢た樣子が無いずると疑ひもなく侍女は彼の囚人と共に脳落をしたので聞う言へば二三日來頻りに何か相談をしてゐた樣であるとの事であつた。

此事は老太守の心に非常なる憤怒を惹起させた。然し未だ何とも方がつかないでゐる内に更に大なる不幸が眼前に現はれた。

太守は其居室に行つて見ると大事の金庫の戸が開いてゐて少兵から取上げた革の財布は無論自分で貯蓄してゐた金貨入りの財布も紛失してゐた。

然るに彼の囚人は如何にして牢獄を逃れ又何れの方角に向つたは誰も知る者が參い。只山の方に登る路(みち)傍の小屋に住んでゐる百姓が其朝夜の明ける前に駿足の馬が山の上に登つて行く響きを聞いた。その時窓から覗いた所が一人の男が其前に少女を載せて行くのが見えたと云ふ事だ。

太守は此話を聞いて直ちに厩を檢(あらた)べさせたが、其所有の駿馬は皆な其處に居

たけれども彼の亞剌比亞馬丈けが紛失して居た。そして其鞍橋に一本の棚棒が縛り付けてあつて小さい紙片に、

此品は太守に贈ります――老兵士より。

と記載てあつた。

第六節

△獅子の庭の浴人齋
△モダル屋入の失敗
△魔術門の月夜寫生

幽靈と少女

今日ハアルハムブラ宮殿の迷策を代表する廣間や中庭の寫生をする事にしてユニヲー、ホール氏と同道で出かけた。尖からムジをは獅子の庭の所を水彩で寫生する。子は姉妹の間を油畫で寫生した。よじをが會て太平洋畫會の展覽會に出品した「獅子の庭」は此時の寫生である。するとユニヲーホール氏は寫生して居る人物讃共獅子の庭の寫真を撮つて呉れた。然るに今日の寫生には思ひもかけぬ珍らしい獲物があつたので記は繪の事よりも歴史上の事に移るのである。

予が始め姉妹の間に來て寫生を始めるとアルハムブラ宮殿中に會て見た事の無い亞剌比亞式の敷物があつて一偶には圓五尺程の壺が置てある。此壺は金箔が背色の亞剌比亞模樣のある燒物で、アルハムブラ中の寶物として見る可きものは此品許りであるが、夫に今日は如何なる日であるか知らぬけれどムアー時代の敷物迄が敷いてあるから、予は頗る好都合であると思つて頻りに寫生してゐると、意外な人物が眼の前に現はれた。(此壺は下に說く幽靈と少女の譚にある少女の父が寶を掘出した時の壺だと言傳へてある)

姉妹の間の外には一段低い中庭がある。其線見たやうな所から又次の室に出入する通路がある。其線側から白や淡紅色の絹を綴ふて矢張り同じ樣な單純な色の肩掛けをした二人の婦人が出て來た。子は妙な者が來たなと思つて讀

く見ると頭には寶石入りの髮飾を零付け、頸にも同じく寶石を鏤めた頸飾をしてゐる格子が純然たる亞剌比亞の風俗である。然し其顔は西班牙人である。から、是はムアーに化けたのだと覺つて其横子を見てゐると、其後から今度は三人の男が出て來た。夫も總てムアーの服裝で中の一人は眞正のムアー人であつた。其頭には白布を卷付け白の長い服を着けた壯武者が長い劍を提げて出て來たので、予は何事が始まるかと思ひながら暫らく繪筆の運びを止めてゐると、彼の二人の婦人は壁の横に來て敷物の上に立つたまゝ何事か頻りに饒舌つて何處にも行く風が無い。予は此寫生中に人物を欲しく思つて居た折だから、此ムアーの風俗をしたお誂向きの人物を得て嬉しくつて堪らなかつた。此珍客のお陰でアルハムブラの廢殿が愈々古風に見えて今迄は歴史上の遺物であつた物が俄かに生命ある實際となつて現はれた樣な氣がした。然し言語の通せない惜しさは此人達が何の目的で來たのであるか是から何事を始めるかを尋ねる事が出來ぬのには少々閉つた。

問う所うする内に此室の天井の寫眞になつてゐる處の上の方にも廻廊がつて其處から人聲がして下の連中と頻りに何事か應對してゐる。其處に寫眞師が器械を持つて來て此場の光景を撮影する。予が連れのユユーホール氏も又何時の間にか此處に出て來て居たので早速聯ねて見ると先生も好くは知らぬらしい。只何かの悪戯にする爲に撮影するのだらうと言つて居た。宮殿の番人も又何時の間に出て來て居る。

夫が濟んで一行はゾロ〳〵と獅子の庭の方に行くから又何か始まるに相違ないと予はカンバスも繪具も打捨た儘其後に跟いて行くと此處では樂隊しい音樂が始まつた。

先づムアーの風をした一人の男が噴水の側の泉水の中に飛び込んで脚丈け出して居ると一人は噴水の向側に打倒れて何かで頭を蔽して首を切られた人間の樣で寢てゐる。其處に最後の一人がボアブデル王の積りで劍を拔いて兩足を開張つて突立つてゐる。其姿勢を寫眞師が種々に注文をして直してゐる此一場の活人畫は皆ボアブデル王が自からアベンセレーゼス家の者の首を斬つたと云ふ傳說に由つたもので、今でも噴水の横には大理石の床の上に

其當時の血痕が殘つてゐると云ふ。予は示される儘に之を見たが只眞黑くなつた點々に過ぎないから或は大理石の斑點かも知れぬけれども、場所と歴史上の興味とを結びつけるには血痕として置た方が好いかも知れぬ。

此陰慘なる活人畫が解散さるゝと彼等の一行は又もや姉妹の間に歸つて行く樣子だから、予はミューホール氏に頼んで彼のムアーの風をした婦人をペダルに履つて見やうと談判をして見たが、一時間二十五法呉れと云はれたので其法外なる高價に驚いて止めにして了つた。聞けば彼等は何處からか其服裝や寶石の飾を借りて來てゐるので其方に高い損料を拂つてゐると辯解したやうだ。之はミューホール氏から後に聞いたのである。

ムアーのペダル履入れには就ては見事失敗したけれども予は此處に來る以前からの希望であつた獅子の歯の月夜を寫生するつもりで、歸りがけに醫人に相談すると、夫は出來ぬと謝絶つた。ブレントン、アービングの來た時代などは夜中の見物も自由であつたから彼の如き名文も出來てゐるのに、予が唯一の目的であつた月夜の廣宮を寫させて呉れないと言へば、予が此處迄來たのは

眼に赤毛布の見物となる了る譯だから、不充分な言葉で以て數回押返して頼んで見たけれども、人ばどうしても許して呉れぬ。少々金を書送して見ても又駄目であつた。予は新んな事ならマドリッドの日本公使館から紹介狀を貰つて來るのであつたと後悔してホテルに歸つた。

ホテルに歸つてから予は此事を獨逸の畫家に話すと先生も又其希望で是は公使館から紹介狀を貰つて來たけれども矢張り駄目であつたとの事左すれば彼等は怪談に富む此古宮殿に、夜間外國人などを入れて何かの間違が起つては濟まないと考へてゐるのであらうか。それとも反つて妖怪が出ないとなれば土地の評判が落ちるので其神秘を保つ爲に入れないのであらうか。又は地下室や火藥などに今でも眞大な寶が隠してあるとの迷信から、若し此等を探出されてはならぬと云ふので絶對に夜間の見物を禁止してゐるのではなからうか。

見に爲予は宮殿や内庭の月夜を見る事が出來ないから切ては外廊なりとも見て置き度いと思つて日暮れから昨日の晝間に寫生した彼の廣場門の方に